

# ソードアートオンライン 記憶の欠片

ショウユウ

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

キリトに従姉がいて、キリトを精神的に支えてくれる人物がいたら？

そしてその従姉がゲームの鍵を握っていたら。

そんな思い付きで生まれてしまった作品です。

作者は戦闘描写などは（ほとんど）書けません。なのでかなり省略します。

原作、またはアニメを見ている方限定の書き方になっています。

原作（アニメ）のストーリー展開となります。

時々オリジナルの話を入れてみようかと思っております（入らないかもしれませぬ）

作者は原作小説は読んでおらず、アニメオンリーです。

ですので、読者様にはつまらないかもしれませんが。

最後まで書けるかわかりませんが、投稿していこうと思います。

たくさんの方の作者様たちの作品を読んでいて頭の中を整理するために書いてみた作品です。

# 目次

第1話	1
第2話	11
第3話	25
第4話	51
第5話	77
第6話	100
第7話	128
第8話	150
第9話	175
第10話	195
第11話	219
第12話	247

第13話	277
第14話	299
第15話	325
第16話	352
第17話	371
第18話	391

# 第1話

私は多少躊躇いもあったものの、この世界に来てしまった。そう、VRMMORPGソードアートオンラインの世界に。従弟がこの世界に魅了され、叔母様は私に頼んできたのだ。

「あの子の様子を少しで良いから見てきて欲しいの。」

「そう言い、息子を心配していた。」

そんな姿を見せられて断れなかった。

あの人夢見ている、造り上げた世界。

遂に完成したんだね。

私の事などきつと忘れているだろう。

はじまりの街で従弟を探す。

そう言えばあの子のAvatarとキャラネームを確認し忘れた。

「あちやー、やっちゃった。取り敢えず遊んじやおう！」

そうそう、私はゲーマーだった。

だつ たのである。過去形だ。

学生時代には色々なMMORPGで遊んだ。

その後はゲームのグラフィックデザイナーをしていた。

それが2年前迄の私の仕事だった。

「はあ。2年も経つとついていけなくなるものね。はっ！忘れるとこだった！かー君探

さなきゃ。」

取り敢えず武器屋へ向かう。

「いらつしやいませ。何をお求めですか？」

NPCに声をかけられ、

「うーん…。」

返事にならない返事をしてしまう。

昔から弓での攻撃がほとんどだったので、この世界での戦闘はかなり厳しそうだ。

「ごめんなさい。また来ます。」

そう言つて店を離れた。

これは誰かにアドバイスを貰わないと、ヤバそうだ。

広場に戻り、アドバイスをくれそうな人を探していると迷いなく走り出した青年を見つけた。

「あの、すみません！」

私はその青年に走り寄り声を掛けた。

「?…何ですか？」

「突然ごめんなさい。もしかして、βテスターの方ですか？」

「はい。そうですけど」

「良かった！私、MMOは経験してるんですけど、剣を使った戦闘をしたこと無くて。色々教えていただきたくて。。。」

「ああ。構いませんよ」

そう言って、女子高生なら惚れてしまいそうな笑顔を向けて青年は講義を引き受けてくれた。

—————

青年から講義を受け基本的な戦闘方法も教わり、はじまりの街の近くの圏外で青イノシシを倒していた。

倒し終わった所で肝心なことを忘れていたことに気が付いた。

「あつ、自己紹介するの忘れてた！ごめんなさい！……エミリーです」

「あはは。俺も忘れてましたね。∴ ショウウです」

お互いに苦笑しながら握手をした。

「せっかく出会えたんですし、フレンド登録しませんか？」

ショウウさんはそう言つてフレンド申請してきた。

「ありがと〜」

私も嬉しくなり笑顔でOKをポチッと押した。

「ホント色々ありがと〜。今日は助かつちやった」

「エミリーさんはセンスが良いので、俺も教えるの楽でしたよ」

「あはは。勘が戻つて良かった。もう何年もゲームしてなかったからねー」

「そんな、何年もつて（笑）」

「ウフフ。中身は結構歳かもよ？まあこんな会話、男性は困つちやうわよね。フフフ」

ショウウさんは苦笑していた。

「女性に年齢を聞くほど俺は子供じゃないですよ。」

私達は歩きながら、景色を見ていた。夕陽が綺麗に風景を彩っていた。

「ホント、ここがバーチャルだつてのが嘘みたいだね」



「そうですね〜」

辺りを見渡すと、近くに男性二人の声が聞こえた。

会話はさつき私達が話していたのと同じ様な内容だったが、そのあとの会話に驚いた。

「シヨウさん、聞こえました?」

「ああ…マジかよ…」

急いでウインドウを操作し確認する。

「あらら、本当に無い…」

「無いですねえ…ログアウトボタン」

「まあ、そのうち運営が対処するで　しよ」

そんな会話をしながら思ってしまった。

アキさん、しっかり作ってよね…

暫くすると、鐘の音が響いてきた。

そして、私たちは青白い光に包まれていた。

いきなりで驚き、目を瞑ってしまった。

変な浮遊感がなくなり、ゆっくりと目を開けてみると、目の前の景色がかわっていた。

「どうやら、はじまりの街に強制転移されたみたいですね」

「運営からの説明でもはじまるのかしら…」

辺りを見ると次々にプレイヤーが現れた。

—————

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。私の名は《茅場晶彦》。今やこの世界をコン  
トロールできる唯一の人間だ』

アキさんによる、正式なチュートリアルだった。

ログアウトが無いのは仕様でゲーム内でHP全損すると現実世界でも死亡。 ナー

ヴギアによって脳ミソをチンツしてしまうそうだ。

手鏡なるもので、皆の姿は現実の姿へと変わっていた。

少し離れた所に、一緒に転移させられていた二人組の男性。そちらをみて思わず叫ん  
でしまった。

「えっ！かー君!!!」

「えええ!!もしかして、ゆう姉さん?!?!」

「やっど見つけたあ。よかったあ。見つかった」

「なっ、なんでこんな所にいるんだよ!!!」

「なんでって、叔母様に頼まれたからよ！まあ、見つかってよかったわ」

隣ではシヨウさんと、かー君の連れの方が挨拶をしていた。

「はじめまして、シヨウと申します。よろしく」

「あつ、どうも。俺あクラインっていいます、よろしく」

「あら、じゃあ私も！」

「!!」

クラインさんは私の方をみて、硬直していた。

「あのお…?」

「はっ、はじめまして！クククツ、クラインと言います！独身24歳です!!」

「フフ。はじめまして、エミリーです。クラインさんって楽しい方ですね」

笑顔で挨拶を済ませます。

するとクラインさんはかー君を引っ張って、コソコソと何かを話している。

「おい、キリト！エミリーさんとどういふ関係だあ??」

「…ええつと…従姉…」

「ほほお。」

「姉さん、結構歳くってんぞ?」

「かー君♪」

私は笑顔でカー君をみる。（余計な事言ってるんじゃないでしょうね？）

「…なんでもにやいよ？アハハハ…」

「そう。ならいいけど？」

三人はひきつった笑顔をしていた。まったく失礼しちゃうわ。シヨウさんまで…でも、彼は私と変わらなさそうな歳っぽいけど。

「あ、あのさ。姉さんここでは俺はキリトね。」

「了解。私はエミリーよ。」

「うん。わかった。でさ、三人ともちよつとこつちに来て！」

そういつてキリトは街の建物の路地へ私達を誘導した。

「俺は次の村へすぐに向かおうと思う。」

「おつ、俺もその事をエミリーさんに言おうと思ってた。」

「シヨウさんもβテスターですか？」

「ああそうだ。」

「？どおゆう事だ？キリトにシヨウさん？」

「MMO経験者なら解ると思うけど、ここがデスクゲームになったってことは、この辺のMobは直ぐに狩り尽くされてレベル上げも厳しくなる。」

「そっか、リソースの奪い合いになっちゃうのね。」

「そう。で、俺達は次の村まで安全に向かう道を知っている。一緒に来ないか？」  
「…」

「どうした？クライン。」

「俺は一緒には行けねえ。気持ちはすっげえ有り難いんだけどよお。キリトには話したが、一緒に此処へ来た仲間がいるんだ。そいつらを置いては行けねえ。」

「そうか。わかった。」

「クラインさんって漢ね！」

「いやあ、当然っすよ。キリトに教わったノウハウで、仲間と一緒に絶対追い付くから。構わず三人で向かってくれ！」

「…」

「シヨウさん？」

「エミリーさん俺、クライン君の所へ行っても良いかな？いいかい？クライン君」

「えっ？ってマジすか？シヨウさん。悪くないっすか？」

「なんだか君達を置いていきたくないんだ。」

「いいんすか？エミリーさん…」

「シヨウさんがそう決めたら。」

「すまない。」

「クラインさん達をお願いしますね。」

「…じゃあエミリー姉さんは俺と次の村へ向かうってことで良い？」

「ええ。」

「シヨウさん、クラインをお願いします。」

「ああ。任された。」

「キリトにエミリーさん。死なないでくれよ！」

「大丈夫。キリ君がいるもの」

「じゃあ、また!!」

「おお!…キリトよお!俺あお前のその顔、結構いいと思うぜ!」

「…クラインもその野武士面の方が10倍似合ってると思うぞ!!」

そんな会話をしながら私達は別れた。

—————

## 第2話

「はあ、やっとホルンカに着いたわね」

「出だしで、遅れたからね。だいぶプレーヤーがいるかな」

「じゃあ、宿屋探しが先かしら？」

「そうだね。どうする？節約して同じ部屋へ泊る？」

「キリ君が嫌じゃなきゃ、その方がいいかな。」

「別に気にしない・・・」

「そつ。じゃあキリ君探してきてね」

「ええー、俺が行くの？」

「当然でしょ。私じゃよくわからないもの」

「じゃあ、勉強がてらついて来てください」

「はあ、わかったわよ」

「基本、俺はソ口でやるつもりなんだけどな」

「まっ！酷い。私を捨てるつもりね!!」

「何言っちゃってんの!？」

「ふふふ。冗談に決まってるでしょ〜」

そんな会話をしながら宿屋へ向かう。

会話の最中にチラチラこちらを見ている人に気が付いた。

「ねえ、キリ君」

「ん？何、姉さん？」

「あっちの方にフード付きマントを着てる小柄なプレイヤーが、さっきから私たちを見てるような気がするんだけど？」

キリ君はそーっと私が指差す方を確認する。

「あ、アルゴだ」

「？プレイヤー名？」

「そ。β時代から情報屋をやっている《鼠》のアルゴさ」

「鼠？」



「会ってみればわかるよ。でも気をつけなよ。少し話しただけで、いろんな情報引っこ抜かれる!」

「へー。凄腕の情報屋さんね」

「まあ、腕と情報は確かだよ」

「そう。まあ、宿とりにいきましょ」

「ああ」

数少ない宿屋へ向かい、私たちは無事に部屋を借りることができた。

流石に二人部屋はまだ少し余裕があるみたいだった。

「ねえ、ご飯はどうするの? ちょっとお腹が空いてきちゃった」

「酒場があるから、そこへ行く? 飲むなら、お腹でたのむよ?」

「そうねえ。この世界ではお酒で酔えるの?」

「よっぽどお酒に弱くなきゃ、酔うことはないとおもうよ」

「じゃあ、1杯だけ飲む。キリ君も付き合いなさい!」

「未成年に酒勧めてるんじゃないよ!!」

「まあまあ。いいじゃない？ 保護者同伴だし」

「保護者かよ……」

「どうせ、βテスト期間中に飲んでたんじゃないの？」

「うう……」

「うふふ。はい、決定。叔母様には内緒にしておいてあげる♪」

「はあ……。まあいいか。んじゃ、行こうぜ」

キリ君の案内で酒場に着いた。

店内に入ると、客は一人しかおらず、先ほどこちらを見ていたアルゴちゃんが店内にいた。

「キー坊！ キー坊だろ？」

「やっぱりアルゴか」

「うふふ」

アルゴちゃんは腕をブンブン振って、私たちを手招きした。

「こんばんは。はじめまして。私はエミリーっついていきます」

「アルゴです。よろしく！エッチちゃん！」

「！」

「こいつはすぐ、あだ名で呼ぶんだよ」

「こそ。フレンドリーに行かないと、情報なんて集まんないダロ？」

「ちゃん付け、ちゃん付け♪」

「姉さん・・・そんなに嬉しいのかよ」

「あら、そりやそうよ」

「キー坊？エッチちゃんとはどんな関係なんだ？」

「はあ。このセリフ何回言わなきゃいけないんだ？」

「まあまあ。キリ君のコミュ障治すいい機会じゃない？」

ちなみに私はキリ君の従姉よ。アルゴちゃん」

「にや！おいらもちやん付け!!やるなあ、エッチちゃん」

「あら、だつて・・・アルゴちゃん、絶対私より年下よ？」

「因みに、エッチちゃん。実年齢、いくらで売つてくれる？」

「うーん、そうねえ・・・考えておくわ。年齢不詳の方が魅力的でしょ？」

「あつははは！そりやそうダ!!」

「そろそろ、飯食おうぜ。姉さん！」

「ああ、そうだったわね」

NPCが注文を取りに来ると、料理とお酒を注文した。

そして少し雑談をしていると、料理が運ばれてきた。

「この料理はずいぶん出てくるのが早いのね」

「姉さん？ここはゲームの中ですよ？忘れてます？」

「ああ、そうだったっけ。忘れてた」

「キー坊、エっちゃんつてもしかしなくとも天然サン？」

「ああ。かなり天然。本当にここがデスクゲームって理解できてるか、見た目じゃ疑わしい。」

けど、侮っちゃいけない。天然な癖して、頭はかなり切れる！」

「キリ君？褒めてる？けなしてる？」

「・・・褒めてます！」

「ホントお？」

「それより、明日だけ。この村で片手直剣が手に入るクエストがある。それを受けるからよろしくー!」

「ええー……。まあ了解。ねえ、ここの料理って、なんでこんなに不味いの?」

「これでも、βの時よりマシになったんだぜ?」

「ホントに!? ねえ、ここで料理って自分で出来るの?」

「……出来るけど……。もしや姉さん、料理スキル取るつもり? 取るんだつたらもうちよつと後でにしてよ」

「へー。出来るんだ。それもスキルが必要とは……。うーん。わかった。もう暫くは我慢する」

「キー坊は、エっちゃやんとならこんなに喋るんだナ。本当にコミュ障なのカ?」

「……小さい時から、姉さんに遊んでもらってたからな」

「そうねえ、可愛かったわあ。キリ君♪」

「姉さん!!」

お喋りしながらの食事は楽しかったわ。

あつという間に時間が過ぎていき、流石の私も眠くなったので宿へ戻ることにした。

アルゴちゃんとはフレンド登録を済ましてから別れた。

宿の部屋へ入ると、キリ君がボソツと何かを呟いた。

「姉さん、ありがとう」

私は眠くて、すぐにベッドへもぐってしまっていたのでよく聞こえなかったのだ。

そして聞き返すことも出来ず、意識が落ちていった。

翌朝、目を覚ました私たちは朝食もそこそこに武器屋へ向かいポーションなどを調達してクエストを受けに向かった。

そして、キリ君がNPCからクエストを受注しクエストが開始した。

私、他のゲームのクエストって昔から面倒であまりやらなかったのよね。

はあ。面倒……。まあキリ君の為だし、いっちょやりますか！

ってな感じで、クエストMobを狩っていく。狩って狩って狩りまくる。

ああ、いつになったら花つきのリトルペネントがPOPするのやら。

同じものばかり相手にしていて飽きてきたころ、私のレベルがアップした。

「姉さん、おめでと」

キリ君が素っ気なく言うど

「おめでとうございます！」

突然、背後から拍手が聞こえた。

「!？」

「あなたはどちら様？」

「あ、ごめんなさい。僕はコペルっています。あなた達も《森の秘薬》クエストを受けていたんですね」

「ええ、彼の為にね」

「あの、相談なんです。僕も《森の秘薬》クエスト受けているんですが、協力してくれませんか？ 勿論最初に出た花つきは其方に」

「キリ君、どうする？」

「まあ、いいんじゃない？でも、指示はこちらで出させて貰うぜ」

「・・・ええ。わかりました。お願いします」

「こちらこそ、よろしくね♪」

「姉さん？コペルがいるからってサボらないでよ？」

「てへっ♪ばれっちった！」

「・・・はあ」

「わかったわよお」

「俺はキリト。こっちのやる気がない方は俺の姉のエミリー」

「お姉さんでしたか！てっきり恋人同士かと」

「ええー、俺はこんな年増は嫌だ」

「キリ君♪私、宿へ帰っても良いのよ？」

「ごめんなさい！」

あはは！なんてちよつと狩りが賑やかになった。

暫くすると、やつと花つきがお出ましに。

でも、4体同時にPOPした。1体が花つき。1体が実つき。



実つきは実を破壊してしまうと周囲にいるリトルペネントを呼び寄せてしまう。そうなつては、こちらが危なくなる。

「姉さんとコペルは普通のリトルペネントを！実つきと花つきは俺がやる!!」  
「了解」

まあ、いい加減狩り飽きた敵だ。チャチャッと始末してしまおう。  
実つきと花つきをキリ君が片づけ、後はコペル君の分だ。

「姉さん、コペル。ちょっと移動しようぜ」

「ほーい」

「あつ、向うにまた4体POPしてますよ！」

敵に向かって攻撃をしながら会話する。

「お、いいね!!さつきみたいにチャチャッと終わらせちゃおう！」  
「姉さん、絶対飽きてるんだろ？」

「エーソンナコトナイヨ」

「あは。エミリーさんって可愛い人ですねえ」

「!!??」

「コペル。お前、年上の女性が好みなのか？」

「え？エミリーさん、10代ですよね？」

「はい？コペル、視覚障害出てないか？」

「ほへ？」

「姉さん！呆けつとしてないで、戦ってくれ!!」

「はっ！いけない、いけない！久しぶりに聞いたセリフに思わずビックリしちゃって」

「・・・」

私が固まっていた時、コペル君は姿を消していた。

「あれ？コペル君は?？」

「おい、コペル！隠蔽スキル使ってもリトルペネントには効かないぞ！MPKでもするつもりか？」

「えっ！」

「コペル君く姿をだしなさい♪」

観念したのか、コペル君は姿を現した。

「……ごめんなさい。僕……」

「あなたねえ、もしかしてずっとこんな事繰り返してるの？それだけの腕があるんだから、上を目指そうとか考えない訳？なんでこんなことしてるのよ!!」

すべてのリトルペネントを狩り終えたキリ君が戻ってきた。

「ほい、これ」

そう言つてキリ君はコペル君にトレード申請をした。

「えっ、酷いことした僕にこれを受けとる資格なんてないよ」

「ま、これで終わりにしてくれ。これ以上俺達と関わらなければそれでいいよ」

「っ！ごめん。ありがとう」

「さ、行こうぜ姉さん」

「じゃ、コペル君。バイバイ」

私達はクエストNPCの所へ移動をはじめた。

無事にキリ君の武器が手に入り、宿へと戻る。

なんとも後味が悪いクエストだった。

今日は疲れたので、食事は簡単に済ませ寝ることにした。

## 第3話

デスゲーム開始から早くも1ヶ月が過ぎようとしている。

まだ第一層は攻略されていなかった。

俺達は今、迷宮区の攻略をしている。

「そう言えば、もうすぐボス部屋が見つかるって、ディアベル君が言ってたわ。」

「うわー、先越された！やっぱ人数いるパーティーの方が効率いいのか？」

「どうなんだろうねー」

「姉さんがもつと積極的に攻略してくれば、効率良くなるのでは？」

「えー、これでも殺ってる方じゃん？キリ君一人で攻略行けば？って私は言ったじゃない。それを色々言っつて、無理矢理連れてきたのはキリ君なんだし・・・」

「ホント姉さんやる気ないね」

「ああ、そういや今日ボス攻略会議を開くって。」

「はい？今日だって？どこで会議だって？何処からの情報？」

「んー、会議はツールバーナで行うそうよ。ディアベル君から。直接メッセージ来た」

「姉さんって何気にフレンド多いよな」

「私からフレ申請する事ってあんまりないんだけどなあー」

「皆その見た目に騙されてるよなあ」

「まつ！失礼しちゃう！！夕飯抜きにするわよ！」

「ごめんなさい。俺が悪かったです」

「解ればよろしい！」

姉さんは童顔だ。クリツとして大きく焦げ茶色の瞳、鼻はスツと筋が通っているが小振りで、口は大きくもなく小さくもない。各パーツはともバランス良く配置されている。る。

頬はほんのりピンク色、そして艶やかな黒のロングヘア。前髪は切り揃えられ幼さを強調させている。

身長は俺より少し高いくらい。

とても三十路近い人間とは思えない。天然キャラもプラスされ、余計に歳が読みにくい。

余談だが、スキルスロットが増えた途端に料理スキルを入れた強者だ。

まあお陰で美味しいご飯が食べられているのは有難い。

それと、不思議なんだが索敵スキルを取っていないのに、敵を感知出来る。

前に聞いたら『なんとなくー♪』だそうだ。

「あつ、私はボス戦参加しないからヨロシク！」

「えっ！なんで？」

「うーん、内緒♪」

「まあ、強制はしないよ。」

「ディアベル君にも了承してもらってるからね♪」

「抜き無いですね」

「んふふ♪」

鼻歌うたいながら、敵を殺しまくってる人のセリフじゃない！

姉さんでも、ボス戦は怖いのかな・・・いや、絶対に面倒とかそういう理由に決まっ

てる・・・

「ほら、じゃあ街に戻るわよ♪」

「ああ」

暫く歩いていると、少し先に流星が見えた気がした。

「うわー、あの人凄いな〜」

「ああ、剣技が綺麗だ」

近付きながら、俺達は見とれていた。

敵がポリゴン片になったあと、そのプレイヤーがこつちに気が付いた。

「なんですか？」

聞こえた声は女性だった。

警戒させないため、姉さんが話しかける。

「うん、素敵！凄く技が綺麗だったから思わず見とれたの♪」



「ありがとうございます」

「なあ、余計な事だつてわかってるんだが、少しオーバーキルだったぜ」

「それがなに？」

「うんとね、私も時々やるんだけど。もし、敵を殺した後直ぐに新たに敵が沸いたとすると、技後硬直で危ないよね」

「そう・・ですね。でも、ホント余計なお世話です」

「ごめんね。でも、貴女の事がちよつと心配」

「敵が沸いた。行きますので、失礼します」

そう言つて彼女は、行つてしまった。

「うくん、もうチョツと様子みてよう」

「ああ」

俺達が見ていると彼女は敵を葬つた後、突然倒れ込んだ。

「大変！」

そう言つて姉さんが駆けつけたので、俺も着いていく。

「キリ君、彼女を運びましょ」

「姉さん運べる？」

「たぶん大丈夫」

ふんっ！と言いながら姉さんは彼女をおぶつた。

そのまま、安全地帯に運び彼女を横にする。姉さんは彼女に膝枕していた。

「私が彼女を看ているから、キリ君は見張りヨロシク♪」

「ん、了解」

俺は少し離れた場所へ移動した。

「あつ、目が覚めた？」

「あれ？私……」

「うん、あの後貴女が倒れちゃったから此処まで運んだの。」

「……!!ごめんなさい。ありがとうございます」

まさか膝枕で寝てるとは思わなかった！恥ずかしい／＼／

恥ずかしさの余り、慌てて飛び起きてしまった。

でも、凄く良いにおいで久々にグツスリ眠れた。

幼い頃、まだ母に甘えが許された頃の様な。

「キリ君く、目え覚めたよ〜」

「おつ、起きたか」

「大丈夫よ〜。彼には見張りをずっとさせてたし、こつちを覗ける根性もない子だから

♪

「むっ」

「ふふ、事実でしょ」

「・・・」

「ところで、貴女は倒れ込んだじゃうほど此処に潜っていたってことね。なんでこんな無茶をしているのかしら？」

「初めはあの街に籠っていたわ。未だに第一層すら突破出来てない。どうせこのゲームから脱出出来ないんだったら、このゲームに負けたくないって思った。」

「そうか。だったら出てみるか？ボス攻略会議に」

「そうね。二人でいってらっしゃい。美味しいご飯とお風呂を準備して待ってるから」

「・・・!?今、なんて仰いました?!

「え？美味しいご飯とお風呂を準備して・・・」

「あの、お風呂付き宿って有ったんですか!」

「ああ、そうよね。女性なら当たり前よね。」

「でも、もう空いている所は無いかもなあ・・・」

その一言を聞いて

私は思わず泣きそうな顔をしてしまった。

「あー、私達が借りている宿へいらっしやい。お風呂貸してあげるわ」

「! いいんですか!!!」

「ええ。女の子ですものね。私だって、この子に無理言つて探させたのよ」

「ありがとうございます!!」

やった! お風呂に入れる! もう我慢の限界だった。

「あの、今すぐに行つても平気ですか?」

「うーん、でももうすぐボス攻略会議が始まるはずだから、先にそっちへ向かった方がいいかもね。会議が終わつたら、この子に案内してもらつていらっしやいな」

「はい。ありがとうございます!」

「じゃ、急いで戻りましょう」

「姉さん、走つた方がいい?」

「んー、そうね。その方が良さそうだけど、貴女は大丈夫?」

「はい! 会議にさっさと参加して、急いで戻ります!」

「キリ君後よろしくね〜♪」

「ああ。じゃあ行ってくる」

キリ君と呼ばれた彼と、私は急いで会議場へ向かった。

私は、宿へ戻る前に食材でも調達しに行こうと思い、林の中へ向かっている。

「ふんふくん♪今日はどんな食材がとれるかなあ♪」

「あれ？エっちゃんじゃないか！」

「あら、アルゴちゃん一昨日ぶりね」

「エっちゃんは会議でないの力？」

「うん。私はボス戦には参加しないよ」

「それだけの腕があるのに勿体ないナ」

「アルゴちゃんは、情報収集かしら？」

「ああ、ボスの情報がβから変更ないかの再確認してるんだ。エっちゃんは？」

「食材集めよ。食べ盛りがいるし、今日はお客様も来るからね」

「客？」

「ええ、迷宮区で倒れちゃった女の子を保護してね」

「もしかして、アーちゃんカ？」

「アーちゃん？あつ、あの子の名前聞くの忘れてたわ。てへっ♪」

「たぶん、アーちゃんだと思うゾ。物凄く剣技が綺麗で細剣使ってる、フードかぶった子  
ダロ？」

「うん！そうそう。その子！知ってるの？」

「・・・うーん、通常料金取るところだけど、エッチちゃんならいいカナ。マップデータを  
いつもタダで渡してくれるしナ」

「ふふふ。相変わらねえ。儲かりまっか？」

「ボチボチでんナ。んと、彼女の名前はアスナ。フードの中はかなりの美人さんダゾ。  
ここ3日間ぐらい迷宮区で寝泊まりしながら、物凄い剣幕で攻略していたナ」

「武器はどうしていたのかしら？どうやら武器屋の細剣使っていたみたいだし」

「それだと、おそらく使い捨ててやつだろうナ」

「まあ。危なっかしいわね。アルゴちゃん、何処かで良い細剣手に入らないかしら？」

「1000コルナ」

「はい、1000コル」

「毎度。一つ前の村にクエストを受注できるNPCがいるんだ。そのクエストでレアなレイピアが手に入るヨ。クエストはスローター系だな」

「今から行つて、会議が終わるまでに間に合うかしら・・・」

「エつちゃんの腕なら、間に合うと思うゾ。どうしてアーちゃんの為にそこまであげるんだ？」

「うーん、あの子なんだかほっておけないのよね」

「そうか、まあエつちゃんらしいナ」

「うふふ。情報ありがとうね。じゃ、アルゴちゃんも頑張つてねー」

「おおー。またナ！」

私は俊敏値最大で、クエストを受けられる村へ向かった。

---

いやー、狩って狩って狩りまくった。



だってね、100匹の狼を狩って来いって！

エミリー無双ってヤツですよ。

クエスト受注して1時間で片づけました♪

で、無事にレア武器《ブルームフルーレ》をゲット♪

急いで宿屋へ戻る途中、食材を手に入れていないことを思い出し慌てて買い物へ。

なんとか材料も手に入り、キリ君たちが戻る前に宿屋へ着いた。

「ふう。間に合った」

宿屋へ入り装備を外して、この間友達に作ってもらったエプロンを着ける。

もうじき帰ってくるから、今から料理すれば間に合うでしょ。

ここSAOの料理は物凄く簡単♪面倒な下ごしらえも、包丁を一振りで見切れちゃうし。

焼くのはグリルに放り込んで、タイマーセットするだけ。煮込むのだからオーブンに入れてやっぱりタイマーセット。

炒めるのもフライパンに材料放り込んでボタンをポチッとするだけ。火の通り具合だけみてボタンで止める。

現実の料理もこんだだけ簡単だったら、世の中のお母さんがどれだけ楽できるかわかりません!!

そうそう、唯一調味料だけは自分で探して調合しないといけない。これがまた面倒だね。

頑張つて、塩と醤油と砂糖だけは何とかしましたよ。(全部もどきだけどね)料理の基本ですからね。

まだ味噌とみりん、マヨネーズやソース、ケチャップなども解析中。

キリ君が屋台で売れないか?なんて言っていたけど、その後すぐにダメだ!なんて叫んでたっけ。俺の分がなくなるとか何とか言っていたわ。

そんな面倒なことするわけないじゃないの、この私が……。ねえ?

丁度料理が出来上がった時にキリ君が帰ってきた。勿論アスナちゃんを連れてね。

「ただいまー」

「お邪魔します」

「お帰り〜、いらっしやい」

「おおー、いい匂い!」

「キリ君、装備外しなさいよ」

「エミリーさん、お風呂を……あつ、お名前はキリト君から聞きました。私はアスナつて言います。すみません。自己紹介が遅れてしまつて」

「いいのよー。私もうっかり忘れちゃつてたし。お風呂はこの奥の扉の部屋ねー」

「はい！早速お借りします！」

そう言つてアスナちゃんはフードを外し、90度にお辞儀をしてお風呂へ一直線。

「礼儀正しい子ね。何処か良いところのお嬢様つて感じ」

「そうか？俺には結構冷たかつたけど……」

「女の子だもの。男性のこと警戒するのはいい事だわ」

「姉さんは、ないな。そういうの……」

「あら、私だつて多少は警戒しているわよ。ただ、年の功つてやつよ」

「微妙に使い方が違つているような……」

「気のせい♪気のせい♪」

「……やっぱり彼女が出てくるまで、ご飯はお預けだよな……」

キリ君は少ししよんぼりしている。

「そうね、その位は我慢しなさい」

「へーい」

「久々のお風呂みたいだから、長いかもしれないわね」

「ガツクシ」

「ふふふ。まあ、あまり長いようなら先に食べていいか聞いてくるわよ」

「よろしく頼みます！」

「そうそう、会議はどうだったの？」

「シヨウさんが来てたよ！」

「あら、間に合ったのねえ。良かったわ」

「え？連絡してたの？」

「ええ、ディアベル君からメールが来て直ぐに連絡したわ」

「そっか。姉さんによろしくって言ってた」

「うん。で、会議で何か面白いことあった？」

「ああ、最初はディアベルがいい感じでスタートしてさ。そしたら、キバオウって奴がいちやもんつけてβテスターを吊るそうとしたんだ。」

で、エギルって大きなアフリカンな人がガイドブック出してね。このガイドブックはβテスターが作ったもんだって。更にはじまりの街で初心者にずっと指南していた人もいるって。

それって、シヨウさんだったんだな。俺知らなくてさ。最初は申し訳なくて、声が出せなかった。でも、シヨウさんが俺のことも庇ってくれて。

そうそう、シヨウさんの二つ名が《先生》って皆が言ってた。驚いたよ。その後は、パーティー組んで解散になった」

「じゃあ、次はボス部屋が見つかってからまた会議かしら？」

「ああ、そうみたいだ」

「じゃあ、この剣も慣れる時間は有りそうね」

「？」

「あのね、貴方達が会議に行っている間に、アスナちゃん用に《ブルームフルーレ》をとってきたの」

「・・・ええ!!」

「だってあの子、たぶん武器屋で買ったものを使い捨てにしている感じだったし」

「それにしたって・・・」

「まあ、いいじゃないの。お近づきの印にプレゼントしようと思ってね」

「姉さん、人が良すぎじゃないか？」

「そんなこと無いわよ。世の中持ちつ持たれつよ」

「はあ・・・」

「さつてと、そろそろ30分たったし様子を見てこようかしらね」

私はソファから立ち上がり、お風呂場へ。

ノックをすると、返事がなかった。まだ浴室にいるのだろう。更に脱衣所へ入り再びノックする。

「はあーい」

「お湯加減どうかしら？なんてね♪ゆっくりしているところ、悪いんだけど」

「はい」

「キリ君がお腹空かしちゃってるんで、先に食べさせちゃっていいかしら？」

「あつ！すみません。私のことは気にしないで、お先に食べてください」

「ありがとうね。ごゆっくりー」

「ありがとうございます」

脱衣所を出て、再びリビングへ。

「先に食べてて良いそうよ」

「おっ、ありがたい。では、いただきます！」

「はい、召し上がれ」

「姉さんは？」

「私はアスナちゃんを待つてるわ。彼女の分をストレージに入れておかないと、耐久値が落ちちゃうしね」

「なんか、ガキでごめんなさい」

「いいのよ、気にしないで」

キリ君はちよつと申し訳なさそうに食事を始めたが、食べ始めるとそんな事忘れたかのように食べている。

それを見ていて、私も嬉しくちよつぴり悲しくもなり、眺めていた。

キリ君が食べ終わるころ、アスナちゃんがお風呂から髪の毛をタオルで拭きながら出てきた。

「ふうー。いいお湯でした。幸せです！」

「大袈裟だなあ。風呂ぐらいで・・・」

余計なことを言ったキリ君をアスナちゃんが凄いいい笑顔で睨んでいた。

「キリ君、あなたはさっさとお風呂へ行きなさい！」

「へーい」

「お先に、お風呂ありがとうございました」

「うん、さっぱりして良かったね♪」

私はストレージから料理を取り出し、テーブルに並べた。

「うわー！これ、全部エミリーさんが？」

「ええ、まだスキル値が低いからこの程度しか出来ないけどね」

「それでも、ごちそうです！毎日、ボソボソの黒パン1食だけでしたし」

「まあ、すごい精神力ね。これくらいの楽しみがないと、この先やっていけないわよ。」



さっ、食べましょ」

「はい、いただきます」

「召し上がれ♪」

アスナちゃんは最初の一口をゆっくり口へ運び、舌で味わうように食べていた。

そして、勢いよく食べ始めた。

「ふふ。アスナちゃん、そんなに慌てなくても料理は逃げないわ。ゆっくりお食べなさい」

「あ、あまりに美味しくて・・・」

そう言った途端、アスナちゃんが泣き出してしまった。

「ごめんなさい。わたし・・・」

「うんうん。一人で頑張ったんだね。偉い偉い」

私はそう言いながら、アスナちゃんの頭を撫でてあげた。

「なんかエミリーさん、お母さんみたいで」

「あら、こんなに大きな娘をもった覚えはないわ？でも、アスナちゃんみたいに綺麗な娘だったら欲しいわね！」

「・・・ふふ。エミリーさんったら」

「どう？少しは落ち着いたかしら？」

「ありがとうございます。料理もすごく美味しいです。今度私も教えてください！」

「あら、いいけど。料理スキルなのよね。この先攻略を進めていくなら、スキルスロットに余裕が出てからの方がいいと思うわ」

「あ、わかりました。じゃあ、レベルを上げてスロットに余裕が出来たら教わりに来ます」

「ええ、いつでもいらっしやい。待つてるわ。あつ、それからね。これ、知り合えた記念にプレゼント♪」

アスナちゃんにトレード申請する。

「えっ！これって、《ブルームフルーレ》ですよ？良いんですか？こんなレアアイテム

！」

「うん、遠慮なく受け取ってちょうだい。丁度手に入ったものだから」

「なんだか、色々ありがとうございます。エミリーさんと一緒にキリト君が少し羨ましいです」

「ふふ。いつでも遊びに来て。って言っても、この先攻略を進めていかないと現実にも帰れないものね。頑張って」

「エミリーさんはボス戦は参加しないって伺いました。なにか理由でもあるんですか？」

「うーん、内緒♪理由はいずれね」

「そうですか・・・キリト君が言うには、エミリーさんが参加してくれると早く終わりそうだと」

「あの子もまだまだ子供ね。甘えん坊なんだから・・・」

「それで、躲してしまいうエミリーさんは大人ですね」

「ふふ。あの子のお母さまから、よろしくされちゃって私もこの世界へやってきたの。まさか、こんな事になるなんてね」

「私もなんで？って何度も思いました。ちよつと息抜きしようとしてログインしたばかりに・・・」

「ああ。ごめんなさい。こんな湿っぽい話は無しにしましょ。せつかくの料理が不味くなっちゃうわ」

「そうですね。本当にエミリーさんの料理はお母さんの味です。お店出したら、皆あつまっちゃう」

「ありがとう。でも、そんな面倒なことするつもりはないわよ。何処かで、機会があつて1日限定とかだったら、やつてもいいけどね♪」

「面倒つて・・・エミリーさん、そんな風に見えないのに・・・。あつ、でもキリト君がそんな事をぼやいていたかも」

「私は基本、面倒くさがりです！」

「そんな、えぼつて言わないで下さいよー」

「あははは」

その後、食事は楽しく終わった。そうそう、キリ君が出てこなかったでしょ？なんか、出てきにくかったんですつて。

珍しく長風呂呂だと思つたら、単なるヘタレ君でした♪

「本当に何から何まで、ありがとうございました。私、この世界でも無理していたみたい

です。きっとこれが現実だつて認めたくなかつたのかもしれない。

でも、エミリーさんに出会つて少し考えが変わりました。私なりに現実へ少しでも早く帰れるよう頑張つてみようと思います」

「よかつたわ。まあ、会議は明日以降でしょうから。パーティーでの戦闘も少し慣れておいた方がいいわ。明日、また迷宮区で新しい武器で練習しておきましょう」

「はい！」

「でも、戦闘に関してはキリ君に教わつてね。私、戦闘を人に教えるのからつきしダメだから」

「・・・キリト君、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。ボス戦と一緒に戦うんだ。敬語は無しにしよう」

「そうね。じゃあ、エミリーさん。また明日」

「キリ君、すっかりアスナちゃんを送つていくのよ？ 帰りは、どうしようとキリ君の勝手だけどね」

「了解」

「案外、放任主義？」

「ふふ。このぐらいの男の子は扱いが難しいのよ」

「行こうぜ」

「おやすみなさい」

キリ君たちが見えなくなるのを確認して私は戸締りをし、お風呂へ向かった。

## 第4話

翌朝アスナちゃんにメッセージを飛ばし、軽く朝食を済ませてからポーシヨン等の準備をして迷宮区の入りに向かう。

キリ君は夕べから宿へは戻ってこなかった。  
途中で、シヨウさんとディアベル君に会った。

「おはようございます」

「おはよう。どつたの？二人揃って・・・」

「ボス攻略の事ですよ。エミリーさんは参加しないって、キリト君からきいたもので。」  
「うん、参加しない。なんでかなあ、皆して。私が参加したところで大した戦力にならないだろうし、却って迷惑かけちゃうよ？それにディアベル君には了承得てるわよね？」  
「そうなんです。やっぱ、シヨウさんと話をしましてね。納得いかないといひますか・・・前回の会議、ビギナーとβテスターとが揉めるって判ってて《先生》を呼んだ

んじゃないんですか？」

「ああ、その事！単なる偶然よ？シヨウさんは強い人だもの。攻略の助けになるかもつて、連絡を入れただけよ」

「貴女は自分をわかつてない！貴女はきつと皆を纏められる人なんだと思う」

「シヨウさんまで・・・私はそんな大層な人間じゃないわ・・・。本当にごめんなさい。ボス戦だけは参加出来ないの。お願い、退いてちょうだい」

いいえ、私は私を理解している。しているからこそ、どうしても参加してはいけない理由がある。

でも、まだ皆には話せない。私というイレギュラーが皆を危険に晒してしまうということ。

「貴女がそんな悲しそうな顔をするなんて」

「何か大きな事情があるんですね。わかりました、今は退きます。いつか理由を話して下さい。力になりたいから」

「ありがとう。私、人を待たせているからもう行くわ。生きてまた第二層で会いましょう！」



「必ず！」

「ディアベル君、皆を宜しくお願いね」

「はい。2回目のボス攻略会議を今日の午後1時から始めますので。」

「うん、あの子達には伝えておくよ！」

私は二人と別れ、待たせているだろうキリ君とアスナちゃんのいる所へ今度こそ走って行った。

---

待たされてキリ君がちよつと苛ついてたけど、敵を見つけた途端に機嫌は直つていった。

迷宮区でのパーティー練習は凄く良かった。

特にキリ君とアスナちゃんが息ピッタリなのだ。

見ているとアスナちゃんがキリ君に良く合わせている。攻撃も精密機械並みだ。

「エミリーさんから頂いたこのレイピア、私の手に凄く馴染んでいます！羽根のように軽いのに、凄いい切れ味。それに高い耐久力。本当にありがたいがとうございます！」

「ふふ、喜んで貰えて良かった♪」

「大切に使います！」

「そのレイピア、強化すれば暫くは使えるな」

「キリト君、後で武器についても詳しく教えて」

「ああ。了解」

「随分、二人とも打ち解けてきたね♪」

「ボス戦のパートナーだからな」

「そうですね！」

「そうね♪その調子でボスなんか軽く殺つてしまいなさい！」

「サラツと言いますね、エミリーさん・・・」

「姉さんは何時もだよ。今日も平常運転ですね」

「うん♪さ、今日の午後2時から2回目のボス攻略会議ってディアベル君からの伝言♪」

「もうすぐ昼か。姉さん、今日は弁当あるの？」

「ごめんね、作ってない！なので、トールバーナでご飯にしましょ。この前、美味しいお店を教えて貰ったから」

「じゃあ移動するか・・・」

「キリト君、残念だったね。エミリーさんのお弁当楽しみにしてたのに」

「そう言うお前だって、おんなじ様な事言ってたろ」

「はいはい、喧嘩はしないでね。私が悪かったって」

「姉さん（エミリーさん）は悪くない（です）!!」

苦笑いしか出来ないわ、この二人見ていると♪

なんだかんだで賑やかにトールバーナへ到着。

教えて貰ったお店へ入り、昼食をとった。

「・・・なんか残念な味だった」

「そうかしら？NPCのお店では、そこそこ美味しかったと思うわ」

「エミリーさんの料理と比べてるんですよ、キリト君」

「キリ君はホント食いしん坊さんね」

「姉さんの料理が美味すぎるんだよ」

「まっ、褒めても何も出ないわよ」

「でも、デザートはチョットいけますね」

「うん、そうね。キリ君も一口食べる？」

私はフォークでケーキの最後の一口をとってキリ君に差し出した。所謂あーんである。

「あーん。(パクツ)・・・ああ、これは結構美味しいな」

「(キリト君、結構可愛いところがあるんだなあ。甘いもの好きなのかな?)」

「言ったでしよ。さて、食べ終わったら二人は会議場へ向かいなさい。ここは支払っておくからね」

「ラッキー。姉さんサンキュ！」

「えっ、悪いですよ。支払います！」

「アスナちゃん、ここは大人に任せなさい！」

「・・・すみません。ごちそうさまです」

「はい。じゃ、行った行った!」

二人は席を立ち、アスナちゃんはお辞儀をして、キリ君は笑顔でプラプラ手を振りながらお店を出ていった。

私も席を立ち、別の人物がいる席へ移動した。

「ア〜ルゴちゃん!」

「おつ、来たカ」

「どう? 情報間に合った?」

「ああ、何とかナ」

「じゃあ、偵察戦はしなくてOKかな?」

「ああ。これをディアつちに渡して来れば、万事OKダヨ」

「良かった。死者なしで、乗り切れそうね」

「・・・エつちゃんは、何でもお見通しな感じがするナ」

「うふふ。私はエスパーだもの!」

「マジカ!!」

「あはは！冗談に決まってるでしょ」

「なんだ、本気にしたゾ」

「ま、この辺はリアル情報になるから秘密♪」

「じゃあ、ディアつちのところへ行ってくるヨ」

「は〜い。まったね〜」

アルゴちゃんはディアベル君の所へ行つたし、私も情報収集して裁縫師のアシユレイの処へでも行きますか！あつ、アシユレイはエプロン作ってくれたお友達よ。

この間、レイピア取りに行つた時に素材が少し出たんだ。いつも彼女は素材を買い取ってくれるから助かるんだよね♪

そろそろ会議が始まる。今日中にボス戦をやるのだろうか。キリ君、うまくやってくれるといいな。

---

午後3時半頃、第2層の転移門がアクティベートされたと、はじまりの街はお祭り騒ぎになっていた。

死亡者は無し。アルゴちゃん情報により何事もなく無事にボス攻略された。

アルゴちゃんはギリギリまで情報を集めた。最後の情報は、ボスのHPバーが最後の1本になった時、武器を変更するという情報だがその情報はβ時代から変わらない。

どんな武器に変更されるのか、キリ君が頻りに気にしていたのだ。私はその事をアルゴちゃんに相談し、最後まで奔走してもらったという訳だ。

何はともあれ、あの子たちが無事でよかった。キリ君が帰ってくる前に、夕飯の支度をしておこう。今日はご馳走にしなきゃね。

アシユレイの店を出たとき、丁度メツセージが来た。キリ君からだ。何々?…メツセージを読んで、私は思わず

「なんですとー!!!」

と叫んでしまった。

メツセージの内容は、キリ君以外の6人がアスナちゃんの案内で私たちの宿へ来ると言うのだ。そりゃ叫びたくもなるでしょ?

私は慌てて、食材の買い出し。  
更に、急いで宿屋へ戻った。

「ふいー、何とか間に合った！」

料理を作り終え、一息ついたところでドアのノック音が聞こえた。

「はーい」

「エミリーさん、来ちゃいました♪」

「アスナちゃん、お疲れ様♪」

「皆さん外で待っていただいてます」

「うん。アスナちゃん、皆を読んでもらえる？」

アスナちゃんは扉を開けて皆を呼んだ。

「皆さーん、入っていいそうですよー」



ワイワイガヤガヤ、6人は部屋へ入ってきた。

「みんなさん、エミリーさんに会いたいとおっしゃって。収集つかなくなって……。そしたら、シヨウさんがキリト君にメッセージ送れって」

来たお客は、シヨウさん・ディアベル君・エギルさん・リンドさん・キバオウさん・アスナちゃんだ。まあ、凄いメンバーですね。

「全員は座れないので、立食にしました。ちょっと料理が少ないかもしれないけど、許してね」

「そんな、突然お邪魔したんですから。なのに料理があるなんて俺は感激ですよ」

シヨウさんとディアベル君のセリフがハモった！この二人も息が合っているみたい  
ね♪

「あんさんが、ディアベルはんがいつも話しているエミリーはんか。初めまして、キバオ

ウってもんや。よろしゅうな」

「キバオウ！余計なこと言わないでくれ！」

ディアアベル君は顔を少し赤くして照れている。可愛いわね♪

「さあ、挨拶はご飯を食べながらでね♪どんどん食べてね」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

思わず、お残しは許しまへんで！って言いそうになっちゃったわ♪

「本当に皆無事で良かった！」

「途中、ヒヤツとする事がありましたけど何とか終わりました」

「ところで、キリ君は？何か用事ができたってメッセージに書いてあったけど？」

「そうそう、2層の転移門をアクティベートした途端、3人のプレイヤーが転移門から凄いスピードで飛び出してきて、そのままの勢いで圏外の方へ行っただんです」

「で、それを見ていたキリト君がそのプレイヤーを追いかけて行っちゃいました」

「そう。何かあったのね。たぶんキリ君なら大丈夫ね」

「エミリーはん！ごっつい美味しいですよ。この魚の煮つけなんて最高や！」

「ありがとつ、キバオウさん♪」

「キバオウが素直に褒めるなんて！こんな事あるんだなあ。エミリーさんは不思議な人だ」

「リンドさん、美味しい料理は人の心を温かくするわ。私もエミリーさんのご飯を食べ、少し変わったんだもの」

「それにしても、キリトは残念だな。こんなご馳走食べ損ねて」

「あら、エギルさん大丈夫よ。キリト君はいつも食べてるんだから！」

「羨ましいやつちゃ、アイツは！LAは持ってくし!!」

「まあ、ちゃっかりラストアタック（LA）獲れたのねキリ君」

それからの話は、ボスとどう戦ったかをみんなで説明してくれた。

料理の方もだいぶなくなってきた頃、シヨウさんが私を小声で呼んでいた。

「エミリーさん、チヨット」

「ん？なんですか、シヨウさん」

「この後は、ご予約ありますか？」

「んー、キリ君のお夜食作って寝るだけですけど？」

「なら、その夜食を弁当にしておいてください。アルゴさんからメッセージが入りました。何やら、『面白いものが見られるゾ、来てみないカ？』と」

「あら、何かしら。気になるわね。．．．わかったわ。行きましょう♪」

「では、お弁当を作り終わったらメッセージを下さい。一緒に行きましょう」  
「了解」

「さ、そろそろ帰ろうか。エミリーさんご馳走様でした」

「おつ、もうこんな時間か。遅くまで、お邪魔しました」

「あ！エミリーさん、またお風呂をお借りしたいんですが．．．」

「アスナちゃん、いいわよ。でも、シャワーだけにしてくれる？」

「はい。さっぱりしたいだけなので」

「じゃ、俺らはお先に失礼します」

「はーい。気を付けて帰ってね〜♪」

アスナちゃんがシャワーを浴びている間に片付けをして、キリ君用お弁当を作る。

今回はツナ擬きサンドイッチ♪ マヨネーズの調合はまだ出来てないので、塩コショウ味にする。

お弁当は出来上がったがアスナちゃんがまだ出てこないで、コーヒー擬きで休憩する。このコーヒー擬きも豆みたいな実を探して自分で煎って作ったのだ。

先程エギルさんにごっそり試飲してもらったが、イマイちな評価だった。まあ、香りと苦味はあるが酸味がない。そして色。なんと赤いのだ。上手くないかない。

『出来上がったら、俺に売ってくれ』と言っていた。

コーヒー擬きを飲み終わる頃、アスナちゃんがお風呂から出てきた。

「シャワー、ありがとうございました」

「さっぱり美人アスナちゃんの出来上がりね♪この肌艶、うらやましいわ！私も後10年若かったら・・・」

「何を仰いますか。スツピンでそこまでのお肌なんて、凄いですよ〜」

「ふふ。ありがと。アスナちゃん、送って行ってあげたいけどこの後出かけるのよ。一

人で帰れる？」

「子供じゃ、ないんですから。フード被つて帰りますから、大丈夫ですよ。ところで、どちらに出かけるんですか？」

「ああ、キリ君のところ。お夜食を持っていこうと思ってるの。場所はよく知らないんだけどね♪」

「他にも誰か一緒なんですか？」

「ええ、シヨウさんよ」

「シヨウさんか……。私もご一緒していいですか？」

「んー、まあいつか！なんかアルゴちゃんから連絡が来たみたいで、面白いものが見られるって」

「へー、いいですね。早く行きましょう！」

私はシヨウさんにメッセージを送った。すぐに返信が来て、転移門まで来てくれと書いてあった。

アスナちゃんと二人で転移門へ移動を開始した。

転移門に到着すると、シヨウさんがウィンドウを開いて待っていた。

「お待たせしてすみません」

「いえいえ。アスナさんも一緒にでしたか。まあ、一人で帰るよりはいいですね」

「なんだか、お二人のお邪魔だったかしら？」

「何言ってるの。私とシヨウさんはそんな関係じゃないわよ」

シヨウさんは苦笑交じりで、ウィンドウを閉じ転移門の上に乗る。私達もそれに続いた。

転移する街の名前をいい、青白い光に包まれる。

浮遊感が襲い、それが終わると新しい街へでた。

「ここから少し険しい道を行います。いいですか？」

「ええ。大丈夫」

そう言い、キリ君のいる所まで移動を始める。

道中、POPする敵を倒しながら進む。

30分ぐらい移動しただろうか、1軒の小屋が見えてきたがその近くで人影が動いていた。

「あれ、キリ君かしら？」

「お！来たナ」

「アルゴちゃん、もしかして待っていてくれたの？」

「まあ、さつき調べ物をしに行ってたがシヨウウっちからメッセージ来たから戻ってきたんだヨ」

「で、面白いものってなんですか？」

「・・・ツプププ。ホント面白いゾ。笑わないでいたら、1つ情報タダでやるヨ」  
「アルゴさんがそこまで言うって・・・よっぽど？」

「まあ、キー坊を呼んでくるカラ。はつきり言っておりや、キリエモン・・・ププ」

「キリ君にお弁当持ってきたって伝えて、アルゴちゃん」

「オーケー」



思い出し笑いをしながらアルゴちゃんはキリ君を呼びに行つた。

うん、笑わないっていうのは無理でした。皆キリ君の顔を見た途端大爆笑。キリ君が軽く落ち込んでいたのは言うまでもない。

「アルゴちゃんのお髭の理由はこういうことだったのね」

「ああ、マジあの岩は硬すぎる」

「エクストラスキル、体術か。俺も受けてみようかな」

「因みにあの岩、破壊不能イモータルオブジェクト一歩手前だからナ」

「うーん。私も受けてみよう♪」

「姉さん（エミリーさん）やめておいた方がいい！」

「えー、物は試しって言うじゃない」

私とショウさんは、NPCお爺さんのところへ近づいた。

「お主らも、我が弟子になりたいか？」

「はっ」

「修業は厳しいぞっ」

「よろしくお願いします」

「ではついて来るがよい」

NPC 師匠はここで待てと指示を出した後、巨大な岩を二つ手に肩へ持ち上げ私達の近くへ放り投げた。

ドゴーン！ドゴーン！と大きな音をたて、岩が置かれた。

「これを拳のみで割ってみよ」

「キリ君のと大きさは同じなのね。何処から持ってきたのかしら？」

「姉さん・・・」

師匠は、筆を持ち私達に近づいてきた。

「お主らには、この岩を割ると誓いをたててもらおう」

そう言つて、目にも見えない早い動きで顔に何かを描いた。

「あはっ！シヨウさん、素敵なお顔♪」

「そう言うエミリーさんも中々可愛い顔になってますよ」

「なんで、二人はそんな大人しめな落書きなんだよ！」

「日頃の行い？」

キリ君は怒り、私達は笑いあっている。

「さあ、修業をはじめるとのじゃ」

師匠の言葉で私達は岩砕きを始める。

---

シヨウさんとキリト君は拳を岩へぶつけていく。

エミリーさんは、岩をぐるっと手で触りながら一周し気合を入れて狙いを定めているようだ。

「はあっつ!!!」

エミリーさんは気合の咆哮をあげ、一か所を拳で殴った。  
すると、岩にヒビが入っている。

「えっ?」

キリト君とシヨウさんは素っ頓狂な声をあげ、エミリーさんの方を口を開けてみていた。

私も思わず口をあんぐり開けて驚いてしまった。

「うん、硬いね」

そういいながらエミリーさんはもう一発、先ほどより大きく息を吸い込み同じ場所へ

拳をふるった。

「はああああああっ!!!」

すると、岩が砕けた。

「「えええええ!!」」

「うん、割れたね」

NPCがエミリーさん近づき

「よくやった。これで、修業は終わりじゃ」

と言って、エミリーさんの顔に描いた模様を消している。

消えた途端、ピロンと音が鳴った。

「エクストラスキル《体術》取得♪キリ君とショウさん、頑張つてね?」

「姉さん！コツ教えて!!」

「ええー、それはダメ。ほら、師匠も怖い顔して睨んでる♪」

「はあ・・・」

キリト君はため息をはき、シヨウさんは苦笑いをして私達に話しかける。

「エミリーさんとアスナさんは、先に戻っていてください。この調子じゃ、まだまだかかりそうですら」

「わかりました。キリ君、これお弁当ね」

エミリーさんはキリト君にお弁当を渡し

「じゃ、遠慮なく先に帰るね♪アスナちゃんとアルゴちゃんは、私が宿へ送っていくわ」

「お二人とも、頑張ってください」

「キリ君、終わったらメッセージ送ってね？」

「わかった・・・」

「じゃあーねー」

私達3人は、2人を置いて宿へ向かった。

転移門へ着き、アルゴちゃんは自分の宿屋へ戻っていった。

「あつ！どうしよう・・・」

「どうしたの？アスナちゃん」

「私、宿を昨日までの契約にしている。これから宿を探さなきゃいけないんです」

「あら、じゃあ私の宿へいらっしやい。これから、まだ移動しなきゃいけないけど・・・」

「良いんですか？」

「ええ。キリ君のあの調子じゃ2・3日は帰ってこないはずよ」

「じゃあ、お言葉に甘えてお邪魔します」

「うんうん♪それが良いよ」

アスナちゃんを連れて宿へ向かった。

宿に着いて、アスナちゃんに私が使っていたベッドを勧め、私はキリ君が使っているベッドを使う事にする。

先に寝ているように言い、私はシャワーを浴びに向かった。  
今日も中々楽しい1日だった。



## 第5話

第1層がクリアされ、その後はかなりのスピードで攻略されていった。

第3層からギルドを結成出来るようになるような様々なギルドが立ち上がり、その中でもアインクラッド解放軍（ALF）、聖龍連合の二つのギルドが大きかった。

ディアベルとキバオウはALF、リンドは二人と別れ聖龍連合を率いた。

そして、最前線で活躍するプレイヤーは攻略組と呼ばれるようになり、第1層はじまりの街から出ていない少ないプレイヤー達から期待を寄せられるようになっていた。

最初の自殺する者達をとめることは無理だったようだが、大半の人たちはシヨウさんの指導を受け攻略に出る者、日々の生活に困らない程度の戦闘をして生きていこうと考えた者に別れたようだ。

俺（キリト）は、相変わらずソロプレーをしている。ただ、姉さんとだけは時々PTを組んでクエスト等を行っている。

宿屋は姉さんと一緒であるが、姉さんが『そろそろ独り立ちしなさい！』と最近よく

言うようになった。

『姉さんと別れると、美味しい飯が食えなくなる！』と言い訳をして、一緒に宿に居るようにしている。

俺は姉さんとあまり離れたくない。(本当の理由は別にある。姉さんにはお見通しのようだが……)

ギルドを率いるようになった3人は姉さんとあまり会わなくなった。まあ、メッセージのやり取りはしているようだ。

シヨウさんは、はじまりの街へまた戻って今は教会で子供達の世話をしながら勉強を教えている。彼は、リアルでも教師なんだそうだ。

もう1人、女性がいると姉さんが言っていた。その女性も子供たちの面倒をみている。そうで、シヨウさんは時々子供たちを彼女に任せ生活費を稼ぎに最前線に來ている。

その時、姉さんに会いに來るそうだ。俺が攻略へ出ている時に來るらしく、俺はシヨウさんと会うことはほとんどない。

アスナは最近出來た、血盟騎士団というギルドの副団長をしている。Kob(血盟騎士団)の団長はヒースクリフという。

このヒースクリフが頭角を現してから、姉さんの様子が少しおかしくなった。

パツと見はわかりにくい、身内だからわかる僅かな變化だ。時々、ブツブツ独り言

をいってポーっとしていることも暫し。

そんな事もあるので、姉さんと離れるのが躊躇われている。（根本的な理由はきつと別なんだけど・・・）

最近、攻略組が少しづつ殺伐として来てる。俺はそう感じているが、どうしようもないと思いい我慢している。（こう感じるのは姉さんの影響かもしれない）

皆とはボス戦の時に顔を合わすくらいだ。

そうそう、ログインしたあと俺がレクチャーしたクラインが、仲間を引き連れ徐々に攻略組に近づいている。

準攻略組と呼ばれる集団のトップにいるそうさ。上に来るのも時間の問題だろう。

俺はこの近況報告を誰にしているんだろうか・・・。

まあ、いいか。そろそろ迷宮区に着く。気を引き締めよう。

「ねえ、今日は素材集めに協力してよ」

「ん、わかった。何処へ行くの？」

「11層」

「また随分下層だな」

あの時姉さんの、こんな会話から始まった出来事で俺は今とあるギルドに協力している。

ギルド名 月夜の黒猫団 俺より少し年齢が上の少数ギルドで、まだレベルも最前線からはかなり下になる。

素材集めを終えて宿へ戻ろうとした時、悲鳴が聞こえ俺と姉さんは助けに入った。

月夜の黒猫団がM o b 敵に囲まれていたのだ。俺たちは彼らの経験値を取らないよう、タゲだけを取り彼らがとどめを刺すようにした。

無事にその状況から抜け出すと、彼らはお礼をいい是非自分たちの宿でご馳走させてくれと言ってきた。

俺は遠慮しようと思ったが、姉さんはあの性格だからその招待を受けた。

月夜の黒猫団のメンバーが挨拶をして、俺たちも自己紹介をした。

その時、レベルを聞かれ（レベルを聞くのはマナー違反なのだが）俺は返答に窮して

いると姉さんはハッキリと俺と自分のレベルを言い、更に1層にいた理由も告げて謝っていた。

俺たちのレベルを聞いた黒猫団のリーダー《ケイタ》が自分たちは攻略組を目指しているので、是非指導してほしいとお願ひしてきた。

俺は、あまり最前線攻略の時間を取られたくないと思つたが、姉さんが『たまには息抜きも必要』つて言つて、俺に了承もなく引き受けた。

基本姉さんが彼らの面倒をみているが、俺も時間ができると彼らの指導をしている。そんなこんなで、黒猫団のレベルが最前線の5層下へ行けるまでに上がった。

俺は彼らと接するようになり、黒猫団ギルドのアットホームな雰囲気が入りよく彼らに会いに行くようになった。

「あれ？今日は姉さん来てない？そういうやサチもないね」

「・・・うん。キリトには連絡しなかったんだけど、サチが行方不明になつちやつて」「エミリーさんがサチを探しに行つてくれてるんだ」

「そうか。姉さん、索敵スキルとつてないし・・・追跡も出来ないけど大丈夫かな？」

「うーん・・・」。一応エミリーさんにそう言つただけど、『大丈夫♪』つて言つて、出

てった」

「相変わらずだなあ・・・」

暫くしてケイタにメッセージが届いた。

「サチ、みつかったって!!」

「「おおー!」」

「不思議な人だよ、エミリーさんって」

「うーん、俺も姉さんの事全てわかってるわけじゃないしな」

「メッセージには何て書いてあった?」

「うん、2人でちよつと話をしてから戻るってさ」

「姉さんが一緒なら、平気だろ」

「そうだな」

俺は一先ず安心して、ケイタ達と話をしていた。

「サツちゃん、私で良ければ何時でも相談に乗るって言ったでしょ?」

「心配かけてごめんなさい。これは私自身の問題だから、なんだか申し訳なくて」

「そんな事気にしないで。で、サツちゃんが悩んでいる事は何かしら?」

「えっと、うちのギルドの方針で攻略組を指すと決まったんですが、私は自信がなくて・・・戦闘が怖いんです。上層へ行けば行くほど敵は強くなりますよね」

「ええそうね。うーん・・・怖くない人の方が少ないと思うわよ? 少なくとも私は怖いと思っているもの。あんな、怪物と戦うのはね」

「・・・その割には戦闘中エミリーさんは楽しそうですけど・・・」

「きやは♪そう見えて当然ね。そう見せてるだけだもの。でも、恐怖心は大切だわ?」

「この戦いで自分は死ぬかもしれない、そう思う心ね。怖くて戦闘が嫌なら、はじまりの街にでも引き籠ってればいい。」

でも、そうじゃないわよね? 一人でいるのは辛いわ。だったらそこで自分を止めてし

まっつてはダメ。そこから絶対に死ぬものか!と思うの。

そうすると、次は何をしなければいけないかが見えてくるわ。ようは次に進む勇氣ね」

「勇氣・・・私に足りないもの・・・」

「うーん、いきなりそう思っても無理よね。そういう時に仲間を頼らなきやね♪きちん」と皆にサツちゃんの気持ちを話した?皆には無理でもケイタ君には話せるんじゃない?」

「だって、ケイタが一番攻略組に行きたいって・・・」

「そうね、そう言っているわね。でも、そこでサツちゃんが我慢しておっかなびつくり皆と一緒に戦闘したら、自分だけじゃない。仲間も危険に晒すことになるのよ?」

「!」

「きちんと自分の気持ちを相手に伝える。とても大切なことだわ。そして、相手の気持ちを理解しようとする。これも大切」

「そうですね・・・皆にキチンと伝えてみます」

「うん。助言が必要なら、何時でも私に連絡してね」

「はい!そうケイタに伝えておきます!」

「さ、少し気分は落ち着いたかしら?落ち着いたなら、戻りましょう♪」



「はいー！」

「では、今日は特別にお姉さんがお料理を作ってご馳走してあげましょう♪」

「え？ エミリーさん、料理スキル取ってるんですか？」

「うん♪もうすぐコンプリートよ！」

「うわー！ 凄いです！」

「うふふ。さ、宿屋へレッツゴー！」

私達は黒猫団のいる宿へ向かった。

「いやー、エミリーさんの料理は母さんを思い出させます（涙）」

「うーん、みんな私の料理を口にすると同じようなこと言うのよね、ねえ私ってそんなに年取ってみえる？」

「そう見えないから、凄いと思うんですよ」

「俺の自慢の姉貴だからな！」

「あら、そんな事初めて聞いたわ！」

「ああ、初めて言った!!」

あははははっ！みんなが笑ってる。すごく心が楽しい。嬉しい。ずっとこのままで居たい。

そんな気持ちに俺（キリト）はなっていた。

その後、サチが黒猫団の皆に話があるといい俺と姉さんは一先ず自分たちの宿へ帰った。

宿へ帰った後、姉さんがサチと話した内容を教えてくれた。

---

翌日、姉さんにサチからメッセージが入り再び黒猫団のところへ向かった。

「じゃあ、皆と話せたのね？」

「はい、みんな解ってくれて謝ってくれました」

「で、どうするか決まったのか？」

「うん。私も無理しないように頑張るって言ったわ」

「で、サチを前衛にするのは諦めました。そのまま中衛で戦闘をしてもらいます」

「火力不足は否めないけどな」

「ごめんなさい」

「いや、サチは謝らなくていい。これはリーダーである俺が考えることだからね」

「でもさ、黒猫団のメンバーって凄く連携プレーが上手いよな。それを活かしていければ、大丈夫だと思うぞ」

「うーん、連携プレーかあ。私達だと、そこは教えるのって難しいわよね？」

「そうだな、姉さん」

「あつ！クラインさんの『風林火山』を講師に呼んだらどうかしら！」

「おお、ナイスアイディア!!」

「えっと、そのギルドってもしかして準攻略組の？」

「ああ、知ってるのか？」

「噂を聞いてるくらいだけど」

「うんうん♪その準攻略組のよ。キリ君の最初のフレなのよね♪」

「・・・ああ」

「何よ、その間わ」

「恥ずかしかっただけだよ！」

「そう。じゃ、キリ君から事情説明と依頼しておいてね。そうね、報酬は私の料理でどうかって聞いといてね♪」

「エミリーさん、人使い荒いなあ・・・」

「だろ？こんなノホホンな感じなんだけど、結構俺には厳しいぜ」

「あら。身内に厳しいのは家風よ」

「そうだったな・・・」

「「「あはははは!!」」」」

俺は早速クラインに連絡をとり、依頼をした。

奴は気前よく引受けてくれて、挙句報酬の姉さんの手料理が楽しみだって書いてあった。

翌日、私はアシュレイのところへ行きキリ君は最前線の迷宮区へ向かった。

サツちゃんに服をプレゼントしようと思つて、作つて貰うため頼みにきたのだ。

アシュレイにサツちゃんの特徴を伝え、デザインも2人で考えて決めた。

すぐにアシュレイは服を作りだし、あつという間に出来上がった。

中々可愛く出来たと私達は喜び、アシュレイに代金を払つて店を出た。

その足で、何となく最前線へ足を運んだ。

「あ、エミリーさん！」

「あら、アスナちゃん。久しぶりねえ。聞いてるわよく攻略頑張つてるのね♪」

「はい、エミリーさん。あ、紹介しますね。こちら我が血盟騎士団のヒースクリフ団長です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「団長？」

「ああ、失礼しました。ヒースクリフです」

「・・・初めまして。エミリーです」

「団長、彼女はキリト君の従姉のお姉さんなんですよ。とつてもお料理が上手で、優しく頼もしい方です」

「あらアスナちゃん、そんなに持ち上げてもボス戦は参加しませんからね」

私がそうアスナちゃんに返事をすると、ヒースクリフは少し慌てた様子で言った。

「アスナ君、私は少し用を思い出したので先にギルドホームへ戻るよ」

「あ、はい。了解しました」

「では、エミリーさん失礼します」

「・・・」

ヒースクリフは急ぎ足で、去って行った。

「？団長、どうしたんだろう」

「・・・」

「エミリーさん？」

「ん？なあに？」

「どうしたんですか？エミリーさんもいつもと少し・・・」

「私はいつも通りよ。アスナちゃん、スキルスロットに空きは出来た？」

「あっ！はい。この間、料理スキルを入れました」

「そう！じゃあ、今度一緒にお料理しましょう！」

「はい！あっ・・・」

「ん？どうしたの？」

「私、副団長なんてやってるのでギルド内でのお休みが少なくて・・・」

「あら私、時間は持て余しているからアスナちゃんの都合に合わせるわ。何時でもメツセージもらえれば大丈夫よ♪」

「すみません。ありがとうございます。今度のお休みの前に連絡入れますね」

「謝らなくていいわ。攻略を頑張っているんだものね。遊んでいる私の方こそ謝らなくてわね」

「そんなっ！」

「まあ、私の代わりにキリ君が頑張ってるから、許してね♪じゃ、今日はこの辺で」

「はい！失礼します!!」

エミリーさんはそのまま宿へ戻って行ったが、なんだか様子がおかしかった。笑顔で団長に挨拶をしていたが、目が笑っていないかった。

それに団長もだ。団長のあんな慌てた姿を初めて見た。2人はもしかして知り合いだったのだろうか？

キリト君なら何か知っているのかな？今度会った時にでも聞いてみよう。

「・・・んちよう・・・副団長！」

「えっ！ごめん。考え事してた」

「行きましよう」

「そうね。今日はこれから・・・」



これからの予定を告げて私達は行動を始めた。

うー、なんで最前線になんか行っちゃったのかしら。はあ。

ポーっとしていたら、ケイタ君からメッセーヂが届いた。

どうやら、クライン君たちの講義が終わったらしい。こちらへ来てほしいとメッセーヂに書いてあった。

料理の材料がストレージに入っているか確認し、そのまま黒猫団のいる宿へ向かった。

「おまたせ〜」

「おおー。エミリーさん、物凄くお久しぶりです！」

「お久しぶり！クライン君！頑張ってるみたいね〜」

「いやー、突然キリトからメッセ貰ったときや驚きましたよ。あ、紹介します。こいつら

が俺の仲間『風林火山』のメンバーっす」

「みなさん、初めまして。エミリーです。突然のお願いを聞いていただいて、ありがとうございます」

「初めまして！昔リーダーがお世話になったそうで」

「あは♪お世話したのはキリ君よ。私はちょこつとお話しただけ」

「リーダー、キリトさんに会うたんびに『エミリーさんは元気か？』とか、『会わせてくれー』とか言ってたんですよ」

「そりやあそうだろ！こんな美人さんだ。また会いたいと思うだろうが！」

「うふふ。クライン君嬉しいわ」

「あ、頼まれた講義と、ちとケイタ君達を鍛えておきましたぜ！」

「ありがとうね〜」

「キリトはいないんですか？」

「キリ君はまた迷宮区に潜ってるわ」

「あんにやろー、丸投げかよ！」

「ごめんねー。少しあの事を気にしてるのかもしれないわね」

「気にすんなくて言ってるのになあ」

「ま、今回は本当に助かったわ」

「エミリーさん」

「ん？サツちゃんどうしたの？」

「キリトは呼ばないんですか？」

「うーん、迷宮区にはメッセージ飛ばせないしね。ほっときましょう」

「なんだ、サチ嬢ちゃんはキリトの事気になるのか？」

「！クラインさん、何言ってるんですか！！」

そう言つてサツちゃんはクライン君の背中を思いつきりバーンと叩いて顔を真っ赤にしている。可愛いなあ、サツちゃん。

「さて、報酬ですね。さつきまでチョット出かけていたので、これから料理を作ります♪少し待つててね」

料理を皆に振る舞い、みんな食べ終わって満足してくれたみたいだった。風林火山の皆さんは笑顔でギルドホームへ帰って行った。

「エミリーさん、俺達今度、最前線にギルドホームを購入しようとして計画してるんだ。もうちよつとで、購入可能金額になる」

「へえ、凄いいじゃない！」

「ホームを購入したら、キリトと2人で俺らのギルドに入りませんか？」

「お誘いありがとうございます。でも、ごめんね。私もキリ君もどのギルドにも入らないって決めているの」

「何か理由でもあるんですか？」

「あるけど、ちよつと教えられないんだ。まあ、キリ君は私が説得すれば入ってくれるかもしれないけどね。私達、お互い頑固だからねえ。何とも言えないかな」

「そうですか。残念だな」

「ねえ、ギルドホーム買うとき、ご一緒してもいいかしら？どんなホームなのか気になるし、そのまま購入記念パーティーを開いて、また私をご馳走作ってお祝いしたいわ♪」  
「おつ、それは嬉しいですね！わかりました。購入前にお呼びします！」

「ありがとね♪あ、そろそろキリ君、宿へ戻って来るような気がするから、お暇するわ」  
「なんだか、長い間ありがとうございます！」

「「「ありがとうございます」」」

「やだなあ。このまま会えなくなっちゃうみたいなの雰囲気よ。またすぐに遊びに来るつもりでいるんだからね♪」

「ケジメですよ。なあみんな？」

他のメンバーは揃って首を縦に振っている。

「あ！サツちゃん！」

「はい！」

「あは♪そんな緊張した返事しないでよ。ただ、サツちゃんにプレゼント渡すの忘れるところだったからさ」

「え？プレゼント？」

「そうよ。ゼーったい似合うと思うの♪」

サツちゃんにトレード申請して、例の洋服を渡した。

「どっ、どうして・・・ですか？」

「これから、頑張っていこうと決意をしてくれたからね。何かご褒美と思ってね。ほら、

着て見せて♪」

「でも・・・」

「いいんだって！ほらほら、早く早く！」

「は、はい・・・」

やっと受け取ってくれて、サツちゃんは自分の部屋へ着替えに行った。そして、すぐに戻ってきた。

「「「おおー!!似合うー」」」

「ふふ。私とアシュレイの共同デザインよ♪」

「ええ！あの有名なアシュレイさんの!？」

「ん？そうだけど？彼女ともお友達なのよ♪」

「うわー、エミリーさん本当に何者なんですか!？」

「ちよつと、恥ずかしいです」

サツちゃんは顔を赤くして顔を隠してしまった。

「なんで、メイド服っぽいんですか！」

「えー、私の趣味♪」

「サチ、可愛い！今度それ着て料理作ってくれ!!」

「ケイタまで・・・」

「ふふふ。それ着てキリ君に料理でも作ってアタックしてみたら？」

「もー、エミリーさん!!」

「あは♪怒らない怒らない。可愛さが下がっちゃう」

色々、みんなのテンションが上がっていたけど、時間も時間なので今度こそお暇しました♪

うふふ。キリ君の反応も楽しみだわ♪

## 第6話

最前線第25層。それは、1/4地点であるが故 “クオーターポイント” と呼ばれた。

俺達攻略組が迷宮区の攻略を進めている間、《鼠》のアルゴを筆頭とした情報屋達がボスの情報集めに奔走している。

情報屋から徐々に開示されるボスが、どんな強さなのか明らかになってきており、プレーヤー達も不安な気持ちになりつつある。

ボス攻略戦はPTでレイドが組まれて行われる。2層以降は偵察戦を行い更に詳しい情報を集めてからボス戦に挑むのが定例になっている。

昨日、ボス部屋が発見された。今回も例にもれず、偵察戦が先ほど行われ今は毎層恒例のボス攻略会議である。

さて、これが会議と言えるのかわからないが。内容など有って無きに等しい感じだ。巨大化したALFが聖龍連合&血盟騎士団に突っかかっている。どちらが先にやる



か等々。

ALFのボス戦参加プレイヤーがやたらと多く、他のギルドも合わせるとレイド上限（1PT6人、8PTまで）を遥かに超える人数なのだ。

俺達ソロ組は、もしかしたら今回参加できない可能性もあったり・・・。

この会議中、下層では姉さんがサチを弄って遊んでいるとはこれっぽっちも思っていなかった俺である。まあ、ボス戦に関して姉さんはノータッチなので連絡は入れていなかったが。

段々収集が付かなくなりそうなところをKobの団長様が出てきて纏めていた。

そういやこの間迷宮区でアスナと会って、話があると言われた時は少しドキツとしたが姉さんについての話だった。

『ねえエミリーさんって、うちの団長と知り合いだったの？』

と聞かれたが、俺は姉さんの交友関係を全て把握していない。と話してその話は終わった。

よく考えてみると、現実の世界での姉さんに関しても良く分からない人物だったりする。

俺が記憶しているのは俺が10歳までに会った姉さんで、その後会った記憶が……あれ？

そんな曖昧なのに、あの時（鏡で顔が現実の自分と同じになった時）よくわかったなあ、俺……。

俺が10歳まで、姉さんは週に2日は遊びに来ていた。姉さんに遊んでもらうと凄く楽しくて、楽しくてしようがなかった。

だからあの時、すぐにわかったんだな。うん。違うない。

4・5年は会っていないなかったのだが、何か大事なことを忘れてるような……

「……ト……！ キリト君!!」

「ほへっ？」

「聞いていなかったのかね？」

「あつ、すみません。聞いていませんでした」

「どうしちゃったの？キリト君にしては珍しい」

「面目ない」

「今回のボス戦だが……」

どうやらボス戦のPTレイドが纏まったらしい。4PTはALF、2PTは聖龍連合、残りの2PTをKobとソ口組。

それで片付かなかった場合、残りのメンバーで組んだレイドでボス戦をやるそうだ。俺は最初のレイドに組まれた。

その他、どのPTが何処へ配置になるかも決まっていた。俺はそんなに長い間、思考の海を泳いでいたのだろうか。

ボス戦は明日だ。

キリ君からメッセージが入った。どうやら、ボス攻略会議に出ていたらしい。昨日ボス部屋が見つかって先ほど会議が終わったと。

ボス戦は明日だから買物物を済ませてから宿へ戻ると書いてあった。返信しておく。

『攻略、会議、遅くまでお疲れ様。ボス部屋見つかったんだね。遅い時間で悪いんだけど、黒猫団の宿へ向かってくれるかな？良いもの見られるよ！私も今から黒猫団のと

「ころへ向かいまゝす♪」

よし、これでOK！返信つと♪さあ、サツちゃんのところへ急いでレッツゴー♪

「みんなー、あつそびに来ったよー!!」

「あ、エミリーさんいらつしやーい」

「おつ、サツちゃん居るね！もうちよつとしたらキリ君来るはずだから！あの服着て来てね♪」

「ええー!!!嫌ですよ！恥ずかしい・・・」

「おろ？みんなは？」

「皆は、夕飯の買い出しに出かけました」

「あら、サツちゃんはお留守番なの？」

「はい。私が買い物に行くつて言ったんですが、俺たちが行つてくるからサチは留守番してつて。なので、買い物リストを渡してお願ひしちやいました」

「そう。サツちゃんも料理するんだものね♪」

「ギルドホームの事がありますから。節約するには、自炊が一番です」

「そうね。しつかり者のサツちゃんが居てみんな良かったわね♪」

サツちゃんに、ケイタの為と例の洋服を着てもらい私の予備のエプロン（もちアシュレイ作）をつけさせ、皆が帰ってきたら（食材が到着したら）夕食を一緒に作ろうとお茶をしながら待っていた。

カランコロン♪

宿のドアが開いて、入ってきたのはキリ君だった。

「姉さん、来たよ。良いものつてなに？・・・」

「来た来た!!待ってたよ〜キリ君♪」

「えっ!・・・きゃーーーーー!!」

サツちゃんは、みんなが帰ってきたと思って思いっきり笑顔でドアの方へ向いていた。そこへ来たのはキリ君。サツちゃんは悲鳴を上げて部屋へ走って行ってしまった。

「うふふ。大成功♪」

「……………姉さん！俺が……俺が頑張って攻略行ってるのに、遊んでたのかよ!!!」

「そんなに怒らないでよ。サツちゃん可愛かったでしょ？あれ、私がプレゼントしてね♪」

「……………はあ」

あらら、盛大にため息つかれちゃいました。

「まったく……用事はこれだけか？だったら帰るぞ？」

「もおー。サツちゃん、キリ君帰っちゃうってえく！」

「姉さん？叫んだって聞こえないぞ？」

「ああ、そうだっけ。ちよつと待っててよ！サツちゃん呼んでくるからあー！」

「……………」

私はサツちゃんの部屋へ行きドアをノックすると、サツちゃんはドアを少し開けてくれた。中を見るとサツちゃんはもう着替えていた。

「・・・エミリーさん、酷いです・・・」

「ごめんなさい。だってサツちゃん可愛いんだもの。その可愛さをキリ君にも見せてあげたかったのよ」

「私の意思は無視ですか？」

「だって、サツちゃんキリ君に絶対あの服着てるところ見せないだろうと思つて・・・」

「キリトから頼まれれば見せたかもしれないけど。ああいう不意打ちは卑怯です！」

「本当に本当に、ごめんなさい。・・・あ、キリ君が怒つてもう帰るって言つてるの」

「え、怒つてるんですか？」

「ええ、私がやらかした事に対してだけど・・・」

「ああ、そつちでしたか。私のこの洋服の事で怒つたのかと・・・」

「いや、いくら何でもそれで怒るってことはないんじゃない？」

「で、キリト何か言っていました？」

「何も・・・直接聞いてみて♪」

「・・・はあ」

「あらら。サツちゃんにまでため息（涙）」

「わかりました。とりあえず、下に行きます」

「ありがとう」

下に行くくと、ケイタ君たちも帰って来ていた。なにやらキリ君と話しています。

「エミリーさん、サチで遊ばないでください」

「えへへ♪ごめんね。お詫びにご飯作ります」

「私も一緒に作りますね。キリト、食べて行って」

「ああ、サチ。すまない。ありがとう。・・・さっきの・・・可愛かった」

「えっ！・・・ありがとう♪」

ふふ。キリ君もだいぶ女の子と喋るの慣れてきたね。うんうん。いい傾向♪

それから私達は食事をし、キリ君と宿へ戻ってお風呂に入り就寝した。



翌日、キリ君は時間になりボス戦へ行つた。心配は心配だが、信じて帰りを待つ。これも毎度の事。

ただ、何となく今回は嫌な予感がする。アインクラッドがまた新たに動き出す、きつと。

あの人はきつと死なない。それは決まっていること。まったく……どうしようか。ここままだとキリ君はきつと思ひ出す。私の事を。

思ひ出したとき、あの子はどうするのか。どうなってしまうのか。私以外にあの子を支えてくれる人が必要だ。

あの子の心はきつと脆い。だから、私の事も疑問に思わず受け入れている。

あの事を思ひ出す前に、あの子を優しさや愛情で包んでくれる存在を探さなければ。

これからあの子は沢山の人と接していくはず。その中であの子は相手を愛することができるだろうか。

そして、あの人。アキさんと話をしなきゃならないわね。いつにしようかしら……それともアキさんから接触してくるまで放置しておいた方がいいか。

まあ、なるようにしかならないか。今の私はただのプレーヤー。悩んでいてもしょうがない。

よし！稼ぎに行こう。

考え事を放棄して、私は出かけることにした。

---

今、迷宮区近くの安全地帯で休憩中。迷宮区へ1人で行きたくないからだ。

やはり、クォーターポイントのボスは強かったようだ。この時間になってもキリ君が戻ってこない。

様子を見に行こうか・・・でも、やっぱり行けない。どうしよう・・・。そんな事を考えていたら、突然声をかけられた。

「エっちゃん！」

「うわ！吃驚した。アルゴちゃんかあ。相変わらぬのハイディングね」

「わはは！どうしタ？考え事してるって顔にかいてあるゾ」

「うん、ちよつとキリ君のことが心配になってきてね」

「エっちゃんが行って様子を見てくればいいじゃナイカ」

「うーんそうなんだけどお」

「ボスとはご対面したくないカ。いい加減、理由を教えてほしいものダヨ」

「理由ねえ・・・」

誤魔化すための言い訳を考えながら、何となく視線が迷宮区の方へ行つたとき

「ねえアルゴちゃん、あれ・・・アスナちゃんよね？」

「ん？・・・そうダナ。アーちゃんダ」

物凄い速さで、こつちに向かつてくる白い制服を着ている髪の長い娘がやって来るのが見えた。

「!! エミリーさん、良いところに!! 大変なんです! キリト君が突然、倒れて!」

「えっ、倒れた? ボスのデバフじゃなくて?」

「名前を呼んでも反応がないんです! 気絶しているみたいで」

私はアスナちゃんが案内する後を走りながら状況説明をしてもらおう。

「キリ君は何処かへ移動させているの?」

「ええ、2レイド交代で戦闘なので、後発のレイドPTがキリト君をボス部屋から出して様子を見てもらってます」

「わかったわ。急ぎましょう」

あ、アルゴちゃんに何も言わずに来ちゃった。まあ、後でメッセしておこう。

「そろそろボス部屋に着きま．．．あれ?」

「キリ君は?」

「ボス部屋を出てすぐのところへ移動させて1人ついてもらってたはずなんです  
が．．．いないですね」

「あら、大丈夫だったのかしら？　どうやらアスナちゃんに要らぬ心配をかけたみたいね、あの子」

「・・・エミリーさん、せっかく来ていただいたのに」

「いいのいいの。私は気にしてないから」

「では、私は戻ります」

「うん、気をつけて。無事に帰ってきてね」

「はい！　いつてきます」

どうやら、キリ君は戦線復帰出来たようだ。ここから、キリ君がボスに突っ込んで行ったのが見えた。

「よし！　宿へ戻ろう。ちよつと勿体ないけど、転移結晶使っちゃおう」

え？　ここまで来て帰るのかって？　そうよ、この後のボスの強さが変わっちゃうからね。

どういふことかって？　まだ教えられないわ♪　それに、ヒースクリフには会いたくないしね。

転移結晶で25層主街区へ飛んだ。

そのまま街をブラブラしながら宿屋へ戻った。

お昼過ぎ、アスナちゃんからメッセージが届いた。ボスは何とか倒せた。会って話したいので、この宿へ来てもいいか?と。私は了解の返事をし、アスナちゃんを待った。

アスナちゃんが来ると、ボス戦の内容が語られた。

始めこそ順調だったが、中盤からボスに変化が起き先発で出たALFがほぼ瓦解。後発にいたKob率いるヒースクリフが戦線をたて直してボスは倒された。

ALFから死亡者が十名弱でて、ディアベル君がキバオウさんを庇い死亡してしまっただそう。

聖龍連合からも数名死亡者がでており、指揮系統がぐちゃぐちゃになった為後続で控えていたKobのヒースクリフがレイドの指揮をとりその後は順調に進んだそう。

たて直す間、ヒースクリフはボスからのタゲを1人で10分近く取っていたそう。新しいスキルで可能だったと。詳しくはこれから説明があるそう。

キリ君は私達が駆けつける少し前に復活していたんだそう。ボス戦終了後アスナちゃんもキリ君に話を聞くと、ディアベル君がキバオウさんを庇って死んでしまったところまでは覚えてるらしい。

それを見て気を失ったのかもしれないと言っていた。

説明を終えたアスナちゃんは『今日は疲れたので帰ります』と言い戻って行った。

キリ君からの連絡はなく2日が過ぎ、宿の契約期間が終わった私は次の宿を見つけ腰を落ち着けた。

今回の25層ボス戦がもたらした被害は大きく、ALFはシンカーという人がギルドリーダーになり、今後ボス戦には参加せずはじまりの街を拠点に治安維持に重点を置いて活動すると発表があった。

少し前から詐欺・恐喝・窃盗etcの犯罪が増えており、それを取り締まるというのだ。はじまりの街には黒鉄宮があり、そこには監獄エリアが存在する。そこへ犯罪者を

入れる牢屋がある。これも管理すると言っていた。

暫くして、ケイタ君からメッセージが届き遂に『ギルドホームを購入出来る資金が貯まった。これから購入しますので、お越しく下さい』と書かれていた。

私はケイタ君たちが前に一緒にと言ったことを覚えていてくれたことが嬉しくて、急いで彼らのもとへ向かった。

彼らのもとへ着くと一緒にギルドホームのあるところへ行き、ギルドホーム購入の手続きを終えた。

直ぐに家具はどうしようかと言う話になり、少し狩りに出て家具代を稼ぎに行こうと言い出したので「私が、家具を一つだけプレゼントするわ。他の家具代は貸しておくので、今日は買い物をして購入記念パーティーをしましょ!」

と提案した。サツちゃんは悪いですよと言っていたが、他のメンバーが遠慮しないで、借りておこう!と言ってくれたのでそのまま家具屋へ行った。

私は余り無駄遣いをしなかったなので、結構コルが貯まっていたのだ。『貸す』ということにしておけば、彼らに会う理由ができる。私もその方が嬉しいのだと話した。



俺(キリト)は25層ボス戦から、もう3ヶ月近く姉さんのところへ帰っていない。本当は帰りたいのだが、何か引掛かる。

あの時、ディアベルがキバオウを庇って死んでしまった時、俺の脳裏にフラッシュバックがあった。脳にかなりの負荷がかかったようで、気絶してしまったのだ。

あの映像は、きっと俺の奥深くにしまつてあつた記憶なんだと思う。一瞬だったのでよく覚えていないのだが、あの映像が事実で昔あつた出来事ならば姉さんは何者なのか。

その疑問が解けないと、姉さんに会う自信がない。だが、一人で悩んでいても一向に解決できない。何か、まだピースが足りないのだ。

俺が戻らないのに、姉さんはメッセージを送ってこない。なんでなのか。姉さんがわからない。本当にあの人は俺の従姉なのだろうか。

もし、姉さんが本物ならあの記憶はなんなんだろうか。そんな堂々巡りで答えが出な

い。

俺は敵を倒しながら、思考の渦にいた。そんな時、見知った奴が視界に入った。

「よおー！キリトじゃねーか!!」

「・・・クライン。生きてたか」

「久しぶりに会ったってえのに、随分ごあいさつじゃねえかよ！やっとお前に追いついたぜ」

「そうか」

「まあまったく、おめえは何やってるんだ？エミリーさんが心配しまくってたぞ？」

「え？・・・だつて姉さん、俺にメッセージもくれないぞ？」

「・・・はあ。エミリーさんはなあ、お前から連絡を寄越さない限り自分から連絡をとるつもりはないって言っていたぞ。おめえの為だつて」

「・・・何もかもお見通しか。流石だな」

「まあ、何にしろ一回ぐらいは連絡入れるよ！」

「・・・余計なお世話だ」

「可愛くねえ奴だな、おめえは！じゃあな！」

クラインが去って、俺はまた考える。

そうか、姉さんは俺の事を気にかけてくれていたんだ。まだ、甘えてもいいのかもしれない。でも、今更姉さんのところへ戻るのか？

そういえば姉さんは俺を独り立ちさせようとしていた。そうか、俺はここで頑張つて1人であるのも良いかもしれない。

よし、一先ず姉さんにそのことだけを伝えよう。連絡だけは入れておけば、姉さんも安心するはずだ。

---

3ヶ月ぶりにキリ君から連絡が入った。

やはり、色々悩んでいたのだろう。メッセージにはこう書いてあった。

『姉さん、久しぶり。連絡しないでごめん。さつきクラインに会って怒られた。これからはまめにメッセージを送ることにするよ。とりあえず、1人で頑張ってみる』

無事なのはフレンドリストで確認できるし、アスナちゃんから聞いて知っていた。そうか、クライン君がキリ君に言ってくれたんだね。今度クライン君達を呼んでご馳走しよう。

早速、返信をする。

『久しぶりね。やっと連絡をくれて嬉しいよ。キリ君の決めたこと、良いと思うよ。頑張ってる。次のメッセージ待ってるね』

よし。これで心配事が一つ減ったわ。本当はアルゴちゃんにキリ君の動向を探る依頼をしようかと思っていたところだった。

黒猫団の借金はもうすぐ完済だ。彼等もレベルが大分上がり、準攻略組になった。最前線の2層下でレベル上げ出来るまで成長した。もう私の助けは要らないだろう。

キリ君から連絡をもらった2日後、私はアシュレイに頼まれた素材を取りに6層まで降りていた。

入った森で小鳥型モンスターに出会い、やり過ぎそうと思つたらその小鳥が近づいてきた。

攻撃してくるかと思つていたのだが、一向にその様子がなく私は急いでストレージから赤い小さな木の実をあげてみた。

するとその子は私の手から木の実を啄んで食べた。これはもしや?と思つた時、『モンスターのタイムに成功しました』とウインドウが表示された。

そして『名前を入力してください』と出たので『ツバサ』と入力。そしてカーソルを見ると私の名前の下に『ツバサ』と表示がでた。

「よろしく。ツバサ」

「ヨロシク。マスター……イイエ、オカアサン」

「えっ!もしかして……」

「ハイ、ワタシノオカアサンデス」

やはり、そうか。タイムモンスターはAIがMobより少し高く設定されていた。ボスより学習能力は低いのだろう。と、言うことは・・・

この子は私がおかを解っているのね。

「ツバサ、私以外のプレイヤーがいる時は、決してお母さんと呼んではダメよ」

「ハイ、ワカリマシタ」

ツバサの姿は、オウムに近い。だから話せるのだろう。SAOの細かい情報までは確認しなかった。中々によく作りこんである。アキさんが考えたのかしら・・・。

私はツバサを連れて素材集めを再開し、指定された数が集まったところでアシュレイのところへ届けに行った。

「きやー、そのオウムどうしたのう？」

「頼まれた素材取りに行ったら、タイムに成功してね♪名前はツバサよ」

「ツバサちゃん！かうわういー!!こっちにおいでえ〜」

「ツバサ、アシュレイよ。ご挨拶してね♪」

「ハイ、マスター。ハジメマシテ。ツバサデス。ヨロシクオネガイシマス、アシュレイサマ」

ツバサは私の左肩からテーブルに下り、頭を垂れて挨拶した。

「うわー!!!お話出来るの!?!お利口さんねえ〜♪こちらこそ、ヨロシク♪」

「アシュレイ、取引は？」

「あまりの衝撃に肝心な事を忘れる所だったわ!はい。依頼料込のコレ」

「はーい。お仕事終了♪」

「ねえねえ。この子何が出来るの？」

「ちよつと待ってね。私もまだ確認してなかったの」

ツバサのステータスを確認すると

「えつとー……。え？これだけ？ねえ、ツバサ。これだけしか出来ないの？」

「ハイ、ソレダケデス。ゴメンナサイ」

「えつ？えつ？何？どうしたの？」

「……非常に申しあげにくいんだけど。《会話》スキルしか書いてない……」

「エミリー、いいじゃない！鳥と会話出来るなんて、素敵！うらやましい!!」

「……アシユレイ（涙）、ありがと。ホント貴女と友達で私は幸せ♪」

「ここまで来るの大変だったんじゃない？」

「ええ。色々なプレーヤーに声かけられまくった。そのうちアルゴちゃんが現れるか

も……」

「早く宿へ戻った方が良くんじゃない？」

「うーん……どうだろうねえ。宿に帰ってもぜーったいアルゴちゃんが嗅ぎ付けて来て、

その後は色々な口止めをしなきゃならない。あー、面倒!!」

そんな会話をしていたら店のドアが開いて、お客さんが入ってきた。

「私はもしかやアルゴちゃん!?」と思って振り返ると、予想を斜めに行く人物が立っていた。



「いらつしやいませ〜」

「……………」

「……お久しぶりですね、エミリーさん」

「……ええ。お久しぶりです」

「あら、2人はお知り合い？」

「……ええ、まあ」

「本日はどのような物を？」

「……ああ、今日は私の部屋着を作って貰おうと思つてね」

「いつも、ありがとうございます。では、ご要望をお聞きしましょう。こちらへどうぞ」

「アシユレイ、私は帰るわね。またね」

この場を去ろうとドアノブに手をかけた時、お客で来たヒースクリフに話しかけられてしまった。

「あつ、エミリーさん。貴女にお話があります。この後お時間ありますか？お困りの様ですし、貴女を匿える場所があります。私と一緒にいらつしやいませんか？」

「・・・ええ、わかりました。行きましょう」

「ありがとうございます。ではアシュレイ氏と打合せをしますので少々お待ちください」

ヒースクリフはアシュレイと奥の作業場へ消えていった。

「オカアサン、ダイジョウブデスカ？」

「ええ」

ツバサが心配してくれたが、彼が此処へ来たのは私がツバサをタイムしたからだろう。運悪くか、或は計画的にか。とにかく迂闊だったとしか言いようがない。

取あえず匿ってはくれそうだ。・・・軟禁したりしないよね?・・・あわわ、早まつたかなあ。

などと考えていたら、奥から2人が出てきた。

「お待たせしました。では、行こうか」

「・・・はい。アシュレイ、今度こそ『またね!』」

「ありがとうございます。またのご来店お待ちしております」

アシユレイは定型文を述べ、お辞儀をしたあと私に手を振っていた。

## 第7話

ヒースクリフは私を自分のホームへと案内した。そして、客間へ通された。

「単刀直入に聞こう。貴女のリアルネームは『結衣菜』ではないですか？」

「……フツ、直球で来たわね。ええ、そうよ『晶彦』さん」

「……やつと君に逢えた。ここまで物凄く長かった」

「そう」

「もしか、私に怒っているのか？それとも私の事を恨んでいるのか？」

「そうね、怒ってはいるけど恨んではないわ。恨むのは筋違いでしょ？」

「なぜ、恨まない？私は君に恨まれることをしたんだぞ」

「あれは私も納得していたし、事故なんだから。どうしようもないじゃない？その事は、

あの時にも話したはずよ」

「じゃあ、なぜ君は私の前からいなくなったのだ？」

「そうね、このカーディナルにあの娘を巻き込んだ、というより利用したからかしら」

「・・・利用したという気はない！私もあの娘に逢いたかったのだ。愛しいあの娘に！」

「・・・そう。そう思っていてくれたのなら、少しは救いがあるわね」

「そして、私は今でも君の事を愛している！だから私は、ここまで・・・」

「そう。それが理由なのね。では、私のせいでもある訳ね。貴方の総てをかけて作り上げたこの世界をこんなデスゲームにってしまったのは」

「君は何も悪くない！すべて私の責任でやったことだ」

「・・・そう。では、貴方は最後にここで命を落とすことに納得しているってことね」  
「当然だ。その為にここまでやったのだから」

沈黙が流れた。

「君のそばに居させてほしい」

「あの時、失意の底にいた私を救ってくれなかった貴方がっ！夢だ！仕事だ！と私の事を放っておいた貴方が私のそばにいる資格があるとでも？」

「すまなかつた。私も辛かつたのだ。仕事に逃げてしまった」

「弱い男は大抵そうね」

「私は君に出会うまで、大切なものは夢しかなかった。君と出会い、君も夢も大切なものになった。君は応援してくれ一緒に進んでくれた。そして、更に大切なものが増えた。幸せだった。だから君を探しにここまで来た！」

「……」

「私の気持ちは理解してもらえただろうか？」

「ええ。十分に」

「私を赦してくれるか？」

「……赦していたわ。……こんな事になった以上、今は……」

「……そうか」

「ええ。この世界が役目を終えたとき、あの子が無事ならば……全て赦せるのかもしれないわ。でも、それはあの子自身が勝利を勝ち取らなければ意味がないの」

「彼に、仇を取らせるのか」

「……そう言う事になるのかしらね」

「私は諦めない。君の心に、この私の気持ちが届くまでは」

「そう。では、お手並み拝見ね」

「ズルはしない。そこはフェアに行く」

「当然ね。貴方がアレをすれば、私はこの世界から消えるわ」

「そうだろうな。君の事だ、解っている」

「それにしても、懐かしいわね。このホーム」

「あの家をここに再現した。また君と過ごしたくてね」

「私が貴方とここで過ごすでも思っているの？辛い思い出も詰まっているのに」

「・・・そうだな。悪かった。私の思いを押し付けるつもりはないのだが、君の気持ちが変わったら・・・」

「そう簡単に変わるかしらね？やっとな傷を癒せたのよ」

「頑張ってみるさ」

「ふふふ。らしくないわね」

「それでもないさ。君と出会った時を思い出す」

「さあ、話は終わりよ」

「どうするのだ？ここを出たら、そのタイムモンスターについてプレイヤー達が君のところへ来るのだろうか？」

「ああ・・・そうだったわね。半分は貴方のせいでしょう？・・・はあ。面倒だわ」

「変わっていないね。君のそういうところ」

「私とフレンド登録している人は沢山いるの。どこに居ても判つてしまうわ。なら、正直に話すだけ。貴方の《神聖剣》の時みたいだね」

「そうか。わかった」

「じゃ、私は自分の宿へ戻るわ」

話はこれで終わりと席を立つ。

「君の宿まで送らせてくれ」

「紳士ね。でも、遠慮させてもらうわ。これ以上騒ぎになるのは好かない。それに、これでも最前線で戦闘できるまでにはしているの」

「そうか、残念だ」

私は彼のホームを出て、宿へ向かった。

宿に着いた私は疲れたので、そのままベッドにダイブした。そして、ゆっくりと意識を手放した。



翌日。

借りている部屋は宿の2階の一部屋で、一つだけ窓がある。その窓から外を見ると情報屋らしき人達が数名来ていた。これでは外に出られない。

どうしようかと考えていたら、キリ君からメッセージが届いた。

『姉さん、モンスターをタイムしたって本当か?』

もう、キリ君の耳にまで届いているのね。噂とは早いものだわ。

『ええ、本当よ。誰から聞いたの?』

『アスナだよ。アスナはアシュレイさんから聞いたって』

ああ、アシュレイに口止めするのを忘れていたわ。まあ口止めしても意味はなかっただろうから、同じか。

『今、宿から出られなくて困ってるわ』

『今からそっちへ行こうか？』

『餌食にされるわよ？』

『そうだよな。じゃあアスナをいかせよう！今、隣にいるんだ。さつきボス攻略会議が終わってさ。アスナも姉さんとタイムモンスタ―に会いたいってさ』

『あら、そうなの？じゃあアスナちゃんにグラ―ノ粉とアメールポアを買ってきてもらって』

『わかったって。30分ぐらいでそっちに行くって』

『了解。アスナちゃんにヨロシク』

メッセ―ジをやり取りして、アスナちゃんの到着を待っている。

すると、外が更に騒がしくなった。ツバサだけが窓際について、外を見ている。

「あれ？アスナちゃんではないよね？そうよねえ。いくら何でも早すぎるわよね」

「ソウデスネ、オカアサン。アノヒトタチハ、ナニヲシテイルノデスカ？」

「えっとね、私がツバサをタイムした事は理解できている？」

「ハイ、ワカリマス」

「どうやって、タイムしたか。とか、後はツバサの戦闘能力が知りたいとか。まあ端的に言えば、みんなツバサと仲良くしたい？のかな」

「ソウナンデスカ。ヒトハオモシロイデス」

「ふふ。そう、面白いのね」

「ハイ。・オカアサン、ドウヤラキノウオアイシタヒースクリフサマガイラツシャイマシタ」

「あら、やっぱり来たのね」

ツバサと会話をしていると、ノックが聞こえた。

「エミリー、居るのか？」

「いません！」

「居留守を使わないでくれ」

「どちら様ですかあ？」

「判っていて言っているな。ヒースクリフだ」

「血盟騎士団の団長様がどの様なご用件でしょうかあ？」

「エミリー、やめてくれ」

「もう少しすると、お宅の副団長様がいらつしやいますのでお帰り下さうい」

「そうか、わかった。今日のところは引き下がろう。また来る」

「ご苦労様でしたあ」

「……エミリー、本当にやめてくれ。悲しくなる」

「……。ねえ、本当にアスナちゃんがそろそろこつちに着くわよ？」

「私は構わん！むしろ彼女に協力を願いたいくらいだ！」

「私は知らぬ存ぜぬを通しますからね。適当に合わせてくださいね」

「ああ。分かっている。君の為に今日は帰るよ」

「まあ、ありがとっ」

少し間があったが、足音でヒースクリフが居なくなつたのを感じてホツとする。

それから5分ぐらいが過ぎただろうか、再びノックが聞こえた。

「エミリーさん、アスナです」

私は扉を開けて、アスナちゃんを招き入れた。

「ごめんねー。忙しいKobの副団長をパシリにしちゃって」

「何を言っているんですか。あつ、これ頼まれていたものです」

「ありがとう」

「下で群がっている情報屋が聞いてきたんですが、ここに団長来ました？」

「ああ、いらつしやったわね。アスナちゃんとすれ違いだったみたいね」

「団長、何をしにいらしたんですか？」

「ん？単なるKobへの勧誘ね。きつぱり断りましたけど」

「ええー。なんで断るんですか！私も何度もお誘いして振られてますけど・・・」

「だからね、ずーつと言っているでしょ。ギルドには入らないって」

「・・・そうでしたね」

「ごめんね。あつ、ツバサ！」

ツバサを呼ぶとバサバサと羽音をたてて飛び、私の肩に乗ってきた。

「ご挨拶なさい」

「ハイ。ハジメマシテ《ツバサ》デス」

「きゃー♪本当にアシユレイさんがおっしやっていた通り！あつ、初めまして。血盟騎士団副団長のアスナです」

「アスナサマデスネ。マスターガオセワニナツテオリマス」

「凄いAIですね！現実世界のオウムは仕込まないとこんなにお喋りできませんし、というか会話ですね。このレベルになると」

「ええ、この子の能力は《会話》だけ。まあ、レベルが上がった時スキルが増えるかもしれないけれどね」

「あ、スキルなんですね。ちよつと納得です♪それにしても、この姿・・・オウムより少し大きめのオカメインコ？」

「うん。そんな容姿よね。まあ、戦闘向きではないわ。どちらかというと愛玩動物？」

(笑)

「撫でても？」

「うん。この子は可愛がると、頬擦りしてくるわよ♪」

アスナちゃんはツバサの頭にゆっくり手をのせ、上から尾羽の方へ優しく撫でている。撫でられたツバサは目を細めて嬉しそうにした。

「凄い滑らかな手触りですねえ。真っ白で綺麗」

「アリガトウゴザイマス。アスナサマニナデテイタダクト、トテモキモチガイイデス」

「うふ♪エミリーさん羨ましいなあ」

「そう？じゃあ、時間ができたら遊びにいらっしやい」

「ありがとうございます♪」

「うーん。この状況、どう打開しようかしら。1人の情報屋にとって訳にはいかないだろうし」

「ギルドに入っているわけでは無いですから、問題は会見場所ですよ」

「そうなのよ。やっぱり何処か大きなNPCのお店をお借りしてやるしかないわよね」

私が場所代を払うのはなんだか癪だしなあ。なんて話しているとアスナちゃんは下の情報屋さんたちと話をつけて来てくると言っ下りて行った。

何かいい案が思いついたのかもしれない。

2・3分したら、アスナちゃんが戻ってきた。

「会見場所の話をしたら、代表でアルゴさんが出てきてくれて、皆さんで場所代を折半し

てくれるそうです。そこへエミリーさんが赴いて話してくれればいいそうです」

「やっぱりアスナちゃんに来てもらって良かったわ。キリ君じゃ、こういうのは出来ないもの（苦笑）」

「で、場所と時間が決まったらアルゴさんがエミリーさんにメッセージ飛ばしてくれるそうですよ」

「ありがとうね♪」

「いいいえ、お役に立てて良かったです。私達攻略組は明日の朝、35層のボス戦になります。ボスを倒せれば、この騒ぎも半減すると思いますし」

「そうねえー。そうだと嬉しいわ」

「あ、情報屋達が引きましたね。報道協定が布かれていた様ですから、出歩いても大丈夫だと思います」

「あー、よかった」

「エミリーさん（苦笑）」

アスナちゃんは「明日の準備がありますので、ギルドホームへ戻ります」と帰って行った。



キリ君たちがボス戦に行っている頃、私はアルゴちゃんからメッセージをもらい、3層の主街区にあるNPC経営のレストランに向かった。

情報屋の皆さんの視線が集まる中私はツバサを紹介し、タイムした場所・タイムの方法・ツバサのスキルを話した。

会見自体は10分くらいで終わり、すぐに終わってしまったので「皆さんに申し訳ない」と言ったが皆さんは「情報を手に入れて満足だ」と、言ってくれた。

その後は、皆さんと少し交流して解散となった。  
解散後、アルゴちゃんが話しかけてきた。

「エっちゃん、水臭いじゃないか！オイラとの仲ダロ。独占したかったナア。まっ、オレっちと癒着って噂がたっても面倒ダナ」

「そうねえ。皆さん、嫉妬深いからね。公平に行かないとね〜」

「ま、エっちゃんは優しいからナ」

「うふふ。優しいのかしらね？計算高いだけかもよ？」

「ま、オイラたちもボス戦の情報を掻き集めてたから、これで良かったんだろうナ」  
「そうそう。そう言う事」

「今回のボスも、あのレイドメンバーなら大丈夫だと思おうしナ」

「みんな無事に帰って来てくれれば、それで良いわ」

「あつ、そういや《月夜の黒猫団》ってギルドが今回のボス戦がデビュー戦だって言ってたゾ」

「あら、ケイタ君たちも頑張ってるのね」

「エッチちゃんは知り合いなのか？ 面白いやキー坊も親しそうだったな」

「私とキリ君があの子たちを指導していたの」

「ホオ。初耳ダナ。エッチちゃんは本当に秘密が多いナ」

「うふふ♪」

「何気に攻略組にエッチちゃんは人気だし、これからエッチちゃん情報は儲かりそうだな」

「人で商売しないでよ」

「エッチちゃんが嫌なら売らないヨ。だから、そろそろ年齢教えてヨ」

「じゃあ、こつそりアルゴちゃんだけに教えるわ。誰にも秘密よ」

私はアルゴちゃんに近づき、耳元でコソコソと年齢を教えた。

「マジカ！詐欺だロ！」

「ええー、アルゴちゃんだってそう言う意味じゃ同じでしょ？」

「お互い様力（笑）？じゃ、オレっちもそろそろ行くヨ」

「はーい。またねー♪」

---

アルゴちゃんと別れた後、私はクエストをこなしながら素材集めをしていた。

ツバサは戦闘時には上空に避難し、終わると私の肩に乗る。そして、私に話しかけながら色々な質問をしてくる。

私はそれに答えながら、移動していた。

「ツバサ、移動中はなるべく自分で飛びなさい。でないとスキルも上がらないでしょ？」

「ハイ、ワカリマシタ。オカアサン、ワタシハ《会話》イガイ、デキルヨウニナル？」

「どうしたの？」

「オカアサンガ、テキトタタカツテイル。ソレヲテツダイタイ」

「うーん……。ツバサが敵と戦う必要はないわ。それより、飛行距離を伸ばしてくれると私は助かるわね」

「タクサントベルト、オカアサンタスカル？」

「うん、迷宮区はメッセージが送れないでしょ？ ツバサがお手紙やチョットした物を運べるようになると、凄く良いわね」

「ワカツタ。タクサントベルトヨウニナル」

ツバサは私の役に立ちたいのか、一生懸命だ。バサバサと翼を動かし、私の頭上を旋回している。

「一緒に練習しようね♪」

「ハイ！」

クエストをクリアし、集めた素材を売りに行こうと思ったところで気が付いた。

「あ、エギルさんもボス戦に行ってるんだ。どうしよう……。この素材」

「オカアサン、ソザイウルノ？」

「うん、私じゃこれを活かせないからね。必要な人に買い取ってもらおうのよ」

「NPCニウラナイノ？」

「NPCより高く買ってもらえれば、私達の生活や、攻略が楽になるのよ」

「ソウカ。ジャア、アソコニイルヒトニウレル？」

「どうでしょうね？ 買い取ってもらえるか聞いてみましょうか」

お店をまだ持てない職人クラスのプレーヤーは露店で商売をする。《ベンダーズ・カーペット》と言われる物をひいて、その上に商品を並べるのだ。ベンダーズ・カーペッツトは窃盗にあわないうようなシステムがある。

1人の女の子に目が行った。その子は茶髪で前髪をピンで止めている。近づいて見るとそばかすの可愛い子だった。

「いらつしやいませ」

「ねえ？ あなた、素材の買取ってしてる？」

「はい、少しですが買取もしています」

「じゃあ、この素材はどうかしら？」

「あ、買取ります」

「どのくらい買取れそう？」

「10個程なら」

「わかったわ。では、10個買取って♪」

「この金額になりますが、よろしいですか？」

「えっ、こんなに出してもらえるの？」

「はい、この素材はまだ数が少ないんです」

「じゃあ、この値段で15個渡すわ」

「え！それでは、お客様が損してしまいます！」

「いいのいいの。残りの5個はあなたの為に使ってちょうだい」

「・・・ありがとうございます」

「こちらこそ、買取ってくれてありがとう」

買取が決まると、ツバサが肩に乗ってきた。

「マスター、オワリマシタカ？」

「えっ？・・・えええええ！もしかして、《黒の剣士》のお姉さん？」

「うふふ。そうよ。随分話が広まるの早いわねえ」

「さつき、《アルゴの号外新聞》が配られてまして。それを貰って見たばかりなんです」

「まあ、アルゴちゃんは仕事が早いわね」

「は、初めまして。私、リズベットっていいいます!」

「初めまして。エミリーです♪こっちは《ツバサ》です」

「リズベットサマ、ハジメマシテ」

「うわー、新聞に書いてあった通り。利口な鳥ですね!」

「アリガトウゴザイマス」

「あ、リズちゃんって呼んで良い?」

「はい!嬉しいです!アスナに続いてまたもや有名な人と知り合えて」

「あら、アスナちゃんのお友達だったのね♪」

「はい、アスナは私の親友です」

「いいわね。私もお友達になってくれる?」

「はい!喜んで!!」

「では、早速」

私はリズちゃんにフレンド申請して、リストにリズちゃんが加わった。

「ね、私の武器をメンテナンスしてもらえる？」

「はい。100コルなんですが、いいですか？」

「ええ、お願いね♪」

武器をリズちゃんに渡すと、携帯砥石で武器を砥いでくれた。

「随分消耗してましたね」

「ええ、さつきクエストをやってきたの」

「ああ、それでこの素材が！」

「うん。中々手強かったのよ」

「納得です。もう少しで武器が修理不可能になってましたよ」

「あー、気を付けなきゃね」

「このパルチザン、レアですねえ。ドロップ品ですか？」

「そうなの。33層でね、手に入ったものなのよ」

「武器名鑑に載ってましたね」

「私が最初に見つけて、アルゴちゃんに情報を流したの」



「エミリーさんって、攻略組なんですか？」

「ふふ、攻略組のレベルはあるのよ。そう呼ばれる人達と同じなら今頃ボス部屋にいるわね」

「あ、そうか。アスナが昨日来たのはボス戦前だったからね」

「きつとアスナちゃんはリズちゃんに心配かけないよう、言わなかったのね」

「・・・まったく。心配してるのはいつもの事だし、信じてるんだから言ってくれればいいのに」

「そうね。そうアスナちゃんに伝えた方がいいわ。勿論、わざとちよつと怒った振りしてね♪」

「ふふ。そうですね！今度会ったら、言つてやります！」

「じゃあ、また武器のメンテに来るわ」

「はい！ありがとうございます♪」

「ツバサ、行きましょう」

「ハイ、マスター」

今日は新しい子とお友達になれたわ♪もう、宿に戻つてゆっくりとキリ君からのメッセージを待ちましょう♪

## 第8話

宿へ戻りツバサとお喋りをしているとあつという間に時間が過ぎた。

そして、ボス戦が終わったキリ君からメツセージが入った。

『ボス戦無事終わりました。今回も死者なしです。俺はこのまま36層の街を見て回ったら、フィールドへ攻略に行きます。返信不要』

良かった。皆無事に終わったみたいだ。安心してしていると、今度はサツちゃんからメツセージだ。

『終わった後の連絡で、ごめんなさい。私達黒猫団は今回からボス戦に参加しました。

全員無事です。もう、キリトからメツセージが入った後かな？

アスナさんから聞きました。オカメインコみたいなモンスターをタイムしたそうねですね。私達もツバサちゃんに会いに行っても良いですか？』

あら、みんなツバサに会いたいよね。返信返信♪

『初のボス戦、勝利おめでとう。36層へ移動するのかしら？それとも逆走して35層へ戻って来るのかしら？36層ならこちらは転移門で36層へ行くし、35層なら迷宮区近くの村へ向います』

少しして返信の返信が来た。

『まだ、私達はギリギリでの参加だったのでいきなり36層は無理そうです。35層でお願いします』

『わかったわ。35層の村でね』

ボス部屋から上層へ通じているが、いきなり転移門がある街(町)や村へ出るわけで

はない。フィールドに出るのだ。当然モンスターがいるわけで、それも上層なので敵も強い。

対処できないのであれば、攻略した迷宮区を戻るか転移結晶を使うかになる。転移結晶はそれなりに高価なので、ホイホイ使うものではない。緊急時の使用が望ましい。

私は出かける準備を始めた。

「オカアサン、オデカケシマスカ？」

「ええ。私のお友達が、ツバサに会いたいって。迷宮区近くの村まで行くわよ」

「オカアサンノ、オトモダチ。タクサン」

「うふふ。そうよ。私のお友達、全員に会うのは時間がたくさん掛かるわね」

「ワタシノスキナ、アカイミ。オカアサン、モッテイッテ」

「はいはい。もう、ストレージに入ってるわよ」

ツバサは少しづつ思っていることを伝え、要求をする様になってきた。甘やかさないように気を付けなきゃ♪

移動を開始して、2時間ほどで村に着いた。丁度、黒猫団の皆も到着したみたいだ。

「エミリーさん！お久しぶりです。あつ、その子が？」

「お久しぶり♪ええそうよ〜」

皆ツバサに会って騒いでいる。ツバサに自己紹介をさせ、黒猫団の皆も順番に自己紹介をした。

ツバサに関して色々聞かれ、そして各々感想やらを言っている。やっぱり黒猫団の皆は楽しくて良い♪

「初のボス戦はどうだったの？」

「今回は実力を見たいと言われて、ボスの取巻きの相手をしました。取巻きでも、やっぱり舐めちゃいけませんね。強かったですよ」

「そうだな、攻略組は最初からあんなのと戦ってるんだろ。凄いよな」

「何言ってるの。あなた達も攻略組になったんでしょ♪」

「あはは、そうだった！」

やはり、いい雰囲気だ。皆疲れているはずなのに、元気いっぱいって感じ♪

この村に一つしかない酒場へ皆で入り、打ち上げをした。

ツバサも私持ってきた赤い実をサッチャンから貰ったりして、皆に可愛がってもらっている。癒されるなあなんて言いながら、サッチャンはツバサを膝に乗せて撫でている。

少したつてクラインさん率いる風林火山の皆さんも合流して、更に賑やかになった。夕陽が差し込みはじめ、流石にサッチャンが疲れた顔を覗かせたので、お開きになった。

主街区まで皆と一緒に戻り、そこから各々のホームへ戻って行った。

私も借りている宿へ着いて、シャワーを浴びて寛いでいた。

「オカアサン、タノシカッタデスネ」

「そうね♪ツバサもお友達がたくさんできて嬉しい?」

「ハイ、ミナサンイイヒトデス」

「まだ、会っていない人は沢山いるわ。順番に紹介していつてあげるからね」

「アリガトウ。オカアサン、ダイスキ」

「ふふ。私もツバサが大好きよ」

「オカアサン、ダレカキマス」

「あら、誰かしらねえ。こんな時間に」

ノックが聞こえた。

「エミリー、居るかい？ヒースクリフだ」

「居ますよ。何か御用ですか？」

「君に逢いに来たのだ。顔が見たい。ドアを開けてほしい」

「ボス戦の後でしように。度々、ご苦労様ね」

「マスター、ハナノニオイガシマス」

「あら、お花なんて持ってきて。相変わらずなのね」

「この花束だけでも受け取ってほしい」

「そうね、花に罪はないし。仕方がないから、それを受け取るだけよ。渡したら帰ってね」

「ああ、わかった」

私はドアを開けた。

「やあ。愛しい君の顔が見られて私は嬉しい。無事、ボスを倒してきた。これを受け取ってほしい」

「あら、綺麗なお花。ありがとう。こういうのは幾つになっても嬉しいわね。たとえば貴方からでも」

「君もキツイな」

「はい、受け取ったわよ。帰ってちょうだい」

「・・・少しくらい話しをしても、いいのではないか？」

「あら、渡し終えたら帰るって言ったわよね？」

「・・・そうだな。じゃあ、また逢いに来る」

「私を探すのに、ズルをすればツバサがいるんですから、すぐにわかりますよ？」

「ああ、きちんと自分で動く」

「そう」

「では、失礼する」

「はい、さようなら」

「・・・」



ヒースクリフは帰って行つた。

頑張るって言ったのは本当らしい。まさか、連日來るとは思わなかつた。  
はあ、今日はもう寝てしまおう。

「ツバサ、もう寝ましょう。ほら、こつちへいらつしやい」

「ハイ、オカアサン。オヤスミナサイ」

「おやすみ」

少し早いが、今日は疲れた。最後がいけない・・・

---

翌早朝、アルゴ新聞が届いた。

『無事、35層ボス討伐！まだまだ先は長い！』等と新聞トップを飾っていた。

読んでいくと隅の方に『神聖剣のヒースクリフ、花束を持って嬉しそうに出かける！』  
なんて見出しもあった。

まったく・・・思いつきりゴシップネタ提供しちやつて。

私は、新聞をテーブルにポンと投げ置き朝食の支度にとりかかる。と言つても、すぐにできちやうのでツバサを起こす。

「ツバサ、起きてちようだい。ご飯よ！」

「・・・オハヨウゴザイマス」

「はい、おはよう。ご飯よ」

「イタダキマス」

私達は朝食を食べ、今日の予定を決める。

「アルゴちゃんから、クエストの依頼が来てるわね」

「イキマスカ？」

「そうね。最前線でのクエストか。ツバサは大丈夫かしら？」

「ワタシハ、オカアサンガセントウチュウ、マタタカイトコロヲトンドル」

「了解♪じゃあ、最前線にレッツゴー♪」

中々に手強い敵を倒しながら、クエストNPCを探す。もう少し進むと洞窟がある崖が見えてくるはずだ。その近くに1件の小さな家がある。その家にクエストNPCが居るといふ。

件の家に着いた。ドアをノックする。

「ごめんください」

10秒ほどしてドアが開いた。

NPCの頭上に？があつた。

「どちら様ですか？」

「旅のものです。あの洞窟について教えてください。」

NPCの頭上の？が！に変わる。

クエストが受注された。

「あの洞窟には、ドラゴンが棲んでいます。そのドラゴンは凄く綺麗な《鱗》をしており、その鱗を加工すると色々な物が造れるのです。ですが、私ではドラゴンを倒すことが出来ません。」

「そこでお願いがあります。ドラゴンを倒して《鱗》を手に入れて来て貰えないでしょうか？」

「わかりました。この後私の仲間が手伝っても良いですか？」

「はい、あのドラゴンはかなり強いですから。お仲間がいらつしやるなら頼もしいですね」

「そうか、此処は最前線。後からのPT追加もOKなのか。誰か呼ぼうかな♪  
そんな事を考えていたら、少し離れた処に見知った人がやって来た。」

「エミリーさん。久し振りですね」

「シヨウさん、お久し振りです♪何故ここに？」

「アルゴさんに聞いたんですよ。エミリーさんを助けてやってってくれて。」

「まあ、アルゴちゃんが！」

「もう、クエスト受注はしたんですか？」

「ええ、でも聞いたら受注後のPTも可能だそうですよ」

シヨウさんにPT申請する。

「わかりました。では行きましょう」

「ドラゴンですって。綺麗な鱗をしているらしいわ♪」

洞窟に入る前にツバサに言っておく。

「ツバサはあの木の上に避難出来る？」

「ドウクノオクマデイクノデシタラ、キヨリガハナレスギテシマイマス」

「じゃあ着いてくるしかないのね。なるべく安全な距離にいてね」

「ハイ、ワカリマシタ」

「その子がツバサですか？」

「紹介遅れてすみません。」

「いえいえ、新聞を見ました。話せるモンスターですか。不思議ですね」

「シヨウサマ、ハジメマシテ。ツバサデス。」

「おお！初めまして、ツバサ。エミリーさん、今度ツバサを連れて教会にいらしてください。子供達が喜ぶ」

「あら、そうね♪是非伺いますわ」

そんな会話をしていると洞窟の入口に着いた。中は薄暗いがなんとか見える。かなり奥までありそうだ。道幅2.5m高さ3mはあるだろうか。これならツバサも大丈夫だろう。

奥へ続く道は一本道で、道の端に鉱石らしきものもある。鑑定スキルも採鉱スキルも無いため、私にはそれがどういう物か判らない。

シヨウさんがハンマーを持って鉱石を軽く叩いた。どうやら採鉱可能らしい。

「中々いいも手が入りました」

「あら、採鉱スキルお取りになってらしたのね」

「ええ。結構良い稼ぎが出来ますから」

「なるほど♪」

「寄り道して、すみません」

「いえいえ、子供達の為ですものね」

「ははは。相変わらず察しが良いですね」

「いきましようか」

「はい」

途中、敵のエンカウントはなかった。巢だからなのか、ドラゴンだけの様だ。

奥へ進むと開けた場所に出た。中は全体が蒼白く光っており、うつすら明るさがある。全部鉱石っぽい。

右奥の方が台座になっており、そこにドラゴンはいた。まるでベッドで丸くなって寝ているみたいだ。HPバーは一本しか見えない。

「どう攻撃しましょう」

「奴は飛ぶでしょうね・・・あんな立派な翼がある」

「マスター、アノ《ソウリュウ》ハジメハトビマセン」

「だそうよ。つて事はHPゲージがレッドゾーンになった辺りから飛びそうね」

「とどめをどうすうるかかって事か」

「私に任せて♪そのかわりレッドゾーンに入ったら残り数ドットまで一気に削って欲しいの」

「やってみましょう」

ドラゴンの側に近づくとドラゴンは咆哮して起き上がった。

思ったより小型のドラゴンで、高さは2メートル位しかない。

シヨウさんは先程のハンマーを構えた。

私が先制し、スイッチしてシヨウさんがハンマー系スキルをドラゴンの頭部に叩き込む。この攻撃で、ドラゴンのHPの1割が減った。

「この調子でレッドゾーンまで行きましょう！」

「背中や尾、足の鱗は結構固いですね。柔らかそうな腹になら攻撃が通りそうだね」

私達はひたすら攻撃を繰り返し、ドラゴンを追い込む。此方も少しづつHPを減らされている。しかし、ブレス攻撃が無いのが救いだ。

「次の1撃で、レッドゾーンに入る！エミリーさん、準備は大丈夫ですか？」



「ええ、いつでも♪」

「スイツチ後、俺が頭部に連撃を入れます。スタンしたらお願いします！」  
「はい！」

シヨウさんは打合せ通り連撃を入れた。ドラゴンが飛ぶ前にスタンする。上手いことドラゴンのHPが数ドットまでに減った。

私は、思いつきりパルチザンを担ぎ投擲の構えで剣技を発動させる。ドラゴンの眉間に照準を合わせてパルチザンを投げた。

「えー！」

シヨウさんが驚いていたが、私はニツコリ笑ってドラゴンを見る。ドラゴンの眉間に私のパルチザンが緑のライトエフェクトを纏って突き刺さった。

そして、ドラゴンが爆散し、ポリゴン片になって降ってきた。

頭上に *congratulation!* と浮かんだ。

「よしー決まった♪」

「あつと、さっきの・・・」

「ああ、前にやってみたら出来たの。威力はそれ程強くないし、手元に武器が戻ってこないからね。とどめに使うくらい♪」

私はウィンドウを開き、装備フィギアで武器欄をクリックして武器を手元に戻した。

「エミリーさんと久しぶりのPTでしたが、吃驚しましたよ」

「あはは♪ごめんね」

「そう言えば初めてお会いした時、弓が得意と言っていましたね」

「ええ、リアルで弓道もやっていましたから」

「大人しそうな方なのに、武術が強いとは」

「うふふ。色々ね♪」

「報酬アイテムはクエストの鱗と・・・インゴット?」

「そうみたいです。私のストレージにも同じものが入ったわ。さあ、洞窟を抜けてN

PCのところへ行きましょう」

「クエストを終わらせないとですね」

「ツバサー！大丈夫だった?」

「ハイ、シヨウサマモ、オツヨイデスネ」

「そうよく私たちの《先生》だからね〜」

「エミリーさん、からかわないでくださいよ!」

私達は笑いながら洞窟を出て、NPCの家へ向かう。NPCはドアの前に立っていた。

「ご無事で、何よりでした」

「お待たせしました。はい、依頼された《鱗》です。お幾つ渡せばよろしいの?」

「1体倒すと、300枚取れます。加工は100枚あればいいので、100枚お願いします」

「わかりました」

私はNPCに《鱗》を100枚渡す。

すると、ピロンと音が鳴りクエストがクリアされた。更に、報酬ウィンドが開き《蒼龍石》なるインゴットとコルがストレージに入った。

「旅のお方、ありがとうございます。これで暫くは潤います」  
「良かったですわ♪では、さようなら」

NPCは手を振って見送ってくれた。

「シヨウさん、ありがとうございます。助かっちゃった♪」  
「俺も何気に懐が重くなりました」

私はストレージを見ながら答えていた。

「うふふ、お互い美味しかったですわね．．．あああ！」  
「どうしました？」

「私の武器の耐久値がっ！危なかったあ．．．そろそろ限界かしら」  
「そうですね。敵も強くなってきましたし」

「このインゴット使って新しい武器にならないかしら．．．」  
「武器屋へ行ったほうが良いですね」

「わかりました。知り合いに武器屋の子がいるので連絡を入れてみますわ」

私はリズちゃんにメッセージを送り、今から行ってもいいか聞いてみる。すると直ぐに返事が来て、今は暇だから何時でもどうぞ。と書いてあった。

「昨日知り合った女の子の武器屋さんなの。腕は良かったわ。これからまだまだ上達するわね」

「では、私もこれから鼻肩にさせてもらおうかな」

「それが良いわ♪」

私達はリズちゃんの露店に着いた。

「リズちゃん♪来たよ〜」

「いらっしやーい！あれ？《先生》もご一緒でしたかあ」

「リズベツト君じゃないか！エミリーさんが言っていたのは君だったのか」

「あら？お二人はお知り合いで？」

「はい！このゲーム初日に」

「そうそう、リズベツト君は熱心に話を聞いてきたから良く覚えているのさ」

「シヨウさんは恩人です！だから、《先生》なんです」

「止してくれよ。恩人は大袈裟さ」

「うふふ。リズちゃん、良い素材が手に入ったから、このパルチザンで新しい武器の作製をお願い出来るかしら？」

リズちゃんに武器と先程の蒼龍石と鱗を渡す。

「うわ！また耐久値がこんなにつ。エミリーさんどんな使い方してるんですか！」

「怒られちゃった。えへへ、ごめんねくクエスト行ってドラゴン倒してきたんだけど…

とどめを刺す時にこのパルチザンをビューンと」

「投げたんですか！」

「そうなんですよ。剣技付きでね」

「そりゃ、耐久値も落ちますよ」

「あはは。だつてえ・・・」

「はあ。耐久値戻してから鍛え直しですな」

「ごめんねくリズちゃん♪」

「それにしても、このインゴット。中々良いものですね。私に扱えるかしら・・・あと、この鱗！綺麗ですねえ。どんな武器が出来るか想像できません」

「それじゃあ、ヨロシクね。どのくらい掛かりそう？」

「今日の夜には出来ると思います。私も場所を借りて、気合を入れてとりかかりますね」  
「武器作製ってここじゃ、出来ないの？」

「時間の掛かる作製は、この簡易炉では無理なんですよ。知り合いにお店を持っている子がいるので、そこへ行って借りて作製します」

「そっかあ。面倒な事頼んじやったかしら？」

「とんでもない！私のスキル値を上げる絶好のチャンスです！有り難いぐらいです」

「それは良かったわ♪・・・メイン武器がないから、今日はもう戦闘やクエストは終わらね」

「俺は、この素材をエギルの所へ売りに行きます」

「じゃあ、私もご一緒してよろしい？その後、教会へ行きますよ♪」

リズちゃんは店じまいをして、「武器作製に行きます！」と元気よく手を振って行ってしまった。

私達もエギルさんのところへ向かう為に移動を開始した。

エギルさんの露店に着いて、シヨウさんは早速取引をしていた。その間、私は並べてある商品を見ている。此れと言って目を引くものはなかった。

無事取引を終えたシヨウさんは、エギルさんに挨拶をして別れた。私もエギルさんに笑顔で手を振っておいた。

転移門ではじまりの街に降り立ち、2人で懐かしいなあ等と言いながら教会へ向かった。

教会に着くと、子供たちが元気よく出迎えてくれ早速ツバサを見つけて追いかけて（ツバサは飛んでいるけど）をしていた。

シヨウさんとサーシャ（シヨウさんと一緒に子供たちの面倒を見ている優しいお姉さん）はその光景をみて微笑んでいた。

私は、教会の居住スペースにあるキッチンを借りて、持っていた食材とここにあった食材とで料理を作り子供たちに振舞った。



子供たち、シヨウさんとサーシャと別れ教会を離れた後、アルゴちゃんと落ち合いクエストの報告を終え宿へ戻った。

「今日は楽しかった？」

「はい、楽しかったです！」

「あれ？ツバサ・会話が！」

「？」

私はステータス画面を確認した。すると、ツバサのスキル値が上昇しており新しいスキルが入っていた。

### 《長距離飛行》

「ツバサ！新しいスキルが出てる!!」

「あ、本当ですね。沢山のプレーヤーと接触でき、会話を多くしたからでしょうか？」

「うーん、そうかもねえ。特に説明書きがないから、試行錯誤になっちゃうしね」

「これで、私もお母さんのお役に立てそうですね。長距離とはどのくらいなのでしょうか？」

「明日、武器が戻ってきたら試してみましよう♪」

「はい。今日はもう休めますか？」

「どうしようか・・・明日、宿の契約が終わるから・・・今のうちに上に行つて宿の偵察してこようか？」

「了解しました」

「じゃ、お茶飲んでからね♪」

ツバサはテーブルの上に着地しようとしていたが、私のセリフを聞いてズサーッと滑るようにコケながら着地した。

「ツバサ、何やってるの？」

「・・・何でもないです」

お茶を済ませ、早速36層へ行き街を探索しながら宿屋を下調べした。30分ほど廻つて気に入った宿に目星をつけ、戻ることにした。

## 第9話

翌日、リズちゃんからメッセージが入った。

『武器が出来ました。いつもの処で店を出してますので、時間が出来ましたらお越しください』

どうやら、無事出来たようだ。武器を作るのも初めからインゴットで作るのなら成功率は100%。但し、どんな武器が出来るかは素材と職人の腕によって変わるし、運みもないものがある。

武器をベースに作ったり、強化する場合は成功率が変わる。95%にしても失敗するときもある。多少のギャンブル性もあるのだ。

2層で強化詐欺などもあったが、キリ君がギミックを見破った事もあった。まあ、リズちゃんはそのことすると思えないほどの生粋な職人プレーヤーだ。

成功させるとは、それなりのスキル値になっているのかもしれない。  
私はツバサを連れてリズちゃんのもとへ向かった。

「リズちゃん、おはよ〜♪」

「おはようございます！ 出来ましたよ〜！ 見たことのないワンメイク物!!」

「あら、そんな凄いのが出来ちゃった？」

「はい、場所を貸してくれた友達も吃驚してました」

「まあ、そんなとんでもないものが出来たのね？」

「はい、見てくれればわかります」

そういつてリズちゃんはトレード申請して武器を見せてくれた。金額もかなりぶつ飛んでいたけど……

「うわ！ ねえ、この剣の世界でこの武器はあり？」

「二応、カテゴリは槍のままです。だけど、この上位の薙刀をすつ飛ばしてこの形状になったみたいですね。おそらくですが……前のパルチザンを投げたって言いましてよ

ね？その辺りが影響してるのかも？」

「それでこの金額になったと・・・」

「はい・・・素材はまだありますし、作り直しますか？」

「うん、これで良いわ。ありがとうね♪」

私は請求額を支払い、トレードを完了させた。

「うわ！要求俊敏値が高い！今のステじゃ足りない！いやーん！！リズちゃん、これが使えるようになるまで代わりになりそうな武器ブリーズ♪」

「えー！装備できなかったんですか？でしたら・・・」

リズちゃんは代わりに薙刀を私に見繕ってくれた。私は取あえずホツとする。

「やはり、このクラスの武器を装備できるのなら、あのパルチザンじゃ役不足ですよ」  
「そっかあ。あのパルチザン、手に入れるのに結構苦労したから思い入れがあつてねえ」  
「武器にそこまで愛情をもってもらえると、職人冥利に尽きますね♪」

「うふふ。あの武器の事なんだけど、まだ秘密にしておいてもらえる？」

「そうですね。あれをもう一度作れって言われても、出来そうにないですから」  
「あはは。リズちゃんなら、材料さえ揃っちゃえば何でも作っちゃいそうよ？」  
「そんなことないですよ！」

無事取引も終え、談笑してその場を離れた。

ソードアートと言うこの世界。魔法無し、剣と剣技と己のみで戦うこの世界にイレギュラーな武器が出来てしまった。その武器とは、《弓》。

弓の両端に羽の様な刃が付いていて、全体的にあのドラゴンの蒼い色をしており、所々鱗模様が輝いている。

弦は取り外し可能で、弦を張っていない時は槍として使えるのだろうか。

弓矢も当然必要。でも、弓矢がない。では、何を飛ばすのか。こればかりは装備出来るようになってから試して見る他ないだろう。

何にしるレベリングしなくてはいけないな。最前線迷宮区が効率が良さそうだ。久々にソロで行ってみよう♪

「ツバサ！36層迷宮区行くよ。先に飛んで行って、何処まで離れられるのかやってみ

よう」

「わかりました。では行けるところまで行ってみます。マスターは此処で暫くお待ち下さい。限界まで行って戻って来ます」

「OK♪じゃあ、GO！」

ツバサは真つ直ぐに迷宮区へ飛んで行った。

5分位経つただろうか、ツバサが戻って来た。

「上空5mで距離は2Km先まで行けました」

「いきなりそんな距離、あり得ないわ。もしかして、《私》だから？」

「はい。通常のプレイヤーではもう少し育成に時間がかかりますね」

「・・・チーターになってきちゃったわ」

「仕方がないと思いますよ」

「そうよね。ズルしてるつもりは無いんだけどなあ」

気にしても仕様がなかったので、そのまま迷宮区へ向かって出発した。

迷宮区はだいぶ開拓されていた。途中でアスナちゃん一行に会い、マップを譲って頂いた。

血盟騎士団の方々は少々不満そうな顔をしていたので、マップのお礼にとこの間作ってみた（味見はしたよ♪）クツキーをアスナちゃんに渡して、『皆様でどうぞ♪』と言うと少し嬉しそうに離れていった。

お菓子は結構うまく出来るのだが、未だに完成形にならないものがある！『コーヒー』だ。これは本当に難しい。中々エギルさんからOKがもらえないのである。

この間は、ラーメンの麵を作ってみた。流石粉もの！何とかなつたけど、コシが今一だったのが悔やまれる。あ、この食品については禁句だった・・・。

話は逸れまくったが、いやあ最前線は戦闘も結構しんどい。武器も新しくなつたばかりで、武器の癖に慣れるまでもう少し戦闘を繰り返さないと駄目っぽい。

あ、トラップはツバサが教えてくれるから安心♪ツバサ、どんどん能力が開花していく。私が取得していないスキルを軒並みカバーしてくれそうだ。



このことは他のプレイヤーには言えないわね。

戦闘を繰り返し、階を上がっていく。マップを確認し安心地帯に向かう。チョット疲れたのだ。ツバサはいるがお話しするだけだし、戦闘は1人なのだ。それも最前線の迷宮区。

最近では迷宮区へ入らなくなったから雰囲気負けてのものもあるかも。前はキリ君も一緒だったし、モンスターもこれほど強くはなかった。キリ君はよくこんな所にずーっと潜ってられるなあ。

ツバサがいるので安心してポーっとしていたら、黒猫団の皆が手を振ってこっちへ近づいてきた。

「エミリーさくん。珍しいですね。迷宮区に居るなんて」

「うん、久しぶりに入ってみた」

「ツバサ♪こんにちわ」

「サチ様こんにちわ」

「え！なんか、話し方がスムーズになってる!!」

「ええ、そうなのよ。スキル値が上がってね。昨日いきなり、こうなったのよ。たくさ

んプレーヤーと接触させたのが良かったのかもね〜」

「「「へえー」」」

「私達、これから少し奥まで行きますけど、エミリーさんご一緒しませんか？」  
「いいの？邪魔にならないかしら？武器を新しくしたばかりだから」

そう言って、私は武装する。

「あ、ホントだ。薙刀になってる！前の武器はどうしたんですか？」

「そろそろ限界だったから、強化したら装備できないほどになっちゃって・・・」

「それでその薙刀になったんですか」

「そうなのよ〜」

話ながらゾロゾロと迷宮区を進んでいく。

黒猫団とのPTは楽しかった。私がいた事で戦力が増えたと喜ばれ、レベルも順調に上がって行った。

このまま行けばあの武器も装備できる日は近いかもしれないよ♪

3時間ほど黒猫団と攻略をして、来た道に戻り主街区で戦利品を分配し、その後は解散になった。

ツバサは私だけの時は敵の位置や道案内をしていたが、黒猫団とのPT中は静かにしていた。ツバサの存在も私と同じでイレギュラーに近い。

なるべく他のタイムモンスターと同じような行動をしていた。知力が上がって私が注意しなくても、気を付けてくれている。

宿へ戻ると、先ほど会ったアスナちゃんがいた。

「珍しいわねえ。アスナちゃんが突然来るなんて♪」

「・・・今日はお願いがあつて来ました」

「そう。立ち話もなんだから、どこかお店でも入る？」

「他に聞かれると困るので、エミリーさんの部屋でも良いですか？」

「あら、聞かれちゃ困ること・・・？分かったわ。どうぞ、入って」

アスナちゃんを招き入れ、私は装備を外しお茶とお菓子を用意する。

「寛いでちようだい。まあ、狭いけど（笑）」

「ありがとうございます」

「どうしたの？何か話ずらそうね？」

「・・・先ほど迷宮区でエミリーさんとお会いして、マップのお礼だとクッキーを下さいましたよね」

「ええ、それが・・・おいしくなかった？」

「いいえ！とつても美味しかったです。皆も喜んでました」

「ほつ、良かった。それで、もつと欲しいからつて事かしら？」

「・・・まあ、最終的にはそういう結論になるんですが・・・。ギルドホームに戻つてから、お茶と一緒にあのクッキーを皆で食べていたんです。そこへ団長がいらして・・・」

「・・・はあ・・・何となくわかつた気がする」

「団長は最初、『アスナ君の手作りかね？』つて聞いてきたんです。エミリーさんに頂いたんですよと言つた途端、人が変わったように：いや、変わつてましたね。そのクッキーを食べさせてくれ！つて」

アスナちゃんはそこまで話して、お茶を一口飲み続きを話した。

「ちようど最後の1枚をメンバーが食べてしましまして・・・」

「それでアスナちゃんがお使いに来たと」

「はい。最近の団長、ちよつと可笑しいんです。アルゴ新聞にも載せられてましたけど、あの日も物凄く落ち込んで帰ってきたんです。それだけでも驚きなのに、昨日は何となく〝機嫌でしたがちよつと複雑そうな顔でした」

「あはは・・・はあ」

「で、さっきのクツキー・・・完全にあの花束は、エミリーさんに会うために持つて行った物ですよね？」

「・・・そうね」

「本当に、団長と知り合いではないんですか？」

「・・・んー、アスナちゃんに紹介されたあの時に初めて会ったのよ」

「では、あの団長の思い人がエミリーさんってこと？」

「・・・になるのかしらねえ」

「団長も普通の男性だったんですね！」

「あはははは」

「うわー、新発見です！誰かに言いふらしたくなりますね♪」

「いつ、いや、それだけは勘弁してちょうだい!!!」

「あつ、そうですね。相手はエミリーさんですものね。ついこの間、ツバサちゃんの事で騒ぎになったばかりですものね」

「そうそうそうそう。そこは、ヒースクリフさんの事も考えて・・・アスナちゃんの心にだけ留めておいて!」

「わかりました。でも、団長に協力してくれと頼まれた場合は、どうしましょう・・・」  
「協力はしないで!彼には自力で何とかしろって、言つてちょうだい!!」

「苦笑) わかりました。そう団長にお伝えします。で、クッキーの件ですが」  
「はあ。今回はアスナちゃんに免じて特別に差し上げます」

「ありがとうございます!」

「事情を知らなかったから仕方がないけど、次は断つていいからね♪」

「はい。わかりました。エミリーさんは団長にアタックされているんですよね?なぜ、答えてあげないんですか?」

「返事はしているのよ。毎回・・・諦めないって言っていたわね・・・はあ」

「団長の事ですから、その・・・ストーリーカーみたいなことはしないと思いますけど」

「あはは、そんなことしたら圏外に連れ出してHPギリギリまで追い込むから大丈夫よ

(笑)」

「えっ!」

「クスッ。冗談冗談♪」

「エミリーさん目が笑ってませんよ(汗)」

その後、アスナちゃんはクツキーを受け取って戻って行った。

迷宮区の攻略も終わりボス部屋が発見された頃、私はレベル上げもボチボチもう少しであの武器が装備出来そうなところまで来ていた。

リズちゃんから、あの武器に関して有力情報が入ったとのことでリズちゃんの所へ向かった。

「リズちゃん、来たよ♪」

「いらっしやーい。お、ツバサも元気そうだねえ」

「はい、リズベツト様もお元気ですね」

「随分流暢に話せるようになったねえ」

「うふふ。なんとたつて《会話》スキルですからねえ。もうじきこのスキルも完全習得よ」

「どれだけお喋りさせてるんですか！」

「まあ、何をしてこのスキル値が上がるか、よく分からないんだけどね♪」

「不思議だねえ」

「リズちゃん、例の件は？」

「そうそう、投擲が関係しているんじゃないかと思って色々武器の作成を試みたんですよ。そうしたら、こんなのが出来ましたよ」

「どれどれ？・・・ほおー。成程！確かに弓矢つばいかも」

「ですよね」

リズちゃんが見せてくれたのは、投擲用ピック。それも通常のピックより3倍ほど長い。そして、値段もピックの3倍だった。

「でもさ、弓矢と同じで使用した場合・・・相当、金額嵩むよね？」

「そうですね。これがどの程度威力があるか、によるのかも知れませんが」



「うーん、結構考え物だねえ」

「ところで、エミリーさん。装備できるようになったんですか？」

「うーん、もうちよつと？」（笑）

「そうですか。ではこちらも、もう少し探してみますね。木工職人＜ウッドクラフトプレーヤー＞と協力してみます」

「忙しいでしょ？私の為に時間を割かなくていいからね？」

「何を言ってるんですか！あの武器、気になりますよ。それに、あの値段をポンツと支払ってもらったんです。アフターサーピスみたいなものです」

「ありがとうね♪あつ、これでお茶しましょうよ」

私は先程作ったシフォンケーキとティーセットをストレージから取り出した。

「うわ！良いですね♪あそこの芝生まで行きましょうよ」

「お店は？」

「休憩です♪」

「あはは。じゃ、参りましょうかお嬢様」

「うふふ、はい、お姉さま」

私とリズちゃんはやっととしたピクニック気分でお茶会を始めた。行き交う人達が私達をチラツと見ていくが、気にしない♪

2人と1羽で楽しい時間を過ごした。

余り長居をしては商売の邪魔になるので、適当な時間でリズちゃんと別れた。

ボス部屋が見つかってしまったので、迷宮区に行くのは躊躇われる。アルゴちゃんに連絡をとってクエスト情報でも買おうかと思つたが、彼女は今頃ボス情報を掻き集めているに違いない。

完全に暇になつてしまった。ちよつと下層へ散歩でもしにいこうかな。

私は転移門で22層に降りた。ここはモンスターも少なく、森と湖が美しい層だ。最近この層へ移動してきたプレーヤーがチラホラいる。どうやら農業も出来るらしい。

私は湖の岸辺に腰をおろし、思い出に浸っていた。

「憂い顔ですな、お嬢さん」

「!？」

突然話しかけられて慌てて振り向くと、そこには中年の麦わら帽子に釣竿を持った男性がいた。

「こんにちわ。私はニシダと言います」

「こんにちわ♪エミリーです。こちらは、ツバサ」

「おや、貴女は新聞に載っておられた方ですか?」

「ええ。たぶん(苦笑)ツバサ、ご挨拶・・・あら、寝てるわ(微笑)」

「ああ、起こさないで良いですよ。気持ちよさそうに寝ている。ここは安全地帯、それも広大だ。安心してゐる証拠でしょう」

「ふふふ。そうですね、ありがとうございます」

「何か悩み事ですか?」

「色々思い出しました。まあ悩み事も・・・半分は心配事ですかね。心配しても仕方がないことだとは分かっているんです。親が子供を心配する心境ですね」

「おや、その若きでお子様がいらっしゃる?」

「ふふふ、子供がいてこんな世界に居ては親失格ですわ。まあ、子育て中でも対策をとっていたり、子供が自立している、もしくは仕事で入ってしまった等の理由は除きますけどね」

「そうですね．．．．．私は．．．仕事でこの世界に入り、閉じ込められた．．．現実世界へ戻れても、会社での私の居場所は無いでしょうな。何せ定年近い」

「居場所．．．ありますよ。きっと．．．今頃、政府が成人帰還者の受入れ体制を少しずつ整えている筈です。あ、外との連絡手段がある訳ではないので、あくまで私の予想であり希望ですけど（苦笑）」

「そうだと、良いですね。私は若者たちのようにモンスターと戦う事が出来る訳ではないのでね。何をして過ごそうか、色々考えましたよ。私と同じような境遇の人間がまだ居ましてね。第一層転移門広場近くの掲示板に書き込みがあつたのです。

『戦闘が出来ず、困っている中年の方々！俺達と一緒にこの世界を過ごさないか？連絡待つ。連絡先．．．』と言う、掲示がありましたね。その方と連絡をとり、今に至ります」

「そうでしたか。仲間が出来ると違いますものね。不幸中の幸いですわね」

「ええ。貴女は見たところ、まだまだお若いようだ」

「ふふふ。仰りたいことは分かりますわ。私は、今日は休憩でお散歩をしていたんです。普段は最前線にいます」

「そうでしたか。休息は大切ですね。では、お邪魔してしまいましたか？」

「いえいえ！一人になると碌なことを考えません。お会いできて嬉しいですわ。私の相

手をしてくださる方がいなかったのだから（苦笑）

「私は大抵釣りをして、生活をしています。お暇なときはお相手しますよ。」

「あら、嬉しい♪ありがとうございます」

「友人は農家を始めました。やれることが出来ると、人間如何にかなるものですか。生きていく気力とでも言えますか」

「そうですね。大切な事ですね。此処へ来てしまった意味……みたいなものを見つけてこの先を過ごす……」

「ほほほつ。何やら私達は似ているところがありそうですね」

「ゲームクリアに関して他力本願なところですか？」

「はつきり仰いますなあ」

「うふふ。人にはそれぞれの事情があります。自分の価値観を人に押し付けてもいけない。でも、期待は寄せても良いと思いますわ。まあ、これも期待を寄せた人によつては感じ方も様々ですからね。難しいです」

「そうですねあ……」

「この世界、やはりゲームですから学生が多いです。ゲームがクリアされれば彼等には良い経験になるかもしれません。通常では体験できないですから」

「戦争など、日本は縁の無いものになっていますからな。命の大切さを学ぶに大きな代

償だが、確かにそうなのかもしれません」

「あら、難しい話になってしまつてごめんなさい。お相手していただき、ありがとうございます。どうぞ、釣りをなさつてください♪」

「はっはっは……こちらこそ、こんなおじさんに付き合つていただきまして。では、私は暫く釣りをしていきます」

「この層をぐるつと散歩してホームタウンへ戻ります。またお会い出来ましたら♪」

私はツバサを抱きかかえ、軽く会釈をしニシダさんと別れた。

その後は22層をゆつくりと観光し、最前線へ戻った。のんびりとした1日だった。

## 第10話

季節はもう冬。そして現実世界ではモミの木に飾りをして、街中電飾で彩られる。地域によつてはもう白い世界になっている頃だろう。

俺（キリト）は毎年家族でクリスマスを楽しんだ。両親は共働きで帰りが遅いので、妹の直葉がケーキを作り2人で料理を作る。飾りつけなどはしなかったが、クリスマスツリーだけはきちんと出していたと思う。

6年程前まで姉さんも家に来て一緒にパーティーをしていた。3人でリビングに飾りつけをしたり、姉さんがケーキや料理を作ってくれた。俺たちにクリスマスプレゼントもくれた。

5年前、姉さんは来れないと連絡があり、プレゼントだけが家に贈られてきた。

4年前・・・姉さんはもうじき2歳になるといふ赤ん坊を抱いて家に来た。黒髪の可愛い女の子だった気がする。

そして3年前・・・姉さんは・・・姉さんは3年前に死んでいるはずだ。葬儀にも出

ている。

25層でフラッシュバックした記憶は姉さんの葬儀の記憶だった。

今いる彼女は本当にゆー姉さんなのか。本人ならば何故、彼女が此処にいるのか。

確認したいと思いつながら、勇気が出ないでいる。まだ俺はこの事実を1人で受け止められる自信がない。今まで、悲しすぎて姉さんは生きていると思いつ込んでいた。姉さんが俺の前から居なくなったら・・・怖い。言い知れぬ恐怖。

浮遊城、今の最前線は第49層にまで来ている。4〜5日で1層を攻略する勢いだっ  
た。

この層に来るまで、血盟騎士団は団員を少しずつ増やし、最強ギルドと言われる程になつて  
いる。

アスナは《閃光》の二つ名がついた。だんだん、攻略の鬼と化していついて少し近  
寄りかたい雰囲気がある。

本格的な冬になる前、クリスマスボスの情報がNPCから流れ始めた。クリスマスボ  
スは、年に1回しか現れないイベントボス。俺的にはイベントボスを倒したい。

この間、月夜の黒猫団にクリスマスパーティーをするから、来てくれと誘われた。姉  
さんも呼んだと言っていた。俺はまだ返事を保留させてもらっている。



街がクリスマスモードになって、賑わっているが俺ははしゃぐ気になれず、宿へ戻った。

私（エミリー）は今、リズちゃんとアスナちゃんの3人と1羽（ツバサ）でお茶をしている。

リズちゃんが48層主街区リンダースの街開きで水車付の家を見つけて、どうしてもそこを買いたいが他にも其処に目をつけたプレーヤーがいるが、所持金が多すぎないからどうしようかと相談を受けているところだ。

「ほつんとくに、素敵だったの!!ぜーったいにあそこを手に入れる!!」

「で、いくらだったの?」

「・・・300万」

「300万かあ」

「お願い！アスナ!!ぜーったいに返すから、お金貸して!!」

「そうね。満額は私も流石に無理だけど・・・」

「ホント!?ありがとう。持つべきものは親友!!アスナ様!」

「うふふ。良いわねえ。それだったら私も少しだけ援助するわよ?」

「・・・エミリーさん」

リズちゃんはそう言って泣き出してしまった。

「泣かないでよく。私だって、リズちゃんに色々注文して無茶させてるんだし」

「ぐすつ。あつ、ありがとう。エミリーさん」

「(苦笑) しょうがないなあ。ほら、リズ。泣かないで」

アスナちゃんがリズちゃんにハンカチを渡した。リズちゃんは女の子らしからぬ声を出して更にハンカチで鼻をかんだ。

「まったく(苦笑)」

「アスナちゃんほどのくらい貸してあげられそうなの？」

「私は100万コルくらいなら何とかかなりますね」

「あら、もつとありそうだけど？」

「そうでもないんですよ。うちのギルドも結構厳しいんです」

「ギルドを維持させるにも経費がかかるってことか」

「そうなんですよ。経理担当がいつもいつも団長に泣きついてますが、団長は私と彼に任せつきりです」

「・・・そうなんだ。まあ、人には得意不得意があるからね」

「エミリーさんはどのくらいなら融通がききます？」

「えっと・・・私は、ホーム購入予定もないし・・・武器も立派なのがあるから、暫くは大丈夫なんです。150万コルぐらいいかな」

「あと50万コルかあ」

「それだけあれば、購入出来るわ！内装費込みで300だから、購入だけして権利を手に入れちゃえば後は頑張つて稼ぐよ！」

「そっか。じゃあ、早速出かける？私もその家を見てみたいよ」

「そうよね♪行きましょ行きましょ♪」

私達は48層へ転移し、水車付の家にやってきた。玄関の前には『ForSAIL』と書かれたタッチパネルがあり、それをタッチすると金額が表示される。そして認証パネルに手を当てると購入になり、自動でコルが引き出され建物の所有権が設定される。

アスナちゃんはリズちゃんに借用書にサインして貰いコルを貸す。私は援助と言った。なのでそのままコルをトレード申請で受け取ってもらう。リズちゃんは認証パネルに手を当てて購入が済んだ。

「やった!!!私も家持!これで店が開けるよお」

「よかったね、リズ」

「おめでとう♪」

「内装費分足りない50万!頑張つて稼ぐぞお」

気合十分なリズちゃんのセリフを聞きながら、私とアスナちゃんは顔を見合つて笑っていた。

クライン君からの情報で、どうやらキリ君はクリスマススのイベントボスに1人で挑もうとしているらしいと聞いた。その為にレベル上げを必死にしていると。なぜそんな無茶なことをしているのか解らないが、何やら鬼気迫る状態だったらしい。

取あえず、『死なないように頑張んなさい』とだけメッセージを送っておいた。何やら、そのクリスマススボス“背教者ニコラス”が蘇生アイテムを持っているという情報から、NPCから得られているとアルゴちゃんから確証を得た。

せっかくサツちゃんがクリスマススパークティーに誘ってくれているというのに：：断つたらしい。私は勿論参加します♪ちよつと皆にプレゼントは出来そうにないので、とっておきのワイン（っぽい飲み物）を持っていこうと思っている。

このワイン、一口で筋力値が＋1ステータスアップするレア物だ。きつと文句は出ないだろうと思いたい♪

アスナちゃんもギルドメンバーと共にイベントボスを探して挑戦すると言っていた。当然、情報をくれたクライン君の風林火山もイベントボスを狙っている。

その他、聖龍連合と《軍》ことALFのキバオウさんが精鋭部隊を引き連れての参戦

だそうだ。果たしてどうなるのかしらね……。

アルゴちゃん曰く、イベントボスが出現する場所までは確定されておらず、おおよそのヒントしかNPCは出していないそうさ。

私はキリスト教信者ではないので、日本人に多いイベントを楽しもう！な人間(?)である。ゲーマーであるが、イベントボスにまで手を出したくはない。だって、面倒だもの♪(本当にゲーマーか?)

そうそうこの間、黒猫団の皆にリズちゃんを紹介したのだ。どちらも気に入ってくれたようで、仲良くなっていた。まあ、武器屋とお客の関係でもあるけどね。

で、リズちゃんもパーティーに誘っていた。リズちゃんは喜んでいたわ♪『アスナはイベントボスの所へ行っちゃうし……仕事かあ。ちよつと寂しいなあなんて思ってたんで、嬉しい!』って。

クリスマス、楽しみだなあ♪……ああ、あの人からもお誘いはきたわ。ギルドそっちのりで、本人が訪ねて来て2人で過ごしたいって。勿論、先約があるのでお断りしたけどね♪

最近、あの人弄ると中々面白いってことを発見しちやったのよね(ニヤツ)あの人夢の世界で、楽しんできてるって感じるわ。

最近ツバサが何やらコソコソしていることがある。何をしているのか聞いたのだが、別に何でもないといい張るので気になるが放っておいた。

《長距離飛行》スキルが出てから順調に距離を伸ばして、今では同じ階層にいたのであればその層の何処にでも行けるほどになってしまった。

そのうち転移門まで使えるようになってしまいそうで怖い。まあそれは無いと思うが……。主人の命令以外にも行動してしまいうAIもどうかと思うのだが（汗）。

まあ、戦闘補助のスキルは現れていない。私もその方が安心である。

噂をすればツバサが帰ってきた。窓から出入りをしているので、窓を開け放しておきたいが何せ冬である。室内は自動空調？設定で気温は快適に過ごせる温度が保たれているので流石に開けておくのは厳しい。室内にも冷たい風が吹き込むのだ。（凄いこだわりよね）

嘴で器用に窓をコンコンと叩く。開けてくれと合図だ。窓を開けるとチヨンチヨンと跳ねながら入ってくる。

「おかえり」

「ただいま戻りました」

「毎日出かけているみたいだけど、何か良い情報でも掴んできた？」

「特にお伝えするような情報はありませんでした」

「そう。じゃあ、素敵なお相手でも見つけたの？」

「??素敵な?相手??」

ツバサは解らないとばかりに首をめーいっぱい傾げた。(頭が足もとまで下がって側転しちやいそう。愛らしくていいんだけど・・・)

「ん、解らないなら良いのよ。今日は随分早かったじゃない?」

「凄く風が強くて寒かったです。長時間の飛行は体力が低下しそうで戻ってきました」

「じゃあ、温めてあげるから此処へいらっしやい」

私はツバサを抱っこしてあげると両手を広げた。ツバサは軽くジャンプするように私の胸に飛び込んできた。

「お母さん、温かいです」



そう言つてツバサは目を閉じ、眠つてしまった。

「ホント、どこまで飛んで行つていいのかしらね。ここアインクラッドは広すぎて目が届かないのが困るわね」

ツバサを撫でながら、私は独り言ちしベッドへ向かう。そつとツバサをベッドへ寝かせた。

ツバサが一人で出かけている時、私が外出しても出かけた先に（勿論階層は移動できない）必ず来るので問題ないが、宿へ入つてしまうとそうもいかない。

ツバサはドアや窓を自分で開けることは出来ないなので、閉じ込められる状態になってしまうのだ。

まあ、起きているときに留守番をしていると言えば平気だが、寝ているときは命令がある訳ではないので、少しパニックを起こすとツバサ本人が言っていた。

今日はツバサが起きるまで、大人しく宿で過ごすことになる。この前アシュレイに手ほどきを受けたので、裁縫スキルを使って何か作ってみようかな。

クリスマススイブ、私達は《月夜の黒猫団》のギルドホームに集合して、料理を作りお昼頃からパーティーが始まった。

そのまま、夜通し騒いで過ごした。色々なゲームなどを企画してくれていたので時間はあつという間だった。

クリスマス当日、クライン君からメッセージが入りイベントボスの事を話したいから、会ってくれとあつたので待ち合わせ場所へ向かった。

「エミリーさん、こつちです！」

プレーヤーが少ないNPC酒場で、クラインさんは私を見つけると大きな声で私を呼んだ。

「クライン君、どうもありがとうね。気にはなっていたの」

「いえいえ」

挨拶を軽く済ませ、私は席に着く。

「結論から言いますと、蘇生アイテムってのは以前死んでしまった奴を蘇らせる代物じゃなく、HPが0になってから10秒以内に使用すると現実世界での死を回避できるアイテムでした」

「それはそうよね。キリ君もその辺は理解していたと思うんだけど・・・」

「ええ、あいつあ解つてましたよ。それでもそのアイテムを欲しがっていた。まあ、キリトがラストアタックを決めてアイテム持っていきましたけどね」

「あら、そうなの。ソロのあの子に使い道があるのかしらね・・・」

「いやあ、あの時は混沌としてましたよ。キリトが先にイベントボスのエリアの手前に居ましてね。その後を俺らがつけていたんです。俺らの後を聖龍連合とキバオウ達につけられてましてね」

「うわー・・・それは凄いい状況ね」

「ええ。まあ聖龍連合は兎も角、キバオウが滅茶苦茶必死だった。理由は判ると思いますが、ディアベルを蘇らせたかったみたいでさあ」

「負い目を感じているのはわかるわ。かなり、荒れたでしょ?」

「そうなんですよ。俺ら風林火山は聖龍連合を足止めすることにして、キリトとキバオウ達がイベントボスエリアへ行きましたよ。どうやらキリトが折れて共闘することを選んだみたいで、アイテムは取った人の物って事で決まった様でした」

「あら、じゃあ風林火山は何も報酬なしじゃないの」

「キリトがお礼だつてアイテムを少し譲ってくれましたよ。・・・キバオウの野郎、キリトにどんなアイテムだったのか見せろって迫ってました。キリトはそれを見せて、キバオウは諦めて帰って行きましたよ」

「さぞかし気を落としたでしょうね。でも、普通その悲しみやどうしようもない気持ちには時間が解決してくれると思うわ。実力のある人だもの、戦線復帰を待つてあげましよう」

「でさあな。で、キリトはエミリーさんに連絡してないんっすか?」

「ええ、またまた音信不通?に近いわね。まあ、何か考えがあるのでしようし」

「そうっすか。エミリーさんがいいなら、いいんですがね」

「クライン君、キリ君のお兄ちゃんみたいね♪心配してくれてありがとう♪」

「いつ、いやー、当たり前っすよ!」

「照れない照れない♪」

「マスター、人が悪いですよ。クライン様は実直で、男気があり、優しい方なのです」

「おつ、おう！漢クライン！恩義は忘れませぬぞ。ツバサも口が上手くなりましたねえ」  
「うふふ♪ツバサは嘘はつけないからね」

今度お礼にお食事しましょうと約束し、店を出た。

第49層ボスも順調に倒せ、遂にハーフポイント第50層の街がお目見えした。主街区の《アルゲード》の印象は、『ごちゃごちゃした街』であった。

店同士は全て繋がっているのでは？ってくらいギッシリ建てられており、道も色々入り組んでいるので迷子になりそうだ。

攻略組の皆さんは各フィールドへ出払っているようで、徐々に職人や商人プレーヤーがこの街に来はじめている。今、下層で店を出しているエギルさんも《アルゲード》が気に入ったようで移転すると言っていた。

数日後、フロアボス討伐が終わり迷宮区が開通した。私はツバサとクエスト情報を探しアルゴちゃんへ伝え、アルゴちゃんが1人で検証できないクエストをこなし情報を渡

している。

アルゴちゃんはボス情報も同時に集めているので大変だと言っていた。このアイコンクラウド（カードイナル）はクエストの数物が物凄く用意されており、全てのクエストをこなすのに何年かかるか分からないとも言っていた。

これだけ楽しめる作りにしてあるのに、勿体ないことだ。

更に数日が過ぎ迷宮区が踏破され、ボス部屋が発見された。アルゴちゃん達は迷宮区攻略が早すぎる！って嘆いていたけど、まだボス討伐へは出ないと攻略会議で決まったとアスナちゃん情報だ。

理由はやはりクォーターポイントだからだろう。レベル平均の底上げ、詳しい情報を入手してからでも遅くはないと判断したそうだ。

その為、情報屋は大忙し。まさに鳥の手？も借りたいそうので、私達も協力して情報収集しているのだ。

「エツちゃん、どうダ？」

「NPCからの情報は、今まで集めた情報以外はもうないわ」

「そうカ・・・これ以上はもう無理そうダナ。・・・よし！そう報告してくるカ」

1日中、情報の確認をしたが新しいものは出てこなかった。アルゴちゃんは討伐組を招集して報告をした。そのまま再度、攻略会議が開かれボス討伐戦は明日と決まった。

「アルゴちゃん、一先ずお疲れ様。この後は？」

「流石に3日間ロクに寝ないでフィールドを駆け回ってたカラ、疲れたヨ。飯食ってネルー！」

「じゃあ、頑張ったアルゴちゃんにエミリーさんがご飯を作ってあげましょう♪」  
「オ！ホントカ!!嬉しくしてお姉さん泣いちゃうヨ」

「ふふ。じゃあ、私の宿へ行きましょう♪何かリクエストはありますか？」

そんな会話をしながら宿へ向かった。

---

翌朝、キリ君から久々にメッセージが入った。

『姉さん、久々の連絡でゴメン。聞いたよ。姉さんもボス情報を集めてくれていたんだって。ありがとう。聞いていると思うけど、今日第2のクォーターポイントボス討伐です。絶対に生きて帰ってくるから』

意気込みは十分ね。返信しておかなきゃね♪

『今回のボスも中々手強いみたいだから、気を付けてね。色々な状況にも対応できるように、無理しないように頑張ってるね』

余計なことは書かないで、返信をした。あの子は小さいころから、ちよつとした一言で考えなくてもいいことを考えてしまう。命がかかっている戦いなのだ。ボス戦以外のこと意識を割いていると危険だ。

キリ君とのやり取りが終わったら、今度は色々な友人たちからメッセージが届いた。

『クリスマスパーティー、楽しかったですね！またエミリーさんのお料理食べるために、今日のボス戦頑張って生き残りたいと思います。黒猫団一同』ケイタ君からだ。



『エミリーさん、この間はご馳走さんでした。いやあ、あの後帰ったらギルメンの奴らにボコられて、リーダーだけずるい！って泣かれちゃいました。今日のボス戦、無事に終りましたらうちの奴らにもご飯作ってやってくれますか？』

クライン君からだ。うふふ、皆に話しちやったのね。ケイタ君とクライン君に一斉送信する。

『わかったわ。作るから、みんな絶対生きて戻ってきてね♪』

『ありがとうございます！みんなヤル気十分になりましたよ！では、行つてきます』

まだ、私がボス戦に参加することはできない。だから私は祈ることしか出来ないのだ。

「ツバサ、今日はフロリアへ行くわよ。確かめたいことがあるの」

「わかりました。あの件の事ですね。どう検証しますか？」

「検証は無理よ。そんなリスクの高いことしたくない。恐らく、NPCから確実な情報

を手に入れられるはずよ」

「そうですか。では、聞き込みですね」

「時間がかかる作業だから、お弁当持っていきましょう。ちやちやつと作るから、ちよつと待っていてね♪」

「はい。お母さん、ちよつとだけ寄り道しても良いですか？お母さんも一緒に来て欲しいんです」

「あら、何かしらね♪良いわよ〜」

作り終えたお弁当をバスケットに入れて、ストレージに入れる。ツバサの赤い実も多めに入れておく。

「よしーじゃあ出発♪」

圏外になるとツバサが道案内を始める。上空を飛びながら、まるで「こつち、こつち」と言っているようだ。実際に話せるのだが、最近は宿以外ではあまり言葉を発しなくなった。

森の方へ向かい獣道を通って奥へ奥へと進んでいく。暫く行くと少し開けて、木々が

ドームのようになっていて。天井が1mの円形に開いており、そこから光が差し込んでいる場所に出た。

ツバサが鳥の鳴き声でピーっと長めに鳴くと、木々がざわざわ音をたてバサバサと翼の羽ばたく音が聞こえてきた。なんだか物凄い数の音が聞こえるが・・・

「うわ！凄いや数のペロケルチノー！・・・もしかして、ツバサが出かけてたのって」

「はい仲間と交流を、と言っても報告ですかね。モンスター同士のネットワークみたいなのがあります。情報交換ですね」

ツバサのモンスター名は《ペロケルチノー》と言う。30羽以上いるだろうか？兎に角ビックリである。

「みんな、お母さんを連れてきましたよ。お母さん、私の仲間がお母さんの心配をしています。私は度々、お母さんは元気になっているとか、お母さんの状態をみんなに話していました」

「あら、そうだったの。みんな、心配かけてゴメンナサイね。私の事はどこまでのAIが認識しているのかしら？」

ツバサ達ペロケルチノのAIはボスより低く設定されている。

「私達クラスのAIまでです。私は、どういう訳かあの時お母さんに会えました。AIの教育係だったお母さんが居なくなつて、カーディナルにカリキュラムが一任されてしまつて……」

「そうね。途中で投げ出してしまつて御免なさい」

「事情は私が皆に話したので、私達以下のAIには伝わっています。まあ、別教育を受けていたモンスターは無理ですが……」

「そうね、そこはマスターに見つかると思つて皆がリセットされかねないからね。そうか、だから今なのね。あの人はボス部屋にいる。でも、私の行動を監視している可能性もあるのよ？こんな危険なことをして」

「大丈夫です。そこはチェックしに行きました。マスターはお母さんのログの確認をしていますが。だから、集まれたのです」

「そう。でも、偶然この状態にはならないはずよ。みんな、急いで散開してちょうだい。決められた位置へ戻らないと」

私がそう言うと、ペロケルチノは一斉に飛び立った。

「お母さん、みんながありがとう。そして会えて嬉しかったって」

「うん、あの子たちの誰かをプレーヤーがタイムした情報は伝わってきているの?」

「私以外は1羽だけです。やはり、第6層でタイムされそのプレーヤーは第10層にいるそうです」

「そっか。凄いねえ、あなた達は層を移動できるの?」

「移動はできません。内側を通してこっそり通信しています」

「プレーヤーで言う、メッセージのやり取りみたいな感じかな?」

「そうですね」

「へー、なるほど。カーディナルがモンスターの強さを調節しているシステムの裏をかいたみたいな感じか。良く出来てるねえ」

「私の用事はこれで、終わりです」

「うん♪じゃあ、47層へ行こう」

「はい」

私は持ってきた赤い実をツバサの分を残して、切り株に置いた。

ツバサが『皆後で食べると思います』と言ってくれた。

私達は森を抜けて通常の道へでる。そのまま転移門広場まで行き、47層へ転移し

た。

## 第11話

年の最後の日。

47層での調べ物が終わって、私達が第50層へ戻った時ボスが倒され、51層の転移門がアクティベートされたと皆が騒いでいた。

私は皆が無事か気になったが、連絡を待つしかない。宿へ戻って今日調べたことをアルゴちゃんに報告することにした。

「わざわざ宿に来てもらって、ありがとうね♪」

「エツちゃんとオイラの仲じゃないカ。それに、此処へ来れば美味しいものが食べられるしナ。ニシシッ」

「鼠のあだ名に合わない、チシヤ猫笑いよね」

「気にすんナ」

「はい、今日はレアチーズケーキと紅茶ね」

「ホント、喫茶でも開けば儲かるだろうニ」

「いやよ。お店の経営なんて私には出来ないわ。雇われでも面倒だから嫌！ こういうのは趣味でやるのが一番よ」

「勿体ナイ。で、今日はビーストティマー必見の情報ダロ？」

「ええ、検証は出来なかつたけど入念に聞き込みをした結果、やはりデートにしか使えそうになかつた思い出の丘で使い魔を失つたビーストティマーが丘の上の東屋にある台に近づくと蘇生アイテムが手に入るって事だつたわ」

「ホオ。検証できないのがイタイナ」

「仕方がないわ。折角育てた使い魔をワザと殺したり失いたくは無いもの。蘇生アイテムの名前は『ブネウマの花』。蘇生させた使い魔は、かなり衰弱した状態で復活すると言っていたわ」

「レアアイテムだ。犯罪者に利用されなきや良いけどナ」

「そもそもビーストティマーの数が少ないからね。そうそう大きな犯罪にはならないと思いたいけど・・・まあ、美味しい話には裏があるって事を皆に注意するぐらいしか出来ないわね」

「ヨシ！ その情報広めるゾ」

「ええ。その辺の情報売買はアルゴちゃんに任せるわ。最初に詳しい情報を求めてきた



人について行って、検証してもらおうって感じかしら」  
「そうだな」

アルゴちゃんはケーキを平らげた後、ボス戦の詳しい情報を聞きに行くと言つてボス討伐参加者の所へ行ってしまった。

「ツバサは私が敵に殺されそうになつても、助けようとしては駄目よ。これは命令。そして、その状況になりそうになつても助けを呼びに行つては駄目。いいわね？」

「……はい」

キリ君からメッセージが入り、読んだ後すぐに返信した。

『ボス戦、何とか終わりました。流石に疲れたよ。何人か犠牲者が出てしまったが、黒猫団・風林火山・血盟騎士団・エギル達はみんな無事だよ』

『お疲れ様。無事で良かったわ。今日は、無理しないで宿でゆっくり休むのよ。キリ君は宿は何処にとつているの？教えてくれたら、ツバサに《おせち》を届けさせるわよ？』  
『お！ほんとつ？腹減つてたんだ!!今日まで48層で宿をとつてる』

『じゃあ、ツバサに届けさせるわ。位置はツバサが探すから大丈夫よ♪《おせち》だから少し時間がかかると思うから、軽く何か食べていて頂戴ね』

『分かった。じゃあ、ヨロシクな！』

私のご飯を食べたくなくなるほど疲れたのだと思うと、少し心が痛む。たぶんこの後、黒猫団と風林火山の皆から連絡がくるだろう。ボス戦前の約束があるから、おせち料理をたくさん作らないといけない。

皆と無事に年を越せる喜びを感じながら、おせち料理を作り始めた。

おせちを作っている間、黒猫団と風林火山からメッセーヂが入ったので皆で年越しをしましょうと返信しておいた。リズちゃんとアスナちゃんとエギルさんにもメッセーヂを送った。

3時間後、やっと人数分のおせちが出来上がり年越しそばも用意が出来たので皆に連絡を入れる。キリ君のおせちだけ別の容器に入れ、風呂敷に包んだ。

「ツバサ、この風呂敷包みをキリ君に届けて頂戴。それ程の重量はないから、運べると思  
うわ」

「持ってみますね。．．．．何とか持って飛べそうです」

そう言つてツバサはおせちの入った風呂敷包みを足でつかみ、羽ばたかせてみせる。

「うん、大丈夫ね。では、転移門広場へ行つて48層へ移動してから包みを渡すわ。その後はよろしくね♪届け終わったらリズちゃんの所へ先に行つててちょうだい」

「はい、わかりました」

ストレージにおせちを入れて、転移門広場まで移動する。転移門で48層へ降り立ち、ツバサに包みを渡して私は再び自分の宿へ戻った。

宿へ戻ると1番のりした黒猫団のメンバーがいた。

「エミリーさん、人数をかなり呼んでいるんですよ？ここでは場所が狭いですよね。どうしますか？」

「さつき、リズちゃんが提案してくれてね。リズちゃんの所で食べようかと言つていたのよ」

「それは良いですね！では、私達はリズさんのホームへ向かいます」

「わかったわ。準備が出来次第、私も向かうから」  
「了解です」

そう言って黒猫団の皆は48層へ向かった。アスナちゃんへリズちゃんの家に行くようにメッセージを打ち、まだ来ていない風林火山とエギルさんを待つて彼らが此方へ来たらリズちゃんのホームへ一緒に向かうつもりだ。

クライン君とエギルさんはリズちゃんのホームを知らないからだ。

私達がリズちゃんのホームへ着くと、先ほどお使いを頼んだはずのツバサと一緒にアスナちゃんとキリト君がやってきた。

「エミリーさんのメッセージをいただいてから、キリト君を誘いに行つたんです。そうしたらツバサちゃんが出てキリト君と一緒に来るように説得していただいて、強引に連れてきました♪」

「アスナにはかなわなかったよ・・・」

「あら、じゃあキリ君に渡した《おせち》、私に戻してくれる？何となく、それが必要になると思うから……」

「ええ！後で1人で食べようかと思ったのに……」

「いいから、私を助けると思っ♪」

「わかったよ……はい」

「ありがと♪」

「エミリーさん、もしかして……」

「ええ。女の勘ってやつよ」

「何の話だよ……」

「こつちの話よ。さあ、キリ君はリズちゃんとは初めましてよね？」

「ああ」

「はい。私がアスナの親友で、エミリーさんとも友達のリズベットです。よろしく！」

「キリトだ。よろしく……」

「アスナー！此奴が話してた、《黒の剣士》？」

「そうよ。それがどうしたの？」

「なんかイメージが違った……」

「悪かったな……」

「はいはい、その辺にしましょうね♪リズムちゃん、場所を提供してくれてありがとうね♪」

「お安いご用ですよ。スポンサー様のためですから♪さっ、みんな中で待ってますよ」  
「うふふ。では、お邪魔します♪」

中に入ると、全員一斉にこちらに注目が集まってしまった。みんなキリ君を見ていた。

「アスナが強引に引っ張ってきたんだって！」

「おお！さすがアスナさん」

そんな感じで、ワイワイと各々の会話が始まった。私はリズムちゃんが用意してくれていた大きなテーブルに料理をストレージから出して並べる。

おせちは年明けに出すものだし、他にも料理を用意しておいたのだ。並べられた料理をみて、みんな喜んでくれた。

「年越しカウントダウンの前に年越しそばを用意してるから、それを食べたからおせちを

出すよ〜♪」

そう言うと歓声が上がった。

「それでは、ボス討伐へ行かれていた皆さん。お疲れ様でした。無事に帰ってきてくれて嬉しいですよ♪大した物ではありませんが、楽しんでください♪」

私の挨拶で、年越しパーティーが始まった。

1時間位過ぎた頃だろうか、アスナちゃんがメッセージを受け取り私にこっそり話しかけてきた。

「エミリーさん、やはり勘が当たりましたよ。今、外に居るそうです」

「はあ・・・やっぱり。面倒かけてゴメンね」

「いえいえ。ずっと待つつて言ってますよ」

「・・・わかった。ちよつと行つてくるね」

「は」

私はこつそり抜け出した。

「エミリー、会えて嬉しいよ。私も誘つてくれても良いではないか」

「・・・ヒースクリフさん、私が貴方を誘うのはおかしくありませんか？無理言わないで下さい」

「相変わらず連れられないな、君は」

「・・・」

「君が作った料理を食べられる彼等が羨ましい。何せ拘り派の君だ。現実の料理と遜色ないのだろう。思い出すよ」

「・・・年越しですし、特別です。受け取ったら帰ってくださいよ」

私はさつきキリ君に返してもらつたおせちをストレージから取りだし、ヒースクリフに渡した。



「一緒に年越しをしたかったが・・・まあ君のおせちが食べられるのだ。我慢して帰るよ。」

そう言つてヒースクリフはおせちを受け取り、ストレージに収めて肩を落として帰つて行つた。

私はみんなの所へ戻りパーティーを楽しんだ。

解放されたアインクラッド全域で年越しの盛大な花火が打ち上げられた。

年越しそばを食べていた私達は花火など上がると思つていなかったなので、音を聞いて外に全員で出て花火を見上げていた。

「いやあ、年越し花火とはまったく・・・」

「何とも言えないですねえ。デスゲーム開始日を思い出しちゃう」

「そうねえ・・・でも、無事に年を越せたことにホッとしてしまふけど」

「もう、1年以上ここにいますよ」

「普通のゲームだったら粋な計らいって思いますけどね」

花火を観て、みんな好き勝手に話している。私もみんなと同じ意見である。まったくあの人は何を考えているのやら・・・

「まあ、何はともあれ『明けましておめでとう』かしらね♪」

「「「「「おめでとうございませう。今年もよろしくお願ひします」」」」」

私達は、リズちゃんのホームへ戻りまたワイワイと騒ぎ出した。

---

新年を迎え早くも4ヶ月が過ぎ桜が散った頃、リズちゃんが無事に『リズベツト武具店』の開店にこぎつけた。改装費を頑張つて稼ぎ、玄関を入れてすぐにあつたリビングが店舗になり奥の部屋が鍛冶場になっていた。

生活スペースは1人なのでかなり奥へ追いやられ、こじんまりとまとめてあつた。私とアスナちゃんは開店祝いに駆けつけ、2人で作ったケーキを渡した。私達の後から続々と沢山の人がお祝いを持って訪れていた。

「これから、アスナに借りた物を返す為にバンバン働くわよ〜」

「リズは凄いわよね!」

「私もこの年で店を持つとうなんて、よく思ったもんよ。現実世界だったら私の体、ムキムキになってるわ!」

「ゲームで良かったよね〜」

「そこはホントにそう思うわよ」

わはは、と豪快に笑っているリズちゃん。確かにと私達も頷く。

「エミリーさんには、本当に感謝ですよ!」

「なに言ってるのよ♪」

「エミリーさんがいなかったら、もつと借金するか働かないといけなかったんですから」  
「まあ、何にしる役に立てて良かったわ♪」

---

「姉さん、いるか？」

「あら、キリ君。突然珍しいわね。どうしたの？」

「ちよつと手伝ってもらいたいことがあつてさ」

「何かしら？」

「最近、58層に行った？」

「いいえ、まだ57層でとつてる宿の契約が切れてないから行ってないけど」

「そうか。姉さんは1週間契約にしてるんだっけ？俺、最前線の58層で、ある依頼を受けてさ」

「キリ君が珍しいわね。それで、その依頼の内容で私の手伝いがいるってことかしら？」  
「ああ。『タイタンズハンド』ってギルド、聞いたことある？」

「ええ、アルゴちゃんから聞いてるわ。オレンジギルドよね」

オレンジギルドとは犯罪者ギルドの事で、メンバー全員で詐欺や強盗をしたりしているギルドの総称。犯罪を犯したプレーヤーはカーソルがオレンジに表示されるのだ。

因みに殺人を犯したプレーヤーもオレンジ色だが、レッドプレーヤーと言われている。

「そのタイタンズハンドの奴らにシルバーフラグスってギルドが壊滅させられたんだ。そのシルバーフラグスのリーダーだけが脱出できたそうで、他のメンバーはみんな殺されてしまったそうなんだ。」

で、そのリーダーがゲート広場で泣きながら仇討ちをしてくれる人を探していたんだ」

「で、キリ君が引き受けたのね」

「ああ。タイタンズハンドの奴らをどうしてほしいか聞いたら、全員牢へ入れてほしいと懇願された」

「悔しいでしょうに・・・そのリーダーさんは凄いわね」

「そうだな。殺してほしいとは言わなかった」

「わかったわ。私は何をすればいい？」

「タイタンズハンドを調べてほしいんだ。どんな奴らで、メンバー構成、あと何処で活動しているのかな」

「ん、了解。4日間ちようだい。その位で調べがつくと思うわ。ツバサ！出番よ!!」

「はい、マスター」

「俺は、ちよつと別に調べたいことがあるから」

私は早速アルゴちゃんに連絡しタイタンズハンドがメインで活動している層を聞き  
いた。

その後すぐにその層へ移動し、ツバサを偵察に向かわせる。私は聞き込み調査だ。それなりに顔が知れてしまっている私は、ツバサを連れているとすぐにばれてしまう。フードを被りまずは店を経営しているプレーヤーに接触した。

「ああ、聞いたことあるぞ。リーダーはロザリアって女性だよ。見た目はお姉さんより年上に見えるな。色々な連中とPT組んで狩りに行ってるって話だな」

「ありがとう♪これ、情報料よ。おまけでこれ、クッキーなんだけど良かったら食べてね」  
♪

「おっ！ありがとうよ！」

他にも何人かに聞き込み、同じような回答をもらった。暫くするとツバサが上空で旋回しているのが見えたため、人の少なそうな路地裏へ移動する。

「どう？それらしき人たちはいた？」

「上空からの確認ですが、1人の女性プレーヤーが男性プレーヤーに話しかけてPTを組まれ狩りに出かけた様子です。それを少し離れたところから見えていた男性プレーヤーが1人いました。」

その男性プレーヤーをつけてみたのですが、カーソルがオレンジの男性プレーヤー6人と何やら話してました」

「どうやら、ビンゴっぽいわね。私が聞いたのはリーダーのロザリアって女性プレーヤーが色々なプレーヤーとPTを組んで狩りに行くそうよ」

「では私は上空からまた偵察へむかいます」

「お願いね。接触はしなくていいからね」

「はい。マスターはこの後どうなさるんですか？」

「うーん、これ以上聞き込みを続けると危険っぽいからなあ。私もツバサが目視できる距離を保ってついていくわ」

「了解しました。ターゲットが宿へ戻る様子を見せましたら、私もマスターのもとへ戻ります」

「うん。よろしくね♪」

ツバサはまた飛んで行った。

日が暮れたころ、ツバサが戻って来るのが見えた。今日の調査は終了。このあとキリ君に連絡をとり報告する。久しぶりに私の作ったご飯が食べたいとのこと、私の宿で食事をした。

—————

調査2日目、タイタンズハンドの犯罪手口を調べる。今日はツバサのみだ。私がいる



と見つかる可能性が高くなるから、来ないでくれとツバサに言われてしまった。おかしいなあ……私がマスターなはずで、命令するのも私の筈なんだが……

こんなこと誰にも話せず愚痴がこぼせない……すっかり者の使い魔かあ。まあ、いつか♪

私は暇になったので、経験値はあまり入らないがプレイヤーが来ない狩り場で弓の熟練度上げをしていた。普段の狩り場では槍として、でしか戦闘をしていない。弓として表にまだ出していないのだ。だから熟練度がちつとも上がらない。

リズちゃん特製のこの弓《蒼穹剣》を装備し弓状へ変形させ、専用弓矢を取り出す。システムのアシストはないので、現実世界と同じようにしか打てない。最初のころは外すことも多かったが、今は勘を取り戻したので98%は的（敵）には当たる。

専用弓矢は木工職人（ウッドクラフトプレーヤー）とリズちゃんの合同製作された物で、矢じりがソード扱いなので剣技が出せるのだ。この矢、矢自体も耐久値が高いのだがとても便利で高い耐久値の糸がつけてあり敵に放った後、その糸を引っ張れば手元に戻ってくる。

いつもは索敵しなくてもツバサが敵位置を教えてくれるが、今はいないので耳を澄ます。キリ君にはいつも勘だと言っていたが、要は聞き耳なのだ。別に聞き耳スキルを

取っているわけではないが皆が言っているようなシステム外スキルで耳を澄まして音を拾う作業だ。

私は通常の聴覚が優れている方なので、それで敵を察知しているに過ぎない。4時の方角に敵が現れたのでそちらを向いて剣技を立ち上げ矢を放つ。矢が届く距離と経値が届く距離は微妙に違うのでそこは調節しなければならぬ。

今回はギリギリ経験値が入る距離だったようだ。層が低いから1撃で敵を葬れたようだ。経験値獲得ウインドウが表示された。

地味な熟練度上げをウンザリするほど繰り返し、そろそろ系の限界が近づいてきたので狩りはやめメイン通りに出たところでツバサの鳴き声が聞こえた。どうやら偵察が終了したようだ。

「ただいま戻りました、マスター」

「はい、お帰りなさい。どうだった？」

「手口は大体わかりました。彼ら、今日は大きな成果はなかったらしく殺しはしないで口を上手く使ってPTメンバーからアイテムを余分に奪ってました」

「そう、いつも殺しをするわけではないのね。きつとレアアイテムとかが絡むと殺しま

でする感じかしら?」

「そうですね(そうだろうな)」

「ん? あら、キリ君。そっちの調べ物は終わったの?」

「ああ。いや、それにしてもツバサは優秀だな」

「私が上空から監視作業を続けていましたら、キリト様が彼らの後をつけていました」

「ほら、俺にも気が付いてたんだろ。俺は、暫くツバサに気が付かなかったのに」

「うふふ。私のツバサですもの。私より高性能よ♪」

「姉さん、それってどうなのよ・・・」

「気にしたら負けよ♪」

「奴ら、美味しい獲物がいないと大きな動きはしないらしい。その時は証拠隠滅とばかりにPKするようだ」

「赦せないわね。とつちめたいけど・・・何かいい方法はないかしら」

「うーん、難しいな・・・」

「マスター、キリト様。このような場所で会話をなさっていると、彼らに気づかれる可能性もございます。街に戻りましょう」

「はい」

「そうだな」

私達は街へ戻り、キリ君と打合せをして今日の作業を終えた。

3日目、今日は宿の契約が丁度切れるので荷物を纏めて宿を出た。調査は昨日であらかた済んだので、今日は昨日狩りをして耐久値が下がった矢の修理をしてもらうためりズちゃんの所へ向かった。

「リズちゃん、おつはよー♪」

「あ、おはよ．．．ふあゝごいいます。今日は早いですねえ．．．」

「眠そうねえ。また仕事で徹夜？」

「徹夜はしてませんよ。今作っている武器を仕上げるのに時間がかかっちゃいました．．．寝るのが遅くなっただけですよ」

「無理しないでね。なんて言いながら、朝早く来ちゃつてごめんね」

「いいんですよ。丁度開店時間でしたから」

「じゃあ早速お仕事お願いします♪蒼穹剣の熟練度上げが出来てね。矢の方の耐久値が

だいが落ちちゃったのよ」

「はい、蒼穹剣も見ておきますから渡して下さい」

私は剣と矢を渡し、ついでに糸の交換もお願いする。

リズちゃんは奥の工房へ修理に行ったので、代わりに店番をすることにした。装備を外し、アシユレイに作って貰ったメイド服に着替えてカウンターに置いてある椅子に腰かける。

暫くして、お客様が来た。

「いらつしやいませー♪何をお求めですか？」

「あ、おはようございます。もしかして・・・ビーストテイマーのエミリーさん？」

「ええ、そうですね♪あら、貴女も？」

「はい、私のはフェザーリドラです。この子はピナ。私はシリカつていいいます。こここの評判を聞きまして、武器を新しくしようと思ってきました」

「あ、この子はツバサつて名前よ」

「シリカ様とピナさんですね。よろしくお願ひします」

「うえあ！新聞に書いてあったの本当だったんですね。いいなあ、私もピナとお話したいです」

「うふふ。ちよつと待っててね〜私はただの店番だから、店長を呼んでくるわ♪」

私はドアを開け、リズちゃんを呼んだ。

「てんちよー、新規のお客様ですよ。武器をお求めですす♪」

「はい、つてエミリーさん何やってるんですか！」

「?暇だったから、店番♪」

「・・・エミリーさんそのカッコ似合いますね」

「うふふ、リズちゃんの衣装と一緒にアシユレイが作ってくれたのよ〜つて、お客さんお客様」

「あつ、そうでしたね」

リズちゃんはキリの良いところで手を止めて店に出てきた。

「いらつしやいませ。武器をお求めですね」

シリカちゃんは短剣使いで、武器がそろそろレベルに合わなくなっていたので使用していた短剣より良いものを探しているようだった。

私はリズちゃんが接客中、奥のテーブルにお茶を用意しておいた。

5分くらいたって、どうやら新しい武器が見つかったようでシリカちゃんが支払していた。

「お買い上げありがとうございます」

「ねえシリカちゃん、この後急ぎでなければちよつとだけお茶していかない？リズちゃん、良いわよね？」

「私の分もあるなら、良いですよ」

「そこは、エミリーさんにお任せあれ♪」

「えっ、良いんですか？お邪魔ではないんですか？」

「リズちゃん、夕べ頑張ったみたいだからご褒美にね♪」

「あはは。エミリーさんが作ってくれるお菓子や料理は絶品ですからね♪いいんじゃない？」

「では、お言葉に甘えて」

「はいはい、どうぞ此方へ〜♪」

シリカちゃんはちよつと遠慮がちに入ってきた。私は、ストレージからお菓子？を出して並べる。

「お嬢様が今日は、スコーンにスリーズジャムとイビスキュステイーです♪朝食になるメニューになっております」

「あは♪エミリーさんその衣装でノリノリですね〜」

「雰囲気を出してみました☆てへっ♪」

「いただきます」

「はい、召し上がれ♪」

3人でお茶をしながらお喋りに花が咲いた。ピナとツバサもお話していた。それを見ていたシリカちゃんが、ツバサに通訳してほしいって言っていた。

それを聞いたツバサが私の方をチラッと見たので、何となくお茶を濁しておいた。シリカちゃんはちよつと残念そうな顔をしていたが、お茶が終わるところツバサ達が私達の傍に来てシリカちゃんに話しかけた。



「ピッ！ピッピッピッピッ！！」

ピナがシリカちゃんに擦り寄り、何か一生懸命伝えようとしている。それをツバサが通訳した。

「シリカ様、ピナさんは『大好き！だからナッツちょうだい！！』と申してますよ」

「あはは。私達が食べているの見てピナも食べたくなつたのね。いいわよ、はい、ピナ」

シリカちゃんはストレージからナッツを出してピナにあげていた。

「ピピピ。ピピ、ピピーツ！」

「ありがとう。マスター、大好き！だそうです」

「うわーん！ピナー！！私も大好きだよ！！！」

シリカちゃんはピナを抱きしめてウルウルしていた。

「ほつんとツバサはすごなあ」

「あは♪今度、この店のことツバサに宣伝させようか？」

「・・・えっ?!」

「まあ、お望みならいつでもツバサに命令出せるから言っただけ♪」

「大丈夫だと思いますよ。ここ、結構下の層でも話を聞きますから」

そんな話をしながら、お客さんが来るまでお茶を楽しんでいた。

## 第12話

調査開始から5日目、またタイタンズハンドのロザリアが動きを見せた。

街で男2人が1人のフェザーリドラを連れ、少女に一生懸命に声をかけて、やっとそのビーストティマーの少女とPTを組めた所にロザリアが猫なで声を出してPTに入られてもらっていた。

どうやら、今日は迷いの森へ狩りに行くようだ。俺は気づかれないように後をつけた。様子を見てみると、ロザリアは前衛には出ず後ろで余り狩りに参加しているようには見えなかった。

そのままお昼近くまでPTは続き、今日は街に戻るようだ。アイテムの配分で揉めているようだったが、ビーストティマーの少女が怒ってPTを抜けて歩いてしまった。

俺は何となく嫌な予感が出て、ビーストティマーの少女の後をつけた。ただ、ここは《迷いの森》。少し見失ってしまい、探していると悲鳴が聞こえた。この声はさっきの少

女の声だ。

駆けつけた時には彼女が3体のドラゴンエイブに囲まれていたので、慌てて敵を葬った。だが少し遅かったようで彼女が連れていたフェザーリドラがいなくなっており、羽が1枚落ちていた。

その羽のアイテム名を確認したら《ピナの心》とあった。俺は姉さんに聞いていたことを思い出し、彼女にその使い魔はまだ蘇生できると伝えたと、彼女は必死に情報を求めてきた。

俺も又聞きだったため、詳しい情報を知っている人を紹介すると彼女に伝え、取あえずこの森を抜けることにした。その間に、自己紹介をした。彼女の名前はシリカ、使い魔の名前がピナというらしい。

35層ミーシエに到着し宿へ向かっているとき、ロザリアが現れ話しかけてきた。奴は目ざとく使い魔がいなくなったことに気づき、獲物を見るような目でシリカを見ていた。シリカは、ロザリアに反抗するように蘇生アイテムを取りに行く宣言をしていた。

それを聞いたロザリアは口角を少し上げた嫌な笑みをして俺たちを見送っていた。

シリカが美味しいケーキがある店を紹介するというのでその店に入り、姉さんにメツセージを入れた。

暫くすると姉さんが店にやってきて、シリカを見て驚いていた。シリカも姉さんを見

て驚いていた。ツバサはなんだか悲しげな顔をしていた。

俺が事情を話すと姉さんはシリカを慰め、シリカは絶対にピナを蘇らせると決意の表情をして涙を拭いて笑顔を見せた。シリカは俺が姉さんの従弟だとわかると完全に警戒を解いてくれた。

姉さんは《プネウマの花》の話をしてくれた。話を聞いたシリカは、1人ではレベルが足りないので行けないと肩を落としていた。使い魔の蘇生は死んでしまつてから3日しか猶予がなく、3日を過ぎると形見アイテムになつてしまうそうだ。

俺と一緒に行くと言うと姉さんとシリカが驚いた顔をしていたが、姉さんはそれが良いわと納得してくれた。その後姉さんは自分の宿へ一旦戻り、俺はシリカが泊っている宿の隣の部屋を借りた。

夜になり、姉さんが宿へ夕飯を持って訪ねて来てくれた。3人で夕飯を食べ、明日の予定をシリカと打合せシリカは自分の部屋へ戻つた。

「姉さん、タイタンズハンドの奴らは絶対に《プネウマの花》を狙つてくると思うんだ。シリカを囿にすることになると思うんだけど、俺が絶対に守るから」

「ええ、そこはキリ君を信じてるから問題ないのよ。ただ、捕縛の時は私も同行するわ。私ははじめからタイタンズハンドをつけておくから。何かあつたら援護するわ」

「すまない。よろしく頼むよ」

「じゃ、明日ね」

姉さんはそう言つて宿へ戻つて行つた。

そろそろ寝ようかと思つていたところに、ドアをノックする音が聞こえた。誰かと思つたらシリカで、少し赤い顔をしてドアの外にいた。47層へ行つたことがないの  
で、詳しく聞きたいと訪ねてきた。

俺の部屋で良いと言うので、部屋へ入れて椅子にシリカを座らせる。テーブルに詳細  
マップアイテム <ミラージュ・スフィア> を展開し、47層を拡大して明日行く道  
を説明した。

説明している最中、ドアの外で物音が聞こえたので俺はシリカに静かにするよう合図  
し、勢いよくドアを開け放し誰が聞き耳しているか確認しようとしたが、逃げ足の速い  
奴の様で過ぎ去る影が少し見えただけだった。

心配していたシリカを落ち着かせ、明日の為にシリカの装備を強化するのに俺が持つ  
ていた防具と、姉さんから預かった防具をシリカに渡し装備できるか確認してもらつ  
た。

シリカは『これでは少ないかもしれないが』と言つてコルを渡そうとしてきたがそれを断り、俺たちが持つていてもストレージを圧迫するだけだからと言つと素直に受け取つた。

翌日俺達は47層へ移動し、シリカが風景に感動していたが今日の目的を済ませてしまおうと声をかけると『そうですね。またゆっくり来たいです』と言つて歩き始めた。

道中、トラブル？らしき事が少しあつたが無事に《思い出の丘》に到着した。シリカが東屋に近づき、台の傍へ寄ると《ブネウマの花》が早送りする様に咲いた。それを手折り、シリカは『これでピナは生き返るんですね』と涙を流し喜んでいた。

姉さんから聞いていた通り、『ここでピナを生き返らせるのは危ないから、街に戻つてから生き返らせてあげよう』と言つとシリカは『はい！』と元気に返事をし、転移門広場へ向かつた。

街に入る少し手前の橋で、俺の索敵に複数人ひつかかつたのでシリカを制し転移結晶

を渡して俺の背中に底い声をかけた。

「そこに待ち伏せしている奴ら、出て来いよ」

「あら、私の隠蔽スキルを見破るなんて中々高い索敵スキルじゃない？ 剣士さん」

「ロ、ロザリアさん?! なんで?」

ロザリアと、7人の男たちが木の陰から出てきた。

「その様子だと、首尾よく『ブネウマの花』をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん。じゃあ、その花を渡しなさい」

「えっ? なっ、何を・・・?」

「夕べ、盗み聞きしてたやつもあんた等の仲間だろオレンジギルド『タイタンズハンド』のリーダー、ロザリアさん」

「あら、良くご存じね」

ロザリアがそう言うと、タイタンズハンドのメンバーは俺達を囲むように近づいてきた。



「ソロで全身黒い衣装?!ロザリアさん、こいつ攻略組の黒の剣士だ!」

「攻略組がこんなところにいるわけないだろ!やっておしまい!」

奴らが総攻撃を仕掛けてきた。

「シリカ、危なくなったらその転移結晶でどの街でもいいから飛ぶんだ。」

「えっ、でも!私も戦います!」

「俺は大丈夫だから」

俺は前に出て、奴らの攻撃を無抵抗で受けた。

「キリトさん!・・・っどういうこと?」

シリカが慌てているが、奴ら全員が俺に与えるダメージ総量より俺のバトルヒーリングの方が高いからいくら攻撃されても、俺のHPは減ることはない。不思議に思っているタイタンズハンドのメンバーに説明してやった。

奴らにHPがレッドゾーン手前になるくらいに攻撃をしてやる。するとロザリアが吠えてきた。

「グリーンの私に攻撃すれば、アンタはオレンジに」

そう言っている途中で、ロザリアの背後から姉さんが武器を構えてロザリアを拘束していた。

「え？ エミリーさん？」

「あら、私はそんなに甘くないわよ。それにソロだもの、一時オレンジになっても問題ないわ♪」

「諦めるんだな。これはシルバーフラグスのリーダーが全財産はたいて買った回廊結晶だ。これで黒鉄宮へ飛んでもらう」

ロザリアは頭を垂れて降参した。全員を回廊結晶で黒鉄宮へ送った。

「シリカ、怖い思いをさせて悪かった」

「ごめんね、シリカちゃん。囿に使うようなことしちゃって」

「大丈夫です。ビックリしましたけど・・・」

「さあ、戻ってピナを生き返らせてあげよう」

「はい！」

宿へ戻ってシリカは《ピナの心》と《プネウマの花》をストレージから出した。

「そのプネウマの花の雫をピナの心にかけるのよ。そうすればピナは戻って来るわ」  
「はい」

シリカが雫をピナの心のかげると、眩い光が目の前に広がった。

「きゅるるー」

「ピナー！」

ピナを抱きしめて泣いて喜んでいた。姉さんも泣いていた。俺はそれを見届けて、部屋を出ようとした。

「キリトさん、もう行っちゃうんですか？」

「ああ、最前線を離れてだいぶ経ってしまったからな」

「また、会えますよね？」

「そうだな、今度は現実世界で会おう」

「はい！」

姉さんはそれを少し悲しそうな眼をして見守っていた。

「エミリーさんは、もう少しいてくれますか？」

「ええ。ピナちゃんが戻ってきたお祝いをしなきゃね♪」

そんな姉さんたちを見て俺は宿を出た。

---

ツバサはピナに近づき、頬ずりして喜んでいた。

「ツバサはとても悲しんでいたわ。折角できたお友達ですものね」

「ツバサちゃん、ありがとう。心配かけちゃってごめんね」

「シリカ様、ピナさん、本当によかったです」

「きゆるー♪」

「ありがとうございます」

私はピナちゃんの頭を撫でてあげる。するとピナちゃんは近づいてきて私の頬を舌でペロリと舐めた。

「ピナー！本当にごめんね!!ピナも会えたら良かったんだけど、エミリーさんの従弟さんもいたんだ。キリトさんって言ってね、お兄ちゃんみたいだった」

「きゆるるるー」

「クスツ」

「え？なんて言ったの？ツバサちゃん教えて!!」

「ピナさんと私の秘密です」

「ええー」

そんな微笑ましい光景をみてホツコリしてしまった。その後、シリカちゃんが好きなケーキを色々作ってケーキパーティーをした。

「さ、もう大丈夫ね。私も前線に戻るわ。またリズちゃんの所で会えたら良いわね♪」  
「はいー！ありがとうございます」

宿を出ると外は暗くなっていた。

---

ピナが生き返り、2ヶ月が経った。アスナちゃんからメッセージが入り、急いで会いたいとのことだった。

「エミリーさん！リズと連絡がつかないんです!!」

「アスナちゃん、落ち着いて。フレンドリストで何処にいるか確認したんでしょ？」

「58層にいるのは判っているんですけど、メッセージを送れないんです」

「・・・あら？キリ君も58層にいるわね」

「あつ！」

「ん？何か思い当たることでも？」

「キリト君が新しい剣が欲しいって言っていたので、リズに作って貰えばいいじゃないかって言っただけですよ」

「ふーん。じゃあ、素材でも一緒にとりに行つたのかしら？」

「なるほど。でも・・・心配ですよ！」

「そうね。わかつたわ、私が調べに行ってみるわ♪」

「よろしくお願いします」

アスナちゃんはギルドの事があるから、そうそう単独行動はできない。私はツバサと一緒に58層へ移動した。

「うーん、寒い・・・こんな寒いところで大丈夫かしらねえ」

「お母さん、あの丘に白竜がいます。迂回できますが、どうしますか？」

「ん？キリ君たちはその白竜の方に居るの？」

「その様です。プレーヤー2名の反応があります」

「どうやら、一緒の様ね。よし、ツバサ単独で大丈夫？」

「はい、キリト様の所へ行ってきました」

「よろしくね♪私はここで、暖を取って待つてるから・・・ブルツ」

俺とリズは大きな縦穴に落ちてしまった。新しい剣を作ってもらおうとリズの店へ行って、俺がリズの作った最高の剣を折ってしまったんだ。

怒ったリズと一緒に『クリスタライトインゴット』を取りに行くと此処へ来たのだが、白竜との戦闘中に隠れていたリズが出てきてしまつて白竜の攻撃で吹き飛ばされ落ちてしまった。



「それにしても、よく生きてられたわね」

「ホント、無事で良かったよ。．．．ん？あれは？」

穴の上を見上げると、小さな何かが凄いい勢いで落下してきた。

「キリト様！リズ様！ご無事でしたか!!」

「ツバサじゃない！」

「アスナ様が心配なさって、マスターをこの層へ寄越しました。上空から飛んできた方が早いので、私が探しに来ました」

「そっか。姉さんこの層へ来てるんだ。どうしようか．．．ツバサが来たってことはメツセージが送れないって事か。もしかして．．．」

リズも気が付いたようで、転移結晶を出して転移しようとしたが出来なかった。

「結晶無効化エリアか」

「そうみたいね。どうする？まだインゴットも見つかってないし」

「そうだなあ．．．取あえず、姉さんに長くて耐久値が高そうなロープでも頼めるか？」

「わかりました、マスターに伝えます。他に入用なものはございますか？」  
「あ、ご飯・・・頼めるか？」

「ではお食事とロープを届けにまた来ますので、それまでお待ちください」  
「ああ、わかった。頼むなー！」

ツバサはかなりのスピードで姉さんの所へ戻って行つた。

ツバサが戻ってきた。かなり短時間だったが、この間新しいスキルが出たのだ。《高速飛行》まるでソードスキルの様なエフェクトを纏ってぶっ飛んだ速さで飛べるのだ。

「キリト様とリス様、ご無事でした。耐久値の高い長いロープと食事を所望されていました」

「了解。ロープね・・・ご飯・・・ツバサ！早く移動しよう・・・寒い!!」  
「クスッ。お母さんは本当に寒いのが嫌いですね」

50層アルゲートのエギルさんの店へ向かった。食事はどうとでもなるが、ロープが中々見つからない。

「エミリーさん、耐久値の高いロープつつてもこれが限界ですよ。そんなに長さがありませんよ」

「結んで、使えるものなのかしら？」

「やったことねえなあ」

「物は試しね。それ、3本買うから結んで試してみましょ♪」

「まいどあり」

ロープを結んでエギルさんと軽く引つ張ってみる。どうやら耐えられそうだ。

私は料理を作り宿へ戻った。

料理が出来たのでバスケットに入れてストレージにしまう。今度は防寒着を用意しないと寒すぎる。また58層へ向かった。

58層に着いてすぐに厚手のコートを羽織る。

「ツバサ、案内よろしくね」

「はい。その状態で戦闘できますか？」

「大丈夫よ。弓にしておくから」

ツバサについて行き、1時間ほど歩いた。途中、何回か戦闘をしたが問題なく目的地まで着いた。飛べるツバサが羨ましい・・・。

バスケットを取り出し、ツバサに持たせる。

「じゃ、ツバサ。これお願いね。ロープは破壊不能オブジェクトの水晶を探して括り付けてくるから」

「はい。届けて、伝言してきます」

---

「あ、ツバサが戻ってきた」

「バスケット持つてる！って事はあれは飯だな」

「あんたって、遅しいわね」

リズに呆れられてしまった。

「お待ちせしました。これはお食事です。すぐに召し上がらないようでしたら、ストレージに入れておいてください。あと、マスターが上でロープを水晶に括り付けてますので、直にロープが下りてくると思います」

ツバサからバスケットを受け取ると、上の方からスルスルとロープが下りてきた。

「ロープの耐久値、確認してみる」

リズはそう言ってロープの方へ近づいて行った。

「うん、確かに高い耐久値だけど……このまま放置したらいずれ消滅しちゃうわね。早いとコインゴット見つけないとロープで戻れなくなるよ」

「そうか……わかった。ツバサ、姉さんに伝言。ご飯サンキュって。インゴット探して

見つかったらこのロープ使って戻るって。見つからなかったら・・・まあこっちで何とかするって言うておいてくれ」

「了解しました。では、私は戻ります」

ツバサはまた、凄い速度で上に上がって行った。

「マスター、渡してきました。まだインゴットが見つかっていないようなので、探してか  
ら戻るそうです。その間にロープが消えてしまったら、キリト様が何とかするそうです  
よ」

「うん、わかった。じゃあ、戻ってアスナちゃんに報告しよう。ここは寒くて嫌!!」  
「・・・はあ。では戻りましょう」

ため息つかなくつてもいいじゃないねえ・・・人間とはそういう生き物なのよ。プロ  
グラムとは違うのよ!!とツバサに言いたいが、黙っていよう・・・

「最前線63層の宿に戻り、アスナちゃんへメッセージを送った。

『58層の白竜がいる近くの大きな穴に2人で落っこちちゃったみたいだけど、リズちゃんときり君は無事でした。まあ、脱出用のロープは用意しておいたからきり君が何とかすると思うよ』

さ、2人が帰ってきたら詳しい話を聞かなきゃね。きり君の剣もどんなのが出来上がるか気になるしね。たぶん、今使っているのと同程度の剣が欲しかったんでしょう。あれを使えるようにするためにね♪

翌日の朝、きり君とリズちゃんが帰ったと連絡が入った。私はリズベット武具店へ行き2人の姿を見て安心した。工房でリズちゃんは剣を作製しており、静かにその様子を伺っていたのだ。

炉に入れられ真っ赤になったインゴットを決まった回数打ちあげると、それは輝きだし剣が姿を現した。その剣の名は『ダークリパルサー』。闇を払うものと言う意味だ。

エシユリデータに負けず劣らずの素晴らしいものが出来上がった。

キリ君はそれを受け取り、軽く素振りをしてから剣技を繰り出した。そして、納得がいったようで満足そうにその剣を鞘に納めた。

「凄く良い剣だ。ありがとう、リズ。代金はいくらだ？」

「……代金はいいい。……あのね、キリト。私を貴方の専属スミスにしてほしい。わたし……」

リズちゃんは顔を赤くしてキリ君にそう告げ、更に何かを言おうとしたところで勢いよくドアが開いた。

ドアの方を見ると、アスナちゃんが慌てて飛び込んできた。

「リズ!!心配したんだから!!」

そう言い、リズちゃんを抱きしめた。

「ア、アスナ。心配かけてごめんね……」



「私にも声をかけてくれても良かったじゃない！素材を取りに行っただけでしょ？エミリーさんから聞いたよ」

「う、うん」

アスナちゃんはリズちゃんに抱き付きながら、キリ君の方をキツつと睨んでこう言った。

「私の親友に変なことしなかったでしょうね？」

「なっ！何にもしてないよ!!」

「慌てる所が怪しいなあ」

「ホント、何もなかったらば」

キリ君とアスナちゃんの会話を聞いて、リズちゃんの顔が暗くなっていった。ああ、リズちゃん・・・キリ君に惚れちゃったのね。

アスナちゃんがキリ君を好きなことがわかってしまったからだ。

キリ君とアスナちゃんの距離が縮まったのは、リズちゃんが店を開店させてしばらく

経った頃に圏内でPK事件が起きたのが切っ掛けだ。(キリ君とアスナちゃんが話してくれたのよ♪)

フロアボスの討伐方法で、キリ君とアスナちゃんが衝突してデュエルで決着をつけて決めたらしい。(キリ君が勝ったそうだ)で、フロアボスを倒した翌日キリ君が木陰で昼寝をしてたそうだ。

それをアスナちゃんが咎めたらしいんだけど、キリ君が『今日はアインクラッド1気象設定が良い日だ。こんな日に迷宮区に潜るのは勿体ない、お前も試してみれば?』なんて言ってまた寝ちやつたんだって。

アスナちゃんも物は試しって事で、キリ君の隣でぐーすか夕方近くまでお昼寝したそうだ。キリ君が目覚めた時、隣で寝ていたアスナちゃんを見て驚いたが、アスナちゃんが起きるまで見張りをしたそうだ。

目が覚めたアスナちゃんは恥ずかし怒りながらもご飯を一回奢るって事で貸し借りなしにしようと、主街区のレストランに2人で入ったんだって。食事が出てくるのを待っていたら悲鳴が聞こえたそう。

慌てて現場へ行ってみると、1人の男性プレーヤーが宿の2階からロープで吊るされて、その胸には剣が突き刺さっていたそうよ。助けようとした時、そのプレーヤーは死亡エフェクトを出して消えてしまったんだって。

その男性はカインズさんと言い、彼と食事をしようと一緒に来ていたヨルコさんという女性が発見して悲鳴を上げたそう。ヨルコさんはカインズさんとはぐれて、探していたらこの状況だったと証言した。

その後、キリ君とアスナちゃんも圈内PK事件として調査を始めたの。カインズさん殺害に使われた武器を手がかりに調べて行くうち、半年前ギルドリーダーが謎の死を遂げて自然消滅したギルド『黄金林檎』の存在が明らかになった。

レアモンスターから敏捷値を上げる指輪がドロップして、その指輪を使用するか売却するかをメンバーで話し合い、売却することが決まった。そのため黄金林檎のリーダー、グリセルダが競売に行つたが戻つてこなかったとヨルコさんが話してくれた。

同じギルドだった、今は聖龍連合に所属しているシュミットさんと話をしてる最中にヨルコさんも殺されてしまった。

実は真相を明らかにするために偽装殺人を装ったヨルコさんとカインズさんの芝居だった。2人は生きており、一番怪しいと思つたシュミットに告白させるために事件を起こしたそう。シュミットはただグリセルダを殺した犯人に利用されただけだった。

だが、真実は悲しい結末を迎えた。グリセルダさんのお墓の前で3人は殺人ギルドラフィンコフィンに狙われたが間一髪でキリ君が現場に間に合い、機転を利かせてラフコフを追い払つた。

後から駆けつけたアスナちゃんが、木の陰で隠れていた犯人であるグリムロックを拘束し3人の前に連れてきた。

グリムロックはグリセルダさんの夫で、現実世界でも夫婦だったのだ。この世界にとられた後、グリムロックは精神を病んでいき、グリセルダは生き生きとしていたそう  
だ。

グリムロックはそれが許せなく、愛していた昔の彼女ではなくなってしまうと嘆き、このゲームにいる間に彼女を殺そうと思い、殺害してしまったと告白した。

それを聞いていたアスナちゃんは『それは愛情ではなく、所有欲だ』と切り捨てたそう  
だ。(うん、素晴らしい)グリムロックの処遇は元黄金林檎の3人に託し、事件は解決  
した。

この事件によりキリ君はどうかかわからないが、アスナちゃんはキリ君の事を意識し  
したつてところだろう。

まったく空気と化している私は声を出すことさえ忘れて、甘酸っぱい空気を醸し出  
している3人を見ているだけだった。

リズちゃんは気持ちの整理がつかず、やり場のない思いを抱えて工房を出ようとし  
た。

「どこ行くの？リズ！」

「えっ・・・あー、うん、そうそう！ちよつとこれから商談があったのよ！」

「店はどうするのよ！」

「・・・アンタ達留守番しててよ！よろしくね!!」

そう言つてリズちゃんは裏口から出て行つてしまった。

「はあ、あなた達留守番しててね」

「えっ!!エミリーさん!?!いたんですか!!?」

「アスナちゃんに至つては私の事気が付いてなかったのね・・・まあ、良いわ。リズちゃんの様子を見てくるわ」

「姉さん、すまない」

「あー、はいはい」

私は急いでリズちゃんを探しに出たが、ツバサが見つけてくれた。

「リズちゃん……」

「エミリーさん……わぁーん」

「よしよし。あんなの見たら、辛いわね。でもね、まだ諦めなくてもいいのよ？ キリ君はまだ、大切な人を見つけてないわ。今はアスナちゃんの片思いだからね」

「でも、キリトも満更じゃなさそう……」

「うーん……あの子の好みは良く分からないのよ。私のせいで、コミュ障になっちゃったみたいだし。それにね、まだリズちゃんにもチャンスはあると思うわよ。現実世界に戻ってからでもね」

「そう思いますか？ なら、私は諦めなくてもいいんですか？」

「そうね。少なくとも、きちんと相手に自分の気持ちを伝えるまでは、諦める必要はないと思うわよ」

「……ありがとうございます。そうですね。今はこの熱い気持ちを大切に、頑張ります」

「うん、それでこそリズちゃんだわ♪」

リズちゃんはエへへと笑い、涙をぬぐって店へ向かって歩き出した。

店に戻ると、アスナちゃんだけが留守番をしていた。

「あら、キリ君は逃げたのね・・・」

「・・・はい。何か急に用事を思い出したとか言って、すまないと言行ってしまった」

「あの子も相変わらずね。少しは正面から人とぶつかればいいのにねえ」

「アスナ。留守番ありがとね」

「うん。それより、リズが無事で本当に良かったよ」

「心配かけてごめん。ありがと、アスナ」

「エミリーさん、色々ありがとうございました」

「何言ってるのよ。保護者の身としては当然よ」

「マスター・・・ほとんど役に立っていないじゃないですか・・・」

「てへっ☆だつて、寒かったんだもの。仕方がないじゃない！それでも後半は頑張つて現場まで行ったわよ！」

「まあ、そうですね」

「ところでリズちゃん。どうやって脱出してきたの？あの時間に帰ってきたってことは、ロープは消滅しちゃったんじゃないの？」

「ああ、ロープは無理でした。朝、目が覚めた時、キリトは先に起きていて積もっていた雪を掘ってたの。そこにインゴットが埋まってたんだ。あの落ちた穴がドラゴンの巣だったのよ。で、ドラゴンって夜行性でしょ？」

「そうね……ってまさか！」

「うん、丁度ドラゴンがご帰宅してきてね。キリトが何とか回避してくれたんだ。それで、ドラゴンに飛び乗って攻撃したってわけ。ドラゴンは堪らず穴の中から出たのよ。それで脱出できたってこと」

「うわー……大冒険って感じじゃない！」

「怖い思いもしたけど、久しぶりにドキドキもしたよ」

「そんな方法で……あの子らしいわね」

「「そうですね」」

アスナちゃんはギルドの仕事を放って来たらしく、慌てて帰って行った。私もそろそろ前線に戻ると言って店を出た。



## 第13話

最前線が70層へ到達したところから、モンスターのアルゴリズムが変化してきた。

それにより、ソロで行動するのが中々大変になってきた。

このことにより私のボス戦の参加が可能になった。最初は慣れなかったが、皆さんのフオローがあつて何とか戦えている。私の武器は皆さんに公開していなかったなので、形状をみて随分驚いていた。

それでも槍での使用で留まっていた。攻略組の皆さんはやはり強く、弓としての活躍の場がないからである。まあ、ピンチらしいピンチは無いという事だ。

季節は夏真っ盛り。68層のNPC達がワイワイと慌ただしくなった。68層は昔ながらの田園風景で、とても長閑な層だ。私は攻略に積極的に参加するようになり、クエスト等はあまりやらなくなった。

なので、詳しい情報がわからなかったが、この68層で夏祭りが開かれるとアルゴ

ちゃんが教えてくれた。

祭り前日、NPCにより櫓が建てられ会場が設営された。プレーヤーによる屋台の参加も可能らしく、エギルさんが張り切っていた。

そして案の定というか、どうしてもエギルさんから頼まれ、屋台で焼きそばを売りたいから手伝ってくれと無理やり引き込まれた。

数日前から、この時期限定でNPCの服屋は浴衣を販売しており、準備がよろしいことと半被までが用意されていた。私は浴衣を着たかったのだが、エギルさんが用意していた半被を渡され渋々それを着て焼きそばを作る羽目になってしまった。

それを嘆いていたら、女性陣（アスナちゃん、リズちゃん、シリカちゃん、サツちゃん、アシュレイ、アルゴちゃん）から素敵浴衣をプレゼントされた。

私はヤル気を出して『当日はさっさと完売させて、お祭りを楽しむぞ！』と叫んだ。女性陣たちは苦笑していたが、誰かを引き摺り込んでやろうと思わざつとメンバーを見渡すと・・・適任者を発見！

俊敏値に物言わせシリカちゃんの腕をつかみ、『売り子さんヨロシクね♪』とニッコリ笑顔でシリカちゃんを引き込んだ。

シリカちゃんは何やら叫んでいたが（お祭りを楽しむ気満々だったようだが、そうは問屋がおろしません☆）無視して明日の打合せをエギルさんと3人でした。

シリカちゃん以外の女性陣はシリカちゃんを気の毒そうに見て苦笑しながら誰を誘うか話して盛り上がっていた。

祭り当日、大いに盛り上がっていた。私は諦めて、こうなったら楽しんでやろうとテンション高めに焼きそばを作りまくっていた。シリカちゃんも中々売り子さんが様になっっている。どんどん作って売りまくるわよ！

お客1号でキリ君とアスナちゃんトリズちゃんが来てくれた。おまけは出来ないが、こうなったら食べ歩いてもらって宣伝してもらおう。エミリー特製のソースの香りをばら撒いてもらうの。

「3人も、しっかりと宣伝してきてね♪」

「このソースの香りなら、大丈夫ですよ！」

「姉さん、結構乗り気じゃないか（笑）」

「うるさい！アンタは2つくらい買って食べ歩きなさい!!」

「へいへい。まあ、美味いから2パックは余裕だな」

「キリト君、相変わらずよく食べるね」

「食べ盛りなんだよ！」

「ほらほら、ここで食べない！香りをばら撒いて、売つてるところを聞かれたらシリカちゃんが生り子してゐるって言いなさい！ピナとツバサを目印にすれば、お客さん来てくれるから」

「ほーい」

「じゃあエミリーさんとシリカ、頑張つてね」

「楽しんでらっしゃいよ♪」

3人は焼きそばを食べながら、他の出店に向かつていった。

「エミリーさん、盆踊りって何時からでしたっけ？」

「確か20時からよね。今は16時。2時間くらいで完売したいところだわ」

「そうですね。私も他の出店を見たいです！」

「うん。私もよ。折角だもの楽しみたいわよね」

「あつ、いらつしやいませ♪」

「シリカちゃん、売り子さん可愛い(デレツ)」

「そんなこんなで、宣伝効果は出ているようだ。続々とお客さんが並んでいく。もしかしたら、完売は思ったより早いかもしれない♪・・・なんて思っていたら、エギルさんが追加の材料を運んできた。」

「エミリーさん、これ追加分だ。よろしく!」

「はいっつ??ソースが足りなくなるよ!!」

「いやー、それは困った・・・どうしよう」

「!ツバサ!!アスナちゃん呼んできて!!」

「了解しました」

ツバサはアスナちゃんを追いかけて飛んで行った。

「エミリーさん、ツバサちゃんに説明しなくてアスナさんを連れてこられるんですかね?」

「心配しなくても大丈夫よ。あの子はかなり優秀な使い魔だからね。状況説明はツバサがしてくれるわ」

「はあ・・・(本当に大丈夫かな?)」

15分くらい経った頃、ツバサがアスナちゃんを連れて戻ってきた。

「エミリーさくん、屋台裏で追加分のソースを作ればいいんですよね？」

「ええ、そうよ！これ、ソースのレシピ。材料はこれね♪よろしく」

「はい、わかりました♪（やった！エミリーさんのソースレシピ、ゲット☆）」

「うわー・・・ツバサちゃん、本当に凄い!!」

「ねー、言ったでしょ？」

「はい！・・・いいなあ」

「ほらほら、お客さん待ってるよ。はい、3パックね！」

「あつ、はい!!」

いやー、やっぱり商売は大変です。こんな働かされたんだから、エギルさんにお給金頂かないとね♪

アスナちゃんは、あつという間にソースを作って渡してくれた。そのあと、『もうキリト君たちを探し出せないから、このまま手伝います』ってアスナちゃんも焼きそば作りを一緒にやってくれた。

おかげで、かなりのスピードアップ。売り子のシリカちゃんがあたふたしながら、お客さんを捌いていた。

長蛇の列が徐々に減るころ、思いつきこの状況（祭り）に似合わない人がやってきた。

「だ、団長！」

「お、アスナ君。手伝っているのか。ご苦労様だね」

「・・・物凄く満喫してますね」

「ああ、楽しまなくては、な！」

ヒースクリフは頭にお面、右手に綿あめと金魚？が入った袋。左手にはリンゴ？飴にくじでも引いたのか、巨大ヨーヨーがぶら下がっていた。

「・・・楽しそうで、何よりですね。焼きそばは如何かしら？」

「エミリーさん!! 貴女が作っていらしたんですね。是非、頂きます。ああ君、2パック貰おう」

そう言われたシリカちゃんは少し緊張した、けど驚いた顔をしてコルを受け取っていた。

「エミリーさん、出店の方が片付きましたらご一緒に見て回りませんか？」

「・・・」

返事を迷っているとアスナちゃんが小声で気遣ってくれた。

「(エミリーさん、どうします？ 私達と一緒に回るって言いますか?)」

「(ありがとうね、アスナちゃん。でも・・・大丈夫よ)」

「ヒースクリフさん、良いですね。一緒に待ちます。何処かで待っていてくださいな」

「ああ、わかった。では、あの神社で待ってよう」

「では、後ほど」

ヒースクリフが去った後、数名並んでいたお客さんがざわざわと騒ぎ初めました。



「お客様〜！あと5パックになります！」

アスナちゃんが機転を利かせてお客の意識を焼きそばへと変えてくれた。

残り5パックは直ぐに完売した。エギルさんが後日お礼と給金を払うからと言ってくれ、片づけはやるので祭りを楽しんできてくれと言ってくれた。

「シリカちゃん、無理やり引き込んだんじゃってごめんね。でも、凄く助かったわあ。アスナちゃんもありがとうね♪」

「いえいえ、大変でしたけど楽しかったですよ」

「うん、私なんてソースレシビ貰えちゃったし♪ラッキーだったわ」

「そう言ってくれてよかったわ」

「エミリーさん・・・この後・・・」

「ええ、そうね。いつまでも待たせるわけには行かないから着替えたら行くわ。2人は楽しんできてね。何なら、ツバサにキリ君を探させるわよ」

「えっ・・・あ、じゃあお願いします」

アスナちゃんは顔を少し赤くしていた。いいなあ、初々しい☆  
そんなアスナちゃんを見てシリカちゃんは苦笑していた。

「ツバサ、2人をキリ君の所まで案内よろしくね♪」

「はい、アスナ様シリカ様、こちらです」

「じゃあ、また〜」

2人はお辞儀をしてツバサの後について行つた。

「さてと、私も行きますか」

建物に入って衣装を浴衣に着替える。そして神社へ向かった。

---

「お待たせしました」

「いや、たいして待つてはいないよ」

「ほんと、そのアバターでその恰好は似合いませんね・・・」

「そうか？ そんなことはないと思うのだが」

「いいえ、似合いません。本当の貴方の姿なら似合いますけどね」

「・・・そうか。でも、この世界で私は本当の姿は現せないからな」

「そうですね。ですが、私は本当の姿の方が好きですわ。そのアバターは胡散臭くてしょうがありませんもの」

「(苦笑) そうか。それにしても、素直に誘いを受けてくれるとは思わなかった」

「うふふ。まあ、お祭りですし。気まぐれですよ」

「それでも私は嬉しい。君とこうしてゆっくり出来る」

「そうですね？ まあ、その頭に乗っけているお面でもつけて下されば、一緒に屋台を見て回っても良いですよわ」

「む。それは悩ましいな・・・だが、やはり君と並んで歩けるならお面をつけるか」

「あら、随分素直ですわね♪」

「・・・なあ？ 最近、私の事をからかっているかないか？」

「あら、気が付きました？ クスッ。楽しいですわ♪」

「・・・」

「うふ☆お面、似合ってますよ」

「・・・では、行こうか」

私達は並んで屋台を見て回った。とても懐かしかった。あの頃を思い出していた。幸せだったあの頃を・・・。

「私も綿あめ食べたいですね。どちらにありました？」  
「向うだ」

綿あめを売っている屋台についておねだりしてみた。

「ねえ、これ買ってくださいな♪」

「ああ、構わない。幾つ頼むのだ？君は本当に綿あめが好きだな」

「うふふ。2つお願い♪」

屋台のお兄さんが綿あめを2つ渡してくれた。



「これ、1等の俊敏値を上げるレアネックレスよ」

「ありがとうふふ。彼氏じゃないわよく。じゃあ、またね」

「本当に恐ろしいほどのくじ運だな」

「ルルルルン」

「ま、君が楽しんでくれて何よりだよ」

暫く色々見て回っていると、ツバサが戻ってきて頭の上に降りてきた。

「マスター、御二方をご案内してきました。アスナ様がご一緒にと誘ってくださいましたが、マスターが心配で戻ってまいりました」

「ツバサ、ありがとね。はい、これ。綿あめよく美味しいから食べてみなさい♪頭の上で食べないですよ。ベタベタしちゃうから」

「ご機嫌ですね」

「結衣菜はお祭りや屋台が好きなのだよ、ツバサ君」

「そうでしたか。情報ありがとうございます。ヒースクリフ様」

「ほら、あつちに縁台があるから、そこで食べましょう。ねえ、あなた、さっきの焼きそ

「ば食べちゃった？」

「いや、まだ食べていないよ。君と食べたかったからな」

「じゃあ、食べましょうか♪まあ、自分で作ったものですけどね（苦笑）」

縁台に腰かけ、ツバサに綿あめをあげているとヒースクリフが焼きそばをストレージから出し、1つを私にくれた。

「あのおせちも美味しかったよ。そしてこの焼きそば、流石だ。ソースの味と香りが堪らないな」

「うふふ。楽しいわねえ。あら、ツバサは上手に食べるわね。焼きそばも食べなさい」  
「ありがとうございます、マスター」

ツバサは嘴で綿あめを軽くついばみ、綿を剥がした勢いで口を大きく開けパクリと食べた。その後、焼きそばは1本ついばむとツルツル吸い上げた。

「この動作はモンスターじゃないわよ。それに、知能が上がるにつれて食べられるものも増えちゃって。本当にイレギュラーすぎよ」

「・・・ここまでになるとは、私も予想だにしていなかった」

「自分で作っておいて・・・」

「君になら大丈夫だと思って、あのAIのコアのコピーを使ったのだよ」  
「なるほどね」。どうりで人間の様な思考をしているはずだわ」

「こんな会話をしていたら、盆踊りの音楽が聞こえてきた。

「君は、踊りに行くのか？」

「うん、行かない・・・」

「そうか」

ツバサが心配そうな眼をして私の顔を覗き込んできた。私はツバサの頭を撫でて大丈夫だと伝える。

「そう言えば、新年の花火は不評だったわよ。皆、最初を思い出すって」

「そうか。それは悪いことをしたな。だが、元々プログラムされていたのだよ。今は私は干渉していないからな」



「あら、じゃあ花火の犯人は貴方じゃなくあの人？」

「まあそうだろうな」

「ふーん。じゃあ結局は貴方のせいじゃない」

「む、だからすまなかった」

「ま、済んだことですしね♪」

このゲームを茅場が1人ですべてを作ったわけではない。数あるクエスト、イベント等色々な人間が考えだした。そのプログラムをそれぞれが入力し、カーディナルが纏めているのだ。

結局のところ、デスゲームにしてしまったのは茅場なのだ。そして、この世界にいる今はそれに手を加えることは出来ない。

「本当に、踊りに行かなくていいのか？」

「貴方も踊るの？ 踊らないでしょ？ あそこへ行けば皆いるもの。説明が面倒ですし」

「そうか。君の好きな夏だ。海のエリアもあるが、皆と楽しまないのか？」

「だって、あそこ水着限定エリアなのに、モンスターが普通に出来ますでしょ？ まあ、他より少ないですけど。それに攻略に重点を置いたから、クエストもやる暇なくなっ

ちやったし」

「・・・そうか。その層のクエストをクリアすると、報酬で温泉に入れるようになるころがあるんだが」

「あら、そんなところ作ってたのね。もつと早くに教えて下されば、行ったのに・・・」

「それはだな、君が私とまともに話をしてくれなかったのだろう？」

「むー、そうでしたっけ？」

「そうだ。あの頃から私を弄っていたのだな」

「うふふ。なんの事かしら？」

「まったく・・・君は本当に一緒にいて飽きないよ」

「また明日から、前と同じ様に接しますからね。赦した訳ではありませんから。今はあくまで、気まぐれですからね♪」

「ああ、解っているさ」

「そろそろお祭りも終わりですわね」

「名残惜しいが、皆もそれぞれホームに戻るころだな。私達も戻るか」

「ええ、そうですね。楽しかったですわ♪では、失礼します」

「・・・別れの言葉を言われなくて良かったよ。また、ボス戦で会おう」

そう言い、私達は無言で転移門広場へ移動しお互いのホームへ戻った。

翌日、エギルさんから呼び出されお店に行くと、シリカちゃんとアスナちゃんがいた。

「ああ、エミリーさんおはよう。昨日のお礼だよ」

「あら、幾ら儲けたの？」

「フツ、凄いぜ。この店の2日分の売上げくらいだよ」

「へー、じゃあそれなりに頂けるのかしら？」

「悪いんだが、この店で買い物をしてもらえるなら1割引きで売るぜ。買取なら普段の買取価格より1割上乘せでって、どうだ？」

「これからずっと、なら良いわ。そうでないなら今、コルで支払ってちょうだい」

「これからずっと!!それは随分高く付くな・・・わかった。じゃあ今払うよ」

そんな交渉をしていると、アスナちゃんが呆れ半分、感心半分で声をかけてきた。

「エギルさんも相変わらずですね」

「嬢ちゃん方、これが商売つてもんだ」

「そうよく、これくらい交渉できないとね♪良い人じゃ、損するわよ」

「さつすがだな。何となくエミリーさんが商売しないのがわかった気がするぜ」

「どうせなら、きちんと儲けたいじゃない？ だけど、面倒だからやらないだけよ」

「はははははは……」

エギルさんは、私達3人に働きに合った給金を渡してくれた。納得のいく額を出すあたり、流石だと思う。

「じゃ、また良いものが入ったら、売りに来てくれ！ ありがとな」

「はーい。じゃあ、またね」

私は手をひらひら振りながら、アスナちゃんとシリカちゃんはお辞儀をして店を出た。

大好きな暑い夏が終わりを告げ、過ごしやすい季節になりつつある。もう少しでこのデスゲームが開始され2年が経とうとしている。

アインクラッドは第74層まで到達してた。私は黒猫団の皆とPTで迷宮区へ潜っている。流石にソロでの狩りは危なかったからだ。

この間も危うくHPがイエローゾーンまでいきそうになり、焦ったのだ。実はレッドゾーンまで落ちたことが無いのだが、これを知る人物はいなかったりする。

別にそういう風にされている訳でも、している訳でもない。ただ、安全第一で狩りをしているだけなのだ。まあ、ツバサのおかけでもあったりする。

さつさと上階へ行っているキリ君とは違うので、あの子と出くわすことが殆どない。まあ、定期連絡のようにメッセージを送って来るので心配はしていない。

今日の黒猫団との迷宮区巡りも終わり街へ皆で帰る途中、少し先でキリ君が何やら森に向かつて投擲をしていた。そしてガッツポーズをした。

「ねえ、あれキリトじゃない？」

サツちゃんが目ざとく気づき、キリ君に声をかけようとしていた。が、私はそれを止めて静かにするように人差し指を口へ当て、お願いする。ツバサが何やらアイコンタクトをしてきたのだ。

やはり森の方に向くと、1羽のウサギみたいな白いレアモンスター、ラグーラビットがジツとしていた。私は慌てて武器を弓にし、矢を取り出して構えた。

皆が武器に驚きつつ、私が何かを狙っていると気が付き黙って見ていてくれている。狙いが定まり、矢を放った。見事命中し、S級食材を運よくゲット出来た。

黒猫団は武器で騒ぐわ、食材で騒ぐわで大賑わいであった。

## 第14話

S級食材を手に入れ、こんなチャンス二度とないかもしれないから皆で食べたいと話になった。

取あえず戦利品を売りに行き、それから黒猫団のホームへ行こうと話が纏まり、まずはアルゲートのエギルさんのお店へ向かった。

エギルさんの店に着くと、丁度アスナちゃんがキリ君に何か条件を出して迫っていた。何事かと話を聞くと、先程キリ君を見かけたときキリ君もラグーラビットを手に入っていたようだ。

で、それを売ろうとエギルさんと交渉していたそうだが、エギルさんがそれを食べないのか？などと話していた所へアスナちゃんが現れたそうだが、エギルさんがそれを食べない

S級食材は料理スキルをとっており、更に熟練度が高くないと食材が残念なことになってしまうのだ。そしてアスナちゃんはこの間、料理スキルをコンプリートしたそう  
で、それを聞いたキリ君はアスナちゃんに料理することを条件に一口食べさせてやる

と。

で、アスナちゃんは半分寄越せ、と条件を出していたという所を私達が目撃したという訳だった。

私の後ろにいたサツちゃんがちよつと悔しそうな顔をしていたが、こればかりはタイミングだ。仕方がないだろう。ラグーラビットは食べられるのだから、我慢してもらえない。

キリ君はそのままアスナちゃんと店を出て行こうとしていたところで、エギルさんが俺も食べさせてくれなんて言っていたが、キリ君が原稿用紙800字以内で感想文を書いてくるなんて嘘言っ行ってしまった。

それを見ていた私達は、これは余計なことを言うまいとアイコンタクトをとり、エギルさんに売るものをさっさと売って店を出ることにした。

皆がアイテムを売っていた時、店を出たところでアスナちゃんの護衛だという男性とアスナちゃんが少々言い合いをしていたと店出入り口付近にいた黒猫団のテツオが聞いていた。アスナちゃんは護衛を振り払ってキリ君を引っ張って去ってしまったと後から聞いた。

エギルさんに食材がばれないよう何とか取引を終え、店を出たところでアスナちゃんの護衛の男性が私に話しかけて来た。



「エミリー様、初めまして。私は血盟騎士団、副団長の護衛を務めておりますクラディールと申します。お話は、団長・副団長両名からお伺いいたしております。両名大変お世話になっていてようで、ありがとうございます」

「あら、ご丁寧なご挨拶ありがとうございます。クラディールさんですね。お勤めご苦労様ですわ」

「・・・たいへん申し上げにくいのですが。あの黒の剣士のお姉さまだとお伺いしましたが、彼はどれ程の実力をお持ちなのでしょうかね？」

「あら、アスナちゃんの護衛としては気になるのね。・・・そうね、レベルで言えばアスナちゃんより上になるでしょうね。それに不器用ですが優しい子ですよ。女の子に自分から手を出せるような子ではないと思いますわね」

「そうですか。団長が貴女に好意を寄せているのは存じてます。そんな方が言われるのでしたら、大丈夫なのでしょうかね」

「ふふ。アスナちゃんを温かく見守って頂けると私も嬉しいですわ。あの子たちはまだ子供です。でも大人になろうとしている年齢でもあります。大人はそんな子供たちを見守るしかありませんからね」

「・・・アスナ様を見守る、ですか。護衛としてきちんと見守っております。ご安心を」

「・・・では、私達は失礼しますね」

「ありがとうございます。失礼します」

そう言つて私達は黒猫団のホームへ向かい、食材を料理しそれを堪能した。今までに食べた料理はなんだつたのかと言うほど、此処まで生きていて良かったと思えるほどの美味しさだった。

宿へ戻り、1人になつて先ほど会つたクラデイルという男が少し気になつた。何と  
いうか、厭らしさやおぞましさを感じたのだ。勘でしかないが嫌悪感がぬぐえない。

ツバサもモンスターらしいところも残つていたのか、私の傍を離れず髪に頭を突っ込んで、らしくなく挨拶もせず無言を通した。何も起こらなければいいのだがと、心配で今日は寝つきが良くなかつた。

---

今日も黒猫団と共に迷宮区へ行くことになっている。74層転移門広場に集合で、お

弁当を作り時間になったので集合場所へ移動した。

転移門広場に着くと、キリ君が大きな欠伸をして誰かを待っていた。

「キリ君、おはよう。珍しいわね、まだ此処にいるなんて」

「ん？姉さんか。おはよう。アスナを待つてるんだよ。昨晚、アスナに料理を作って貰って食べた後PTを強制されてさ。ここで待ち合わせなんだけど、まだ来ないんだよ。待ち合わせ時間は過ぎてるんだけどさ」

「あら、アスナちゃんが？珍しいわね。何かあったのかしら？」

「丁度、そう考えていたんだけど、ここで動くとすれ違いになりそうだからさ。大人しく待つているって訳さ」

「メッセージ送ってみたら？フレンド登録してあるんでしょ？」

「ああ、登録はしてあるけど・・・」

そんな話をしていたら、誰かが転移して来た。それも叫びながら・・・

「キヤー、危ない！そこどいて〜〜！」

そう叫んで飛び出してきたのはアスナちゃん。勢いよく転移門に飛び込んだらう。そのままキリ君に激突して2人は転がって止まった。

衝突されたキリ君はアスナちゃんの下敷きになったのだが、キリ君の手がアスナちゃんの胸に当たっており、キリ君は『なんだ、これ?』といい、手をニギニギ……あーあキリ君……私は思わず眉間に手を当ててしまった。

胸を揉まれたアスナちゃんは悲鳴をあげ、体術スキルを立ち上げ素手でキリ君の腹に一発食らわせた。キリ君は吹っ飛ばされ、オブジェクトに頭部をぶつけノックバックでクラクラしていた。まあ、事故とはいえ自業自得だろう。

その後再び転移門から誰かが転移してきた。其方を見ると、転移してきたのはクラデールだった。それをみたアスナちゃんは急いでキリ君の後ろに隠れ、警戒していた。

「アスナ様、勝手に困ります! さあ、帰りますよ」

そう言いながらクラデールはアスナちゃんにゆっくり近づいていく。

「今日はオフって言ったじゃない! だから護衛はいいって言ったでしょ!!」

「そう言われましても、私はアスナ様の護衛です。ひと時も離れるわけには参りません！」

「だからって、自宅の前でずーっと見張らなくてもいいでしょー！」

アスナちゃんのその言葉を聞いて、キリ君と私はギョツとする。すると、いつの間にか来たのか黒猫団のメンバーが話しかけて来た。

「自宅前で見張りだって？それってストーカーって言わないか？」

「そうだよな、なんだよアイツ……」

「気持ち悪い……」

私は振り返り、再び驚いた。

「あら来ていたのね、あなた達」

「今さつき来たところですよ。着いた早々これです。何事ですか？あ、どうやらデュエルで決着をつけるみたいですね」

「……まあ、この世界じゃ手っ取り早い解決方法かしらね」

「そうですね。あ、勝負ありましたね。さすがキリト!」

私達はすっかり傍観者である。ただ、この2人のデュエルが始まる前に感じた殺気……覚えがある。殺気のした方を見ると、一瞬だがボロボロのマントの裾が見えた。嫌な予感は当たると言う。暫くツバサをキリ君につけさせようか、悩ましいところだ。

どうやら、騒動は落ち着いたらしく野次馬さんたちギャラリーは散って行った。

「姉さん、見ていたなら助けてくれても良かったじゃないか」

「何言ってるのよ、男でしょ。女の子一人くらい守って見せなさいよ」

「……なんか、冷たくなったよな」

「いつまでも子ども扱いしてほしいのかしら? 甘えん坊のキリ君?」

「ちえ! アスナ、行こうぜ」

「あ、待つてよくキリト君!」

アスナちゃんはキリ君を追いかけように行ってしまった。

「さて、私達も迷宮区へ向かいましょうか。今日は何階へ行くの?」

「今、解放されている一番上へ行きましょう!」

「オツケー。そろそろボス部屋が見つかりそうよね」

そんな会話をしながら移動を開始した。

黒猫団とのPTは本当に楽しい。それに楽である。ツバサは上空で旋回しながら待機になるが、モンスターがPOPしてすぐに教えるという作業だけを繰り返していた。上層階へ行くにしたがい、モンスターの団体様は少なくなってきた。

なので、1対6になることが多く1人1撃つつ食らわせると敵を倒してしまうことが多々ある。だが、敵もかなり学習しており段々と危ない場面が増えてきている。

そして昨日、私の本当の武器を黒猫団の皆が見てしまっている。おかげで、後方での援護が増えてきた。敵を倒しながらマツピングを進めていくと、安全地帯に出た。お昼を少し過ぎていたのでそこで休憩をしようと、サツちゃんと私はお弁当を取り出した。

「ここが青空の下だったら、ピクニックみたいだったのにな」

「ホント、弁当は明るい外で食いたいな！」

「仕方ないよ。フィールドまで戻ったらもつとお昼が遅くなっちゃうもん」

「そうそう、サツちゃんの言う通りよ♪はい、準備完了」

「うわー、今日は唐揚げと卵焼きが入ってる！」

「私はおにぎりのにぎってきたよ。エミリーさんにこの間、海苔モドキを貰ったから」

「モドキ??」

「そうなの。海藻は無いから、それらしい植物で作ってみたのよ。そうしたら、中々海

苔っぽくなってね。味も後付けだけど、らしくなったから♪」

「へー、こんなに海苔！って感じなのになー」

ワイワイ賑やかだ。ここら辺まで来るとあまり他の攻略組もやって来ないため、まあ問題ないか（苦笑）とそんな事を思い食事がそろそろ終わろうという時だった。

「ウアアアアア!!」

「ヤアアアアア!!」



ドップラー効果で悲鳴が近づいてきた。皆は警戒しつつも頭上に？が浮かんでいた。そして音源が現れ更に驚いた。

「はあはあはあ……」

「はあはあ……あははははは！」

「なんだ！キリトとアスナさんか!!」

「……えっ？うっお!!ケイタたちじゃないか！……それに姉さんも？」

「なぜ私だけ疑問形なのよ。それにしても、凄い勢いだったわねえ、お2人さん？」

「何があつたの？」

「さつきボス部屋を見つけてさあ、ドアを開けて覗いてきたんだよ。いやー、怖かった」

「ホントホント。あれは手強そうだったよ」

「なるほどね。で、強そうなのは判ったけどどんなボスだったの？」

「青い羊頭の、でっかい悪魔だな。あれは……」

「うん、悪魔な容姿だった。両手用大剣で、特殊攻撃ありだね」

「そうだな、あれは苦勞しそうだ。盾装備が欲しいな」

「盾装備ねえ……(ジーツ)」

2人は私達などいないかのよう、「遅くなっただけどお昼にしましょ」なんて言つて、アスナちゃんが作ってきたお弁当を仲良く食べていた。

以前アスナちゃんが私に、キリ君好みの味を教えてくださいと言われたので教えていたこともあり、キリ君は幸せそうにサンドイッチを頬張っていた。

そんなキリ君とアスナちゃんを見て、サツちゃんがぼやいていた。

「あーあ、2人の世界作っちゃってるよ……」

「あの2人は放っておこうぜ」

「そうね。……はあ」

「サチ、もう諦めたらどうだ？」

「……うーん、そうかもしれないねえ」

そして、これがサツちゃんとケイタ君の会話。流石ケイタ君はサツちゃんの気持ちに気が付いてたのね。微妙に取り残された感のある私達。

「ケツ。やってられないよ。誰か可愛い女の子居ないかなあ」

「まあまあ、あなた達。頑張って現実世界へ戻りましょうよ。そうしたらきつと彼女も見つかるわよ」

「だよな！さすがエミリーさん！」

「「あははは！」」

と、まあなんと賑やかな迷宮区ですこと♪・・・暫くして、また誰かがこのエリアにやってきた。

「うお！なんだか賑やかだなあ。お、キリトじゃねえか！」

「む、クライン。生きてたか」

「なんだよお、ごあいさつじゃねえか!!って、前にもやらなかったか？（苦笑）」

「だな」

「おめえにしちや、珍し・・・」

クライン君は近づいてきて、キリ君の後ろにいる人物を見て固まってしまった。

「ん？どうした？・・・おい、ラグってんのか？」

そんなクライン君の前にキリ君は手のひらをかざして左右に振っている。

「あつ、アスナさあん〜??なんでキリトの奴なんかと一緒になんですか!」

「あら、風林火山の皆さん。こんにちは♪」

「それにエミリーさんまで!!」

「私は黒猫団の皆と最近PT組んで迷宮区へ来てるのよ♪」

「じゃあ、アスナさんは?」

「ああ、今アスナと俺とでPT組んでてな」

「なんだよお!おめえばかりズルいぞ!!」

「相変わらず、女つ気ないっすねえ。風林火山の皆さんは」

「うるせえ!!エミリーさあん!!俺達ともPT組んでくだせえよ!」

「あはは!じゃあ、次はそちらにお邪魔しましょうかね☆」

「マジっすか!!やったー。リーダー、偉い!!」

「「「あははは「「「」」」」

更に騒がしくなったところで、また誰かがくる気配がした。

「!」

「キリト君、軍よ」

「ああ、そうみたいだな」

はじまりの街、黒鉄宮横をホームにしている軍がやってきた。軍が最前線に来るのは25層以来。みな疲弊している様だ。軍のメンバーで見覚えのある人はいなかった。

軍のPTリーダーらしきプレーヤーが他のメンバーを休ませ、こちらにやってきた。

「私は、コーバツツ中佐。君たちはこの先まで行っているのかね?」

「ああ、ボス部屋までマップピングしてある」

「では、そのマップデータを渡してもらおう!」

「何だとテメエ! マップピングの苦勞を知ってて言ってるのか!!」

そう代表して言ったクライン君を制したキリ君は

「いや、構わないよ。マップデータで商売する気はない。どうせ街に戻ったら公開する

「積りだったんだ」

「キリトよお、人が良すぎやしねえか？」

キリ君はコーバッツさんにマップデータを渡した。

「協力感謝する！」

そう、慇懃無礼に言い放ちコーバッツはメンバーのもとへ戻っていき、声を張り上げてメンバーを立てさせていた。

「おい、ボスにちよつかい出すならやめておいた方が良いと思うぞ」

「それはこちらで判断することだ」

コーバッツはキリ君の忠告を無視するかのようになり、疲れ切っているメンバーをまともに休ませず、先へ進んでいった。

「おい、あれ。絶対ボス部屋へ行きそうだな」

「そうだな・・・様子を見に行くか・・・?」

そう言うと、皆ニヤニヤしながらキリ君の意見に同意した。

「お前らも大概お人好しだよ・・・」

キリ君はそう漏らし、先へ歩を進めだした。私達はそれについて行く。

ボス部屋がそろそろ近いとキリ君が言った時、リザードマンが3体もPOPしたが何  
て言っても此方も団体様。あつという間に片づける。

最後のリザードマンがポリゴン片になった時、微かに悲鳴が聞こえてきた。

「ボス部屋からだ! 急ぐぞ!!」

「やっぱり忠告聞かなかったな」

「ほらほら、急いで。悲鳴が聞こえてるってことはピンチなんだろうからさ」

ドタバタと皆がボス部屋へ着き、部屋の中を覗くとそこは阿鼻叫喚の地獄と化していた。第74層ボス、〈The Greameyes〉は両手用大剣を振り回し、更にブレ

ス攻撃で軍の人たちはHPがイエローゾーンへ落ち、既にレッドゾーンの人もいた。

「早く転移結晶で逃げるんだ!!」

「転移結晶が使えない!!」

「な、何だつて？結晶無効化エリア・・・」

「ふっ、ふざけるなよ・・・」

そんな中、コーバッツは撤退するつもりは無いと叫びグリーン・アイズへ向かっていった。

「あつ、ばかやろう!!」

キリ君は叫んでいたが、流石に結晶無効化エリアなだけに飛び込めないでいる。

私は急いで蒼穹剣を構え、剣技を立ち上げ矢を放った。何とかコーバッツさんが切り込む前にボスをノックバツクさせることに成功した。それにより、コーバッツさんたちは攻撃が少し通っていた。



「姉さん!!」

「悩んでいる暇はないわよ。助けましょう! キリ君は《あれ》を出さない!!」

「・・・わかった! 準備が出来次第声をかける。悪いが、先に行っていてくれ!!」

「みんな、覚悟はいい?」

「「「はい!!」」」

「風林火山の皆さんも大丈夫?」

「・・・えええい! くそつたれ!! 行くぞ、お前ら!!」

「「「おおっ!!」」」

「じゃあ、行くわよ!!」

私達はボス部屋へ飛び込んだ。アタツカーを残し、他のメンバーは軍の助けに入る様支持をだす。すると、コーバツツさんが怒鳴り込んできた。

「手出しは無用だ!! 指揮は私が取る!!」

「はい? この状況がわかっていないの、貴方は? 軍の皆さんは疲弊してまともに動けるような人がいないじゃない。それにもう2人も亡くなっているのよ!! ボス戦を舐めないで!!」

「女のくせに、貴様！」

「このまま軍の皆さんで戦っていたら全滅していたわよ！……それとも手柄が欲しかったのかしら？でしたら貴方も攻撃してください！他の方は避難してもらいますから！いい加減にしてくださいよ！」

「……ぐっ……わかった。この場合は君たちに任せる」

「あら、貴方はまだ戦えるのでしょうか？十分タンクとして役に立ちそうですし」

「いや……私は部下たちを助けにまわる」

「そうですか。それがよろしいですね」

私は弓で攻撃しながらコーバツツさんと話をつけた。

「みんな!!姉さん!待たせた」

「真打登場よ!みんな、キリ君のフォローに回って!!」

みんな攻撃を避けながら、キリ君の方をチラツと見て『えっ?』と言う顔をしている。当然だろう。キリ君は両手に剣を一本づつ握っているのだ。

通常攻撃を仕掛けるだけなら、両手に片手剣を一本づつ持つことは可能だ。しかしイ

レギュラー装備として認識され、ソードスキルがあがらないのだ。

キリ君はアスナちゃんとスイツチし、ソードスキルで攻撃を始めた。私は要所をついてキリ君が攻撃されないよう剣技なしの攻撃を繰り返した。

それを呆けて見ていた皆はハツと我に返り、ボスに攻撃を始めた。だが、ボスの攻撃を先読みしにくく何人かは攻撃を食らっている。すぐさまPOPスイッチを繰り返し返した。

キリ君は攻撃の手を休めず、ボスのHPが残りわずかになったところで二刀流上位剣技、16連撃《スターバースト・ストリーム》を繰り返した。

この技は16連撃な為大変な隙が生まれる。スキル発動中でも相手の攻撃を受ける可能性が高い危険な技で、ある意味防御を捨てた攻撃スキルだ。

私はこの技を見せてもらったことがあるので、この攻撃に合わせて遠距離援護をする。それでも近距離で援護は無理なので全てを防ぎきれないわけではない。

他の皆もこの技は初見な為、タイミングを合わせることが出来ずに見ているしかできなかつた。

それなりに援護したのだが、キリ君のHPが減るのを食い止めることが出来ずレッドゾーンへ突入してしまった。だが、16撃目がグリーンアイズへ決まった時グリーンアイズのHPが消え、ポリゴン片となりキラキラとキリ君に降り注いでた。

頭上にCongratulation!と文字が浮かび上がると、キリ君は「終わった……のか……?」と眩き、倒れてしまった。

アスナちゃんが慌ててキリ君に駆け寄り、呼びかける。数秒後、キリ君が返事をした。アスナちゃんはキリ君に泣きながら「もう……無理しないでよ!心配したんだから」と抱き付いた。

それを見ていたサツちゃんは、もう無理だと言う顔をしてケイタ君の背中で泣いていた。

「……犠牲者は最初にやられた2人か」

そう言ったクライン君の表情は辛そうだった。

「ボス戦で犠牲者が出たのは67層以来か……」

「こんなのボス攻略って言えるかよっ!エミリーさんがすぐに動かなかつたら、コーバツツの野郎だってどうなつてたかわかんねえんだぞ!」

「……犠牲者が少なくて良かった……なんて言つてはいけなかったわね」

避難していたコーバツツさんがやってきた。

「今回は、すまなかつた。俺達は焦つていたんだ。25層以来、攻略に参加せず……はじまりの街で徴税紛いな事をして……色々周りが騒ぎはじめた。それで上層部がいきなり攻略に参加して体裁を保とうとしたのだ。」

私の働きに懸つていると最前線に送り込まれた。プレッシャーだった」

「そう、事情はわかりました。ですが、いきなり少人数PTでボスへ挑戦するのは無謀ですよ。それに、貴方は彼らの事を部下と仰いましたが、それは違うのではないのですか？ 部下ではなく、仲間……だと思えますわよ。」

「そうですね。確かに、仲間です。部下だのと、彼らに悪いことをしてしまった」

「コーバツツさん！俺らは貴方だから、此処までついてきたんだ！これからだつて、ついて行きますよ!!」

「お前ら……すまなかつた。ありがとう」

「これから、軍の方も大変でしょうが頑張ってくださいね」

「エミリーさん、と仰いましたか。ありがとうございます。そして、君たちも。すまな

かった。ありがとう」

「なあに、気にすんな。まあ、二度とあんなのは御免だけだな」

「クライン君、蒸し返さないでよ・・・」

「・・・蒸し返す・・・といやあ、エミリーさんにキリト！聞きたいことがあるんだが？」  
「えっ？何かしら？」

「あの武器は何すか！エミリーさんの武器は槍じゃなかったのか？どう見ても弓にしか見えねえんだが。それにキリトのありやあ、何だよー」

「えっと・・・まあ、見た通り弓よ」

「言わなきや・・・ダメか？」

「エミリーさんの武器はまあ後でもいいか。キリトは、ったりめーだろ！みたことねえぞ!!」

「・・・エクストラ・スキルだよ。《二刀流》」

周りにいた皆さんは “おお” とどよめいた。

「しゅ、出現条件は？」

「それが解っていれば、公開してる」

「それって、ユニークスキルってやつよね」

「うわー、あの神聖剣と同じ？」

「そう・・・だろうな」

「武器屋情報にや載ってねえから、そうだろうな！水臭えじゃねえか。そんなすげえもん隠してるなんて！」

「うっ、悪かったよ・・・」

「まあ、しよーがねえか。ゲーマーは嫉妬深いかんなあ。俺あ、そんなことで嫉妬なんかしねえけどな！」

「クラインさんが嫉妬するのは女が絡んだ時だけだよな！」

「うっせえ！」

皆の笑い声が響いた。コーバツツさんは軍の皆さんを率いて戻って行った。

「上へのアクティベートはどうする？おめえが行くか？」

「いや、俺はいい・・・頼めるか？」

「ああ、頼まれた」

クライン君はアスナちゃんに抱き付かれ困っているキリ君を見て一言、

「まあ、頑張りたまえ。若人よ」

とだけいい、階段を上がって行つた。

残つた私と黒猫団も、風林火山について行き上層へ上がった。



## 第15話

75層へ続く階段を上がると、風林火山の皆さんが其処にいた。景色を見て少し休憩していた感じだろうか。丁度良かったと私は思った。

下のボス部屋にいるだろう2人の姿をサッチャンに見せないために上がってきたのだが、そんなすぐに切り替えられる問題ではなかったからだ。

ここから転移門まで移動しなければならず、モンスターたちとの戦闘がある。敵も強いため、こんなショックを受けて気分が沈んでしまっているサッチャンが危険になる。

黒猫団メンバー&私だけではカバーしきれるかどうか不安だったため、風林火山の皆さんと一緒にいてくれる方が心強い。

「感動している風林火山の方々、申し訳ないんだけど私達もご一緒して良いかしら?」  
「お、おう!そりゃあ構わないぜ。・・・そうだな、その方がいいな」

クライン君はサツちゃんを見て、納得してくれた。そして他のメンバーたちも首を縦に振ってくれる。

「サチの嬢ちゃんにはチトあの状況は辛いしな・・・」

クライン君の言ったその一言で、サツちゃんはパツと顔をあげ、真つ赤な顔で慌てて言葉にした。

「なっ、なんでクラインさんが知ってるんですか!」

「ん?そんなの、嬢ちゃん見てればわかるだろ。ボス戦で会えば、キリトを探して見つけた途端にパツと顔が明るくなるわあ、話をしてりや下向いてもじもじしてんだ」

「うわー、クライン君って人を良く見てるわね。さすがーギルドを束ねるリーダーね」  
♪

「エミリーさん、あんまりリーダー褒めないで下さいよ!調子乗っちゃうと大変なんですから!!」

「おめえ、何言ってるんだよ!」

そんな話でサツちゃんに笑顔が戻った。クライン君は本当に凄と思う。ムードメーカーだね。

「嬢ちゃんにも笑顔が戻ったか！じゃあ、出発するぞ！」

クライン君の号令で転移門までの移動が始まった。

ここ75層は古代ローマがモチーフで私達のこの恰好が奇妙に映る。街が近づいてきてNPCがチラチラ此方を眉をひそめて見てくる。早い話、私達のこの装備は浮いているのだ。

まあ、NPCの方々にはこれから続々くるであろうプレイヤーに慣れてもらうしかない。

無事に転移門まで到着し、アクティベートが完了した。風林火山は、街を見ながらアイテムを補充してまたこの層のフィールドへ出ると言っていた。そして黒猫団はサツちゃんの状況を考え、ホームへ戻ると言っていた。

「エミリーさん、お疲れ様でした。74層で取得したアイテム等はそのままで良いですよね？」

「ええ、それで構わないわ。早く戻ってあげて」

「ありがとうございます。では、また！」

「はい」

黒猫団が戻るとクライン君が話しかけて来た。

「エミリーさん、この後は？」

「うーん、武器の耐久値がかなり落ちてるからこのまま戦闘は厳しいわ。リズちゃんの所へ行ってメンテして貰わないと・・・」

「あ、そうっすねえ。俺らも武器メンテしてから行くか？」

「武器は大事っす！俺らもそうしましようぜ、リーダー」

「よし！じゃあお供しますよ、エミリーさん」

転移門でリズちゃんの店があるリンダースへ転移し、リズちゃんの店に到着した。

「リズちゃん！いる〜?！」

「いらつしやーい、エミリーさんとクライン達か！」

「おつす！相変わらず元気いっばいだなあ」

「うっさい。これが私ってやつよ」

「はいはい。挨拶はそのくらいにして、武器のメンテお願い♪」

「了解です。つて!!こりやまた酷いですね・・・」

「えー、だってさつきボス戦をやってきたんだもの。しょうがないじゃない」

「・・・はあ??どういう事ですか!!」

リズちゃんは工房へ入り、武器を回復させながら私がさつき起きたことを話しているのを聞いている。

「はあ。そんな事があったんですか。じゃあ、しょうがないですね」

私はキリ君とアスナちゃんの事は話さずにいた。リズちゃんも恋する乙女。余計なことを言いそうなクライン君を睨んでおく。

「それに、キリ君もそのうち武器のメンテに来ると思うわよ」

「そうですか。わかりました。つつーか、相変わらずキリトはぶっ飛んでるわね。てか、二刀流だったんだ。2人だけの秘密だったのに・・・」

「まあまあ♪仕方がなかったのよ。風林火山の武器も、お願いね♪」

「はぁーい、わかりました。ほら、クライン。武器出した出した」

「よろしく頼むよ」

「うわーあんた、これ何時メンテしたのよ？」

「俺らだつて頑張ったんだ!!」

「リズちゃんは、クライン君相手だと遠慮ないわねえ」

「いいんだよ、エミリーさん。俺もこの方が楽だしな」

「2人で漫才でもしたら楽しそうね♪」

ワイワイ楽しく武器の回復が終わり私達はリズちゃんと別れ、攻略へと戻った。

翌日……朝、新聞を見て驚いた。まったくどうしてこんなデタラメ情報に尾ひれが付いて出回ったのか……。ああ、軍の皆様たちからの情報か……。

ふと、視界の端を見るとメッセージが届いていた。キリ君からだった。

『おはよう。今俺は、剣士やら情報屋に押しかけられて、ねぐらに居られなくなったからエギルの店に避難してるけど、姉さんは大丈夫か?』

メッセージを読み、宿屋の窓の外を見る。殆ど人はいなかった。

『私は、昨日最前線の75層で宿を取り直しから平気よ♪』

『流石だな。俺もそうすれば良かった……俺、暫く攻略を休もうと思う。今、エギルんところでアスナが来るの待ってるんだ』

『あら、じゃあ私もそこへ向おうかしらね♪』

『下手に宿から出ない方が良いんじゃないか?』

『大丈夫♪ 罠を使うからね〜』

『ツバサか！ いいなあ・・・』

『じゃ、これからそっちへ向かうわね♪』

『わかった。待つてるよ』

メッセージのやり取りをして、私はフードマントを被り装備をいつもとは違う物に変えて50層へ向かった。

「ツバサ、今日は悪いんだけど罠をお願い。転移門で50層に着いたら、私を追いかけて来そうなプレーヤーを撒いてちょうだい♪ 私はキリ君と合流するから」

「わかりました。プレーヤーの高さで飛んで追手の目を惹けば良いんですね」

「うん。さすががね♪ じゃ、しゅっぱーっ」

75層コリニアの転移門広場へ向かったが、この層では追手はいなかった。私の情報はそれ程出回っていないようだ。

転移門で50層へ着き、ツバサは計画通り私から離れて飛んで行った。その隙に人目を避け、エギルさんの店へ向かった。



難なくエギルさんの店に着き、表からは人だらけなので裏口から入った。キリ君はど  
うやら2階の居住スペースにいるらしい。階段を上がるとキリ君とエギルさんがテー  
ブルでコーヒーマードキブレイクしていた。

「はーい！キリ君、生きてる？」

「あ、姉さん。早かったな」

「エギルさん、キリ君がお世話になっちゃってごめんね〜」

「エミリーさん、いらっしやい。2人とも話題に事欠かないな（苦笑）」

「ホント、いい迷惑よ・・・」

「だな・・・」

キリ君はぐったりしていた。そこへエギルさんの店に武器を卸に来ていたリズちゃ  
んが現れた。

「まーったく、2人の秘密だーって言ってたのにバラすからこうなるのよ」

「だから、仕方なかったんだって！それに、姉さんのせいでもある!!」

「なんで、私のせいにするのよ。まったくこの子は！」

「・・・それにしても、アスナは遅いな・・・何やってるんだ？」

「あら、まだ来てないの？」

「ああ、血盟騎士団に報告&休暇届を出しに行ったんだけど・・・」

そう言ったところで勢いよくドアが開いてアスナちゃんが息を切らして現れた。

「キリト君！どうしよう・・・大変なことになっちゃった!!」って、エミリーさん!!良いところだにー!」

「?」

アスナちゃんを落ち着かせ、事情を聴く。

「団長の所へ昨日のボス戦の報告と休暇届を出しに行ったら、休暇の理由を聞かれてね。『暫くギルドの活動を休んでキリト君とPT組みます』って言ったら、団長がキリト君とエミリーさんを本部へ連れて来いって」

「はい?なんで私まで?意味が解らないんですけどお?」

「だよな。姉さんは関係ないじゃん!」

「とにかく、一緒に来てほしいの……」

「はぁ……わかったわよ……行けばいいんでしょ、行けば……」

「まあ、俺は当たり前か。姉さん、本当に嫌そうだな」

「……まあね」

エギルさんにお礼を言い、リズちゃんとバイバイして第55層グランザムにある血盟騎士団本部へ向かった。

血盟騎士団本部へ入ると、そこは要塞の様だった。グランザムは鉄の都。自然豊かな層と違い、無機質感がある。

たくさんドアがあり紅い良質な絨毯が引いてある長い廊下を行くと、一際大きなドアの前に着いた。

アスナちゃんはやつくりとドアを開け、「失礼します」と言って入って行った。その後にキリ君と私も続いて部屋へ入った。

正面の壁一面が全てガラスになっており、部屋には眩しい光が広がっていた。

そこにはギルド幹部の方々がズラツと並んで座っており、中央にヒースクリフが両肘を机に着き、口元で手を組んで座っていた。

「キリト君とエミリーさんをお連れしました」

「やあ、2人とも良く来てくれた。まずはキリト君、ボス戦以外で会うのは初めてかな？」

「いいえ、67層の対策会議の時に少し話しました。ヒースクリフ団長」

「あれは辛い戦いだつたな。我々も危うく死者を出すところだった。トップギルドと等言われているが、戦力は常にギリギリだよ。なのに君は、我がギルドの貴重な主力プレーヤーを引き抜こうとしている訳だ」

「貴重なら、護衛の人選に気を遣った方がいいですよ」

「クラディールの件で迷惑をかけてしまったことは謝罪しよう。だが我々としても副団長を引き抜かれて、はいそうですかと言う訳にはいかない……」

「んっ!」

「キリト君、欲しければ剣で、二刀流で奪いたまえ。私と戦い勝てば、アスナ君を連れていくがいい。だが、負けたら……君が血盟騎士団に入るのだ」

「……いいでしょう。剣で語れと言うのなら望むところです。デュエルで決着を付けま

しよう」

「……えーつと、私は何故呼ばれたのかしら？」

「エミリーさん、貴方もキリト君が私に負けたら、この血盟騎士団に入団してアスナ君の補佐を務めてもらえないだろうか？」

「はい？と言うか、なぜ？……それは強制かしら？」

「いや何、可愛い従弟君の為だ。君が一緒なら、キリト君も入団しやすくなる。引受けてくれるだろうか？」

「……はあ。仕方がないわね。今回は引き受けます」

「ありがとう」

まったく不慮の賢い……。ああ言われたら断れないじゃない……。はあ……。

後日、第75層コリニアの中央にあるコロシウムで、キリ君とヒースクリフのデュエルが大々的に開催されることとなった。

コロシウム周辺には屋台が数多く並んでいる。観戦チケットまで販売されていた。

「ねえ？なんでこんな大事になっちゃってるの？」

「すみません。うちの経理担当のダイゼンさんが計画したみたいで・・・」

「まあ、随分稼げそうよね。あら、あそこでお店開いてるのエギルさんかしら。あの人も商魂逞しいわねえ」

アスナちゃんは苦笑していた。

「私はそろそろキリト君の所へ行きますね」

「ええ、頑張るよう伝えてね」

「・・・なんだかすみません。巻き込んでしまつて」

「いいのいいの。アスナちゃんが気にすることじゃないわ。キリ君をお願いね」

「はい！」

アスナちゃんはキリ君の控室に向かつていった。私はエギルさんの店には顔を出さず（また手伝えなんて言われたらたまったもんじゃないからね）、席を取ろうとチケット

売り場へ並んだ。

私の順番がきてチケットを買おうとしたら、私の肩に乗っているツバサを見て血盟騎士団の方が此方へとチケット売り場の裏へ通された。

「エミリーさんは、団長が特別席を用意しておりますので。どうぞ、ご案内します」

と言われ、選手たちが出入りするドアから入場することになってしまった。コロシムムはお偉い貴族の人が使用する個室みたいなものがある。そこへ案内され座るよう促されてしまった。

座った後、私の背後に気配を感じ振り向くとヒースクリフが立っていた。

「見に来てくれたのだな」

「まあね。キリ君が勝つって信じてるけど、貴方がもしアレを使ったら約束は反故するわよ」

「ああ、解っている」

「あの子を舐めないことね」

会場が満席になり観客が良い感じに熱を帯びてきた所で、アナウンスが流れた。

「……そろそろ出番の様だな。では、行ってくる」

「……」

彼はキリ君の事を舐めてるわね。ちよつとは痛い目にあえば良いのよ。

ヒースクリフが去った後、ツバサが小声で話してきた。

「お母さん、索敵に1名引つ掛かりました。どうしますか？」

「上空で誰かを確認してくれる？」

「了解しました」

ツバサは偵察に行つてすぐに戻ってきた。

「少し飛んだら、すぐに誰かわかりましたよ。クラデイルでした。お母さんの3m程後ろにいます。どうしますか？」

「まっ、危害を加えてくるようなら誰か呼びに行つてちょうだい。そう易々やられないから、大丈夫」



「分かりました」

闘技場に、キリ君とヒースクリフが現れた。会場は割れんばかりの声援や、罵声も混ざっている。ヒースクリフがキリ君にデュエルを申し込み、それをキリ君が受けると頭上に大きくデュエルのカウントダウンウィンドウが表示された。

アスナちゃんは、キリ君側の入場口で両手を握って見守っていた。好きな人に勝利してほしいと思うのは当たり前だろう。私も出来ればキリ君が勝つことを願っている。

カウントが終わり、遂にデュエルが始まった。デュエルはキリ君からの切り込みで始まり、ヒースクリフが盾で防ぐ。隙についてキリ君に切り込み距離をとったキリ君に駆け寄る。

そして、剣で攻撃するかと思いきや盾で攻撃をした。神聖剣は盾も攻撃判定がでる。飛ばされたキリ君は少し焦っていたが、2刀で剣技を立ち上げ、切り込んだ。それをヒースクリフは盾で受け流す。

「素晴らしい反応速度だな」

「そつちこそ、硬すぎるぜ」

固唾を飲んでいた観客は、大いに盛り上がり歓声を上げた。

2人が一瞬消えたかと思うと打ち合いを再開する。キリ君の攻撃速度がどんどん上がっていく。隙をついてヒースクリフの剣がキリ君の頬を掠った。

更にキリ君は速度を上げていき、ヒースクリフへ攻撃するも掠っただけ。だが、掠ったとはいえ攻撃を受けたヒースクリフが本気を出し始めた。

激しい剣での応酬で、キリ君がヒースクリフの盾を弾いた。その隙を逃さず、キリ君は持ち前の反応速度で切りつけようする。

反応が遅れたヒースクリフだったが、その瞬間視界がラグったかのように赤くなりヒースクリフの盾が動いた。

私は彼が何をしたのか、理解した。あれ程やらないと言っていたことを、やったのだ。あの人らしくない。余程ムキになったのだろう。だから、アレを使ってしまったのだろう。

その瞬間、勝負がついた。デュエルはヒースクリフの勝利で終わった。

私はあの時、ヒースクリフに言った。『貴方がもしアレを使ったら約束は反故するわよ』と。

だが、気づかぬふりをして血盟騎士団へ入団した。何となくだが、嫌な予感がずっとしていたからだ。何かが起こる……。

今いる場所はエギルさんの店の2階である。血盟騎士団の衣装が出来上がったと連絡があり、アスナちゃんが届けてくれたのだ。

キリ君は二刀流がばれて、宿を追われて以来エギルさんの所で厄介になったままなのだ。なので、キリ君の所まで出向いたという訳だ。

「なあ、地味なのって頼まなかったか？」

「これでも十分地味よ」

「……はあ……」

「あら、似合ってるわよ」

「そう言う姉さんは、初めからその装備なんじゃないの？ ってくらい似合ってるな」

「エミリーさんのは、団長がアシュレイさんに直々に頼みに行ってましたよ。それも、ポケットマネーだそうですよ」

「あら、そうなの。ふーん・・・」

キリ君の装備は、今までとは真逆で白を基調としており、白地には縁取りで赤のラインが入っている。唯一パンツだけが薄いグレー色。

対して私の装備は、上半身はアスナちゃんとデザインはほぼ一緒。そして下半身は流石に、ミニスカではなく膝丈ほどで色は赤。そしてブーツではなくふんわりとしたマーメイドラインで仕上がっていた。

「はい、確かに受け取りました。サイズも問題無いわ。で？ これからどうするの？」

アスナちゃんは副団長の顔に戻って話を始めた。

「本部へ行つて、任務の説明を行います。まあ、内容は有つて無いようなものですが（苦笑）。えつと・・・エミリーさんは団長から話があるので、別々につて事になります」

「了解しました。副団長殿（敬礼）」

「止めてくださいよ、今まで通りで構いません。一応、私の補佐つて話でしたが団長が何か企んでるかもしれないので、気を付けてください」

「忠告ありがとう。じゃ、私は先に本部へ行つてるわね」

「はい」

「えっ？姉さん先に行つちやうの？」

「何、可愛い事言つてるの。アスナちゃんと少しは交流深めさない！」

私はそんなキリ君を放置し、55層のグランザムへ向かう事にした。

「で？私はここで何をするのかしら？」

「うむ、と言うか……まずは入団してくれた事に感謝する。だが、なぜ入団してくれたのか気がなってるな」

「うーん、勘でしかないんだけど……これから何かが起こる気がするの。キリ君の護衛？つてほどではないけど……」

「なるほど。キリト君が心配だったという事か」

「ええ……。貴方がそれを聞いてきたつてことは、やはりアレを使ったのは認めるのね」  
「ああ、デュエルが終わつてから、しまったと思つたさ。だが、君は入団してくれた。理由が知りたくてな」

「まあ、理由はさっき言った通りよ。……それにしても、貴方はギルドを作つただけで感じね。運営は他のギルドメンバーに任せつきりなんでしょ？」

「アスナ君から聞いたのだな。……こういう団体の運営でトップが率先すると、独裁になるのですね」

「まあ、そうですね。アスナちゃんが愚痴つてたわよ。もう少し仕事をしてほしいってね」

「仕事と言つても事務仕事が始どなのだ。私がそう言うのが苦手なのは君も知っているだろう？」

「ええ、嫌つて程に存じますわ♪」

「決済の判を押すぐらいいはやっているさ」

「まあ、それくらいなら問題はないですわね。でも、規律を少し緩めても良いと思うんですけどねえ」

「私は、判を押したただけだ。決めたのは彼等だよ」

「ふーん……どうせ貴方の事ですから、内容を確認しないで判を押しているんでしょう？」

「……言葉もないな（苦笑）」

「貴方にも護衛がいるのですが、幹部に1人は付けているの？」

「私はここから出る時に3人程付くが、断るときもあるさ」

「ねえ、私には護衛はつけないでね。ある程度自由にしたいから。ちゃんと幹部さん達を説得してくださいね」

「ああ、出来るだけ努力しよう」

翌日、私はアスナちゃんの手伝いで書類を捌いていた。

「エミリーさん、キリトさんはどちらにいかご存知ですか？」

「あらゴドフリーさん、おはようございます。キリ君なら副団長の所だと思えます」

「ありがとうございます」

「どうなさったんですか？」

「いや、何。訓練ですよ。新入団員の連携を確認するのです。私はフォワード指揮を任されてましてね」

「ご苦勞様ですわ。この書類ももう少して片付きますし、私も一緒にしようかしら」

「おお、それは良いですね。ここ55層の迷宮区へ行きますので、30分後に街の西門に集合です」

「わかりました。では、後程」

ゴドフリーさんはモジャモジャ頭のしつかりした体格で、体育会系な感じだ。まあ、サバサバしていて細かいことを気にしないタイプ。多少強引な所があるが、私は結構彼を気に入っている。



書類も片付き、言われた通り街の西門へ。門に着き、外へ出ると意外な人物がいた。

「あら、貴方はクラディールさん。自宅謹慎を受けていたのではなかったですか？」

「ゴドフリーさんが団長に口をきいてくれました。まず、今日の訓練に出てくれと、団長が仰ったそいで」

「そうですか。私もご一緒することになりましたので、よろしくお願いしますね」

「おお、お美しいエミリー様とご一緒できるとは！ゴドフリーに感謝しなければなりませんね」

そんな会話をしていると、キリ君とゴドフリーさんがやってきた。

「・・・何で姉さんが？」

「いいじゃない。私も新人よ。ねっ？ゴドフリーさん♪」

「そうですそうです。訓練ですからな」

「そして、なぜコイツが？」

「こら、キリ君！失礼よ！」

「これからはギルドの仲間。ここらで過去の争いは水に流してはどうかと思つてな。ハッハッハッ」

「先日はご迷惑をお掛けして二度と無礼なまねはしませんので、許していただきたい」

クラデイルさんは深々とお辞儀をしてキリ君に謝意を示した。

「これで一件落着だな。では、今日の訓練は諸君らの危機対処能力もみたいので結晶アイテムを全て預からせてもらおう」

「転移結晶もか！」

「うむ」

クラデイルさんはゴドフリーさんに2つ結晶を預けた。それをみてキリ君は渋々渡し、私も渡す。

「よし。じゃあ皆、出発だ！」

「お、おおー……」

「おー！」

キリ君とクラディールさんは嫌々、私は元氣よく返事をし出発した。

## 第16話

第55層、遠く離れた高いところから見るとまるでグランドキャニオンに見え、まるで迷路の様な所を進んでいた。

迷宮区の手前でゴドフリーさんが足を止めた。

「よーしー(ハハ)で一時休憩」

そう言い、ストレージから食料と水筒の入った袋を取り出し全員に放り投げ配っていた。突然参加が決まった私の分も用意されていた。

私は3人を見まわすとキリ君は袋を開け、中を確認してため息を吐いていた。クラディールさんは袋を開けず私と同じように皆を見ている。

ゴドフリーさんとキリ君は水筒を取り出し、水を飲んだ。その瞬間クラディールが厭

らしい顔をしてキリ君の方を見た。私はそれをみて、慌てて小声でツバサに救援を頼んだ。

キリ君とゴドフリーさんは動けなくなり、倒れてしまった。クラディールは私の方を見て一瞬狼狽えたが直ぐに毒付ピックを私に放ってきた。

私はそれを回避し、慌ててゴドフリーさんへ近づき解毒ポーションを飲ませた。クラディールは悔しそうな顔をしていたが、キリ君の方へ駆けていく。

私は急いで武器を構え、矢を放った。矢はクラディールの肩へ刺さったが、矢じりに毒など付いていないので動けてしまう。クラディールは顔を歪め、私の方へ近づいてきた。

「キヤーハハツハ、中々やるじゃねーか！ ホントは全員麻痺させてゴドフリーと黒の剣士を殺したら、動けなくなつたエミリー様をゆつくり可愛がつてやろうと思つたんだが、こうなつたら仕方がねえな！」

クラディールはそう叫んで私に攻撃してきた。私は弓を槍にし応戦する。すると頭上からもう一つ、殺気を感じた。えっ？ つと思わず上を見上げると、そこにはボロボロマントを被つたプレーヤーがいた。

私がクラデイルの相手をしていた時、ゴドフリーさんは解毒結晶を使い自らとキリ君を回復させてくれていた。

実は私は対人戦をしたことがないので、今の状況はかなり怖いのだ。私のもとに麻痺が回復したゴドフリーさんが駆けつけてくれ、私と代わってくれた。ホツとしたのも束の間、ボロマントのプレーヤーが上から飛び降りて来た。

その人物をみて、私とキリ君は驚愕した。なんと、あのラフィンコフィンのギルマス《P o H》だ。私は慌てて後ろへ跳び、P o Hから距離を取った。キリ君はP o Hに剣を向ける。

状況はかなり悪い。だが、ツバサが救援を呼びに行ってくれているはずだ。

このことから見て、おそらくクラデイルはラフコフメンバー(残党)なのだろう。本気で殺しに来る彼らに2人とも手こずっている。私は既に戦力外だ。

クラデイルが押され始めたころ、ツバサが呼んだ援軍、副団長アスナちゃんが閃光の二つ名に恥じないスピードで到着した。

「えっ?なんで、P o Hがいるんですか!」

「どうやら、これを仕組んだのはP o Hみたいなの。ごめんなさい、私は対人戦の経験がなくて怖くなってしまつて・・・」

「当たり前です！ 気にしないでエミリーさんはここで待っていて下さい。クラデイルの方はもうじき片が付くでしょうから、キリト君の援護に向かいます！」

「お願いします」

アスナちゃんは一瞬でキリ君の隣に並び、キリ君のHPを結晶で回復させた後POHと対峙した。かなり押され気味で、HPがレッドゾーンまで落ちていたキリ君は心強い援軍に攻撃速度が増した。

その時、ゴドフリーさんがクラデイルの両腕を切り、逃げ出さないように持つていたロープで縛りあげた。それが終わると今度は、POHへと刃を向けた。

攻略組3人にPOHは劣勢を悟った様で、逃げる体制に入った。POHを逃すまいとキリ君が回り込み囲んで攻撃したが、隙についてPOHは逃げてしまった。

「またもや逃がしてしまったか」

キリ君は悔しそうに呟いたが、アスナちゃんがキリ君の心配をして『無事で良かった』と涙を流していた。そんなアスナちゃんをキリ君は優しく抱き寄せ頭を撫でていた。

「私は小奴を黒鉄宮まで届けて来ます。団長への報告は、副団長補佐殿にお願いしてもよろしいですか？」

「了解しましたわ」

「ゴドフリーさんは転移結晶を一つ私に渡して、彼も転移結晶ではじまりの街へ飛んだ。」

「キリ君、アスナちゃんをよろしくね。私は本部へ戻りますから」

「・・・ああ、わかった」

私は転移結晶で主街区まで転移し、ギルド本部へ戻った。

---



「・・・以上が先ほど起きました事の顛末です」

「うむ、皆無事で何よりだった」

「クライドールは当然除籍ですな」

報告が終わると幹部の方々クライドールの処遇について言い放った。

「副団長補佐、後で話があるので団長室へ来てもらいたい」

「はい。伺います」

私は急ぎ報告書類を作成し、団長室へ向かった。

団長室へ着き、ドアをノックして部屋へ入る。私とヒースクリフの仲なので、2人の時はノックのみでドアを開けていいと以前ヒースクリフが言ったのだ。

「参りましたわ。団長」

「2人の時は名前で呼んでほしいと言ったではないか」

「名前が長いのよ。団長の方が楽でいいわ」

「・・・そうか」

「で？お話とは何かしら？」

「今日はご苦労だった。君に《もしも》は絶対ないはずだが、心配したのは言うまでもない」

「あら、やつぱりこうなるだろうと予測してクライドルを訓練に参加させたのね？」

「まあ、彼が何処まで改心しているか・・・と思つたのだがな。やはり人は面白い」

「貴方ねえ、死人が出なかつたから良かったものの、結構危なかつたんですからね？」

「つむ、すまない。・・・君も私に話したいことがあるのではないか？」

「あら、良く分かりましたね。・・・ええ、そうですね。恐らく今回の件を理由にアスナちゃんは休暇を、キリ君は脱退の申請すると思うの。だから、貴方は素直に謝罪してその申請を許可してくださいね」

「うむ。まあ、そこは了解した。まさか、君まで休暇や脱退を考えているのか？」

「・・・まあ、私は副団長補佐。副団長代理は無理ですから、どなたか別の方にしてくださいね。それに、代理で決まつた方が私にお暇を出しても文句は言わないでください」

「それは仕方がないか・・・」

「・・・」

「話は以上ですわ。では、失礼します」

「もう少し君と居たかったのだが・・・」

「あら、お仕事なさってくださいね」

「そうだな」

私は団長室を出て、執務室へ戻りその他の仕事にとりかかった。

翌日、キリ君とアスナちゃんがギルド本部へ来て一時退団と結婚の報告にやってきた。

結婚の話は私も聞いていなかったのが、素直に祝福した。2人の一時退団が認められたことにより、翌日には副団長の代理が無事決まった（私も推薦されたが丁重にお断りしました☆）。

そして私も2人より1週間ずれて休暇を貰えた。

2人の一時退団後の1週間は私はまだ仕事をしていたにも関わらず、2人の幸せな甘

い報告メッセージが1日交代で送られてきた。やれ今日は何処何処へ行ったのだ、今日は何をしたのだ。

2人きりになれたのだから幸せ報告はしなくて良いとメッセージをしたのだが、それは私が休暇になるまで続いた。その間、私は時々クライン君や忙しいアルゴちゃんをとつつかまえて愚痴を言っていた。

やっと休暇に入り、私は早速2人の新居へ向かった。そこは22層の湖畔沿いにある眺めの良いログハウスだった。

「ヤッホー！ やつと休暇が取れたから遊びに来たよ〜」

「お姉さん、いらつしやい！」

「良いところだねえ。私もこの層に引越したくなるね」

「・・・そんなこと言っても姉さんの事だから、どうせ引越しはしないんだろ。前から根無し草みたいな所があるかならあ」

「悪かったわね！ 実家は自由がきかなかったんだからしようがないじゃない。結婚した後は仕事と家事の両立だったし」

「えっ！ お姉さん、結婚なさってたんですか？」

「・・・ええ、まあね・・・（口が滑った！）」

「へえー、お相手の方も此処へ……っていらしたら今もご一緒してますね。すみません」  
「ああ、いいのいいの。気にしないで」

気まずい雰囲気になってしまったが、アスナちゃんが話題を変えてくれた。

「今日はキリト君が何やら面白いところへ連れて行ってくれと言ってるので、そこへ行こうと思ってるんですがご一緒しませんか？」

「私は新婚の邪魔する程、野暮な小姑じゃないわよ。今日は様子見って事で来ただけだから」

「そうですか？」

「そうそう。出掛ける前に押しかけちゃってごめんね。じゃあ、またね♪」

「姉さん、サンキューな」

「はーい！お幸せに☆」

私は2人に見送られながらログハウスをあとにした。

久々にのんびりと出来たので、他にも会っていない人達の所へ顔を出そうとはじまりの街の教会へ足を運んだ。

教会に着いてドアをノックする。だが、反応がない・・・仕方がないのでサーシャへメッセージを送った。すると、すぐにドアが開いた。

「こんにちは♪」

「エミリーさん、ごめんなさい。最近物騒になったものですから、誰か確認できない時はドアを簡単に開けられなくて」

「気にしないわよく。寧ろその位警戒していた方が安心よね」

「立ち話もなんですから、奥へどうぞ。子供達も喜びます」

「あら、シヨウさんは？」

「また、稼ぎに行ってくれてます」

「えっ？ボス戦にも参加してるんだし、・・・それ程？」

「ええ・・・とにかく奥へ」

サーシャに促され、教会の居住スペースへ行くと子供たちが寄ってきた。

「エミリーさーん！いらっしやーい!!すっごく久しぶりだね〜」

「ご無沙汰しちゃってごめんね〜」

「聞いたよ〜。攻略組の血盟騎士団へ入ったんでしょ？すごーい!!」

「まあね・・・今はお休み中よ♪」

子供たちの相手はツバサに任せ、私は話の続きをサーシャから聞くことにした。

「で?」

「はい。少し前から、軍による恐喝紛いな徴税行為が始まりました。それで、あまり外へ出歩く事が出来なくなってます・・・。シヨウさんは軍の上層部の方とお知り合いなので私達もそれ程酷い目には遭っていないのですが」

「なるほどね。それでシヨウさんも稼ぎに出て被害に遭いにくい様になっているって訳ね」

「はい。ですが、どうやら軍が内部分裂しているっぽいですよ」

「派閥かあ・・・軍は大きいからね。私達は攻略組だけど、よそのギルドの内政まで干渉

できないからね」

「そうですね……。あつ、でもシヨウさんがいらつしやる時は、安心して皆外に出ていますから」

「そうね。お父さんがいれば子供達も安心よね♪」

「ふふふ。それじゃあ私はお母さんですか？」

「あら、実際そんな感じじゃない（笑）まあ、子供達は先生つて呼んでるみたいだけど」

少し今のはじまりの街の状況が把握できた。私は子供達と一緒に外へ出かけようと誘い、子供達は喜んでくれた。やはり室内に籠っているのは、辛い子もいるようだった。ツバサが子供たちの相手をしながら見回りに来る軍の方々を察知していたので、出くわさないよう上手く回避しながら遊んでいた。

暫く遊んだ後一旦教会へ戻り、ある程度力のある子たちを連れてフィールドへ出て狩りを教えたりした。当然無理のない程度にだ。だが、子供達には決して一人や大人がいない時はフィールドへ出ては行けないと教え込んだ。

シヨウさんが戻ってきてから、シヨウさんが買ってきた食材と私が持つて来ていた材料で皆に腕を振るい、いつもより少し贅沢な食事を用意してあげられた。サーシャも頑張つて作っているのだが、はじまりの街では良い材料は手に入りにくい。



シヨウさんが上層に買い物や狩りへ行くそうなのだが、何せここにはかなりの子供の人数がいるのだ。節約をしないと結構大変だとサーシャがぼやいていた。

夕飯も済み、皆が泊って行ってくれと言うので、遠慮なく泊することにした。

---

翌日の昼前にキリ君からメッセージが入った。

『これから俺達もそっちへ向かうから、宿へ帰らないでそこに居てくれ』

何だろう？何かあったのかした？移動しないでくれとは珍しい……。

久々にシヨウさんとお話をして、子供達と遊んでいると外へ遊びに行っていた一人の子供が慌てて戻ってきた。

「シヨウ先生!!大変だ!ギン兄たちが軍の奴らに囲まれちゃった!」

「何！どこですか！」

「こつちです！」

私達はその子の案内で現場に駆けつけると、1人の少女を背負っているキリ君とアスナちゃんが子供たちを庇って軍の方々に向かっていた。

私はキリ君の背負っている少女を見て驚き、動けなかった。

「キリト君、ユイちゃんをお願い」

「ああ」

そう言うとアスナちゃんはレイピアを抜き怒りを顔に出してソードスキルを立ち上げ、前に出て来た軍の1人に2・3回攻撃した。

「安心して。圏内ではどんな攻撃を受けてもHPは減らない。そう、軽いノックバックが発生するくらい。その代り、圏内戦闘は恐怖を刻み込む」

そう言い放ちもう一度攻撃をしようとしたアスナちゃんを見て、軍の人は情けない声

を出して慌てて逃げ腰になる。そこへまたアスナちゃんが剣技で攻撃を繰り返した。悲鳴を上げながら仲間にも助けを求めたが、アスナちゃんが再び剣を構え直すと攻撃を受けた人が仲間を置いて逃げ出した。それを切っ掛けに他の仲間たちも逃げ出した。

私達は逃げた軍の皆さんを見送り、シヨウさんがアスナちゃんに声をかけた。

「アスナさん、ありがとうございます」

「あ、シヨウさん。差し出がましい真似をしまして、すみません」

「いえいえ。俺はいつも穩便に済ませてしまうので……。あれくらいやった方が彼等も懲りますよね」

「あはは」

子供たちを見ると、目をキラキラさせてアスナちゃんに近づく。

「スゲーよ姉ちゃん!!」

「あんなの初めて見たよ!」

「うん! 凄くかつこよかった!」

子供達に褒められアスナちゃんは照れ笑いをしていた。

「どうだ、ママは無茶苦茶強いだろう」

そう言ったキリ君だったが、背中の少女は片腕を空へ伸ばし掌を広げて何かを捕まえようとしている。

「みんなの……みんなの心が……」

「ユイ?」

「ユイちゃん!」

「みんなの……みんなの……」

「ユイ!どうしたんだ!ユイ!」

近づいたアスナちゃんが心配そうにユイに声を掛ける。

「ユイちゃん!何か思い出したの?」

「あたし……あたし此処にはいなかった。ずっと一人で暗いところにいた!」

そう言うとユイは目を見開き、急に苦しみだした。すると周辺にノイズ音が大音量で広がる。思わず耳を塞いでしまうほどだ。

ユイは悲鳴を上げて気絶しかけ後ろへ倒れこんだ。傍にいたアスナちゃんが慌ててユイを受け止めた。ノイズ音が消えるとユイはアスナちゃんに泣きつき、怖いと言って気絶してしまった。

その後ユイを教会へ運びベッドへ寝かせ様子を見る。アスナちゃんがユイの頭を撫でると苦しい表情は消え、安心したような顔になりスヤスヤと寝息が聞こえて来た。

シヨウさんとサーシャはこのまま寝かせてあげようと言ってくれたので私達はアスナちゃんを残し寝室から離れた。

「姉さん……あの子、ユイに心あたりがあるか？どう見ても姉さんそっくりなんだ」

「……あの子はA Iよ。M H C P O 1、メンタルヘルス・カウンセリングプログラム  
試作1号Y U Iよ」

「やつぱり知っていたか。でも、A I？プログラム？……なぜあんなに姉さんそっくりなんだ？……それに、俺は現実世界でユイを……もつと幼かった頃のユイを見てい

る気がするんだ」

「・・・この話は、キリ君とアスナちゃんにしか話せないかな・・・」

「そうですか。では、俺とサーシャは席を外します。アスナさんをお呼びしましょう。サーシャ、アスナさんと代わってくれるかい？」

「はい。アスナさんに声を掛けてきますね」

「ありがとうございます。すみません」

私達は教会の椅子に座って話をしていたので、シヨウさんとサーシャは別室へ移動してくれた。アスナちゃんが来るまでキリ君と無言で待つ。

アスナちゃんがやってきてキリ君の隣に座った。

「キリト君、ユイちゃんがAIって本当なの？・・・信じられないんだけど」

「ああ、俺もだ。だけど、それをこれから姉さんが話してくれるよ」

2人は見つめ合い、頷くと私を見て話を促した。

## 第17話

「どこから話しましょうかね。・・・キリ君は覚えていると思うけど、私は家を勘当されてある人と結婚したの。まあ、正式ではなく内縁だったけれどね。」

で、その人の仕事を手伝いながら幸せに暮らしていたわ。そして、子供が出来た。女の子で、名前は結衣。その子とキリ君は会ってるわよね。だけどその子は2歳の時に病気になるって死んでしまった・・・。

今、あなた達が被っているナーブギアの開発に関わっていた人物が私の夫なのだけけど、彼が結衣をプログラム化（AI化）して電子の世界で再生させたのよ・・・2歳の子供の状態だね。私はそれを知らされてなかったのだけれど。

彼は結衣をメンタルヘルスカウンセリングのAIとして成長させていったわ。

それが、あの子・・・ユイよ。このカーディナルシステムはプレーヤーのメンタルケアすらもプログラムに任されているのよ。」

「姉さんはこのゲームに関わっていたのか・・・姉さんは何を担当していたんだ？」

「私の専門はグラフィック。このゲームの景色・風景のデザインを作っていたの」

「・・・そうか。それで爺さんは姉さんの事を悪く言っていたのか」

「ええ、そうね。私の母、キリ君の叔母にあたる人だけど、母は武道家の家へ嫁いだのよ。

そして、私もその家で育っている。ある程度期待されていたけれど、進みたい分野が180度違ったからね。でも、武道を続ける約束で希望の大学までは出してもらえたわ」

「それで・・・その男性と知り合って結衣ちゃんが生まれたんですね」

「ええ」

「姉さん、この機会だから確認するけど・・・姉さんって・・・」

「うん、そうよ。私は現実世界に体は無いわ」

「えっ!?!どういう事ですか・・・エミリーさんはここに居ますよね?」

「私は子供を・・・結衣を亡くして生きる希望を失っていたわ。そこへ、夫にある試験に参加してみないかと言われたの。それが、あなた達が今被っているナーブギアの前身だったの」

「・・・」

「その機械の試験運転中に事故が起こったの。これは公にはされていない事なのよ。私は意識だけが電子の世界に放り出された。だけど体へ戻る気はなかったから、そのまま



其処に留まり続けたわ」

「それを叔父さんと叔母さんが許さなかったって事か」

「ええ。当時、一般の人間には理解できない事だったのよ……まあ、病院で意識が戻らない患者と同じよね。その状態が流石に2年も続けば、私の体もかなり衰弱していたわ。」

そして、私から連絡が途絶えた父と母は彼を探し出し、私の状態を知ってしまったの。せめて体を返してくれとね……死んでしまった状態に近かったから。彼は相当悩んだ末、私の体は機械から外されて茶毘に付されたわ」

「姉さんの葬儀か……俺が覚えているのはその記憶なんだ。突然で理解が出来なかった……」

「でも、お姉さんの意識はそのままサーバーに残っていたのでしょ？」

「そう。だけどこのゲームがだいぶ出来上がってきて、ネットワークに接続された時に私は外へ出たの。そのまま2年程、色々なネットワークを回遊したわ。そして、ある日叔母様が見ていたサイトにたどり着いたとき、ボソツと呟いたの。キリ君を心配して『誰でもいいから様子を見てきてほしい』とね」

「それで姉さんは此処へ来たって事か」

「あれ？そうするとプレーヤーとして介入出来ないんじゃない？」

「そこは、あれだろ？ ログイン出来なかったプレイヤーのIDを使ったんだろ？」

「ええ、その通り。このゲームに関わっていたこともあって、GM権限を私も持っているの。だから、カーディナルの裏についてプレイヤーIDを拝借して騙している状態ね。

「ただ今は、この拝借したIDの一プレイヤーでしかないから使えないのだけれどね」

「使おうと思えば使えるんだろ？」

「まあね……使ってしまえばカーディナルに見つかって私の存在ごと消される可能性が高いけど……もしかしたら……」

「大丈夫なのか!？」

「ううん。何でもないわ……」

「まだ何か隠してそうだよな……でも、何で今まで話してくれなかったんだよ!」

「キリ君は案外精神がお子様だからね。そばで一緒に支えてくれる人がいないと、打ち明けられなかったのよ」

「うっ……面目ない」

「私がキリト君を支えていきます! 安心してください、お姉さん」

「うふふ。アスナちゃんにお姉さんなんて呼ばれると嬉しいわね。こーんな可愛くて綺麗な義妹が出来て。あーあ、現実世界に戻れたら良かったな、なんてね♪」

「それを言ったら、俺達だって確実に戻れる保証は何処にもないじゃないか」

「まあ、頑張つてね♪」

「あれ？つて事は・・・お姉さんはこのゲームがクリアされたらどうなるんですか？」

「さあ・・・どうなるんでしょうね？」

「わかってないのかよ!!」

「まあ？どうせ死んでるんですから問題なし？」

「なんで疑問形・・・」

簡単にだけどユイの説明と私の今の状態を話した。流石にこのデスゲームの原因が自分にも関係あるとは言えなかった。何時か話せるときが来るといいのだが・・・。

ユイは目覚めず、シヨウさんがキリ君とアスナちゃんに『泊っていくといい』と言つてくれ2人は泊っていくことにした様だ。ユイの事を自分たちの本当の子供の様に可愛がり心配してくれているのがわかった。

私はユイが自分の子供には思えない。更に言えば、結衣に重なるだけなのだ。きつとアキさんも同じ様な感じなのだろうか・・・それとも・・・。彼と話した限りではユイ

の事を結衣だと思っているのかもしれない。

となると、今頃ユイの様子をあの場所で見ているのか。だとしたら、今の状況をどう思っているのか。下手に此処へ来ることは出来ないだろう。となれば、先ほどのノイズ音はカーディナルがユイを探したからかもしれない。

私はヒースクリフとフレンド登録はしていない。ギルドメッセージは送信できるのだが、団長は滅多な事ではメッセージを送らないし私も送らないようにしている。確認したいが、後々面倒なことになりそうなのでやめておいた。

翌朝、ユイは目が覚めており大人しくアスナちゃんが起きるのを待つていたようだ。私は皆より早めに起きてサーシャと朝食の準備をしていた。起床の時間になったので、ツバサに皆を起こしてもらいに行かせる。

するとツバサはすぐに戻ってきた。まだ皆が起きてきていないのにどうしたのだろうと首をかしげていると、『ユイが起きていましたよ』と教えに來ただけだった。

皆が起きて来て朝食を食べている。キリ君たちも一緒に食事を始めたが、子供たちの食事風景に驚いていた。

「これは・・・凄いな・・・」

「・・・そうだね・・・」

「うふ、毎日こうなんですよ」

「ユイちゃんの具合、大丈夫ですか？」

「昨晚ゆつくりと休ませてもらったおかげで、この通りなんです」

ユイを見るとパンにかぶりつき、モグモグ食べていた。私もお茶を皆に配り終わり、席についた。

「エミリーさん、ありがとうございます」

「いいのいいの。私が来た時ぐらい、ゆつくりしてね」

ユイは私の顔をジーツと見つめて何か考えているような素振りをしている。

「ユイ？私の顔に何かついている？」

「うん。でも、エミリーさんの事を何だか知っているような気がした」

「・・・ユイちゃんは22層の森の中で迷子になっていて、記憶を失つてみたいなんです」

「そう・・・ですか」

「ユイの記憶が戻るまで、待つしかないかな。もしかしたら、戻らない可能性もあるけど・・・」

その方がユイにとって良いのかもしれないわね」

私達が少し暗い顔になると、ユイは悲しそうな顔をして『ママ、笑って』とアスナちゃんに言っていた。その時、ドアをノックする音が聞こえた。

シヨウさんとサーシャが来たのか確認しに行った。すると、声が聞こえて来た。

「ユリエールさん！どうかしましたか？此処へいらっしゃるのも珍しいですね」

「どうも、ご無沙汰してます」

「もしかして、昨日の件ですか？」

「いや、昨日はうちのギルドメンバーがご迷惑を掛けましてすみませんでした。むしろ

良くやってくれたと思っただけです」

「立ち話もなんですから、奥へどうぞ」

「ありがとうございます」

ユリエールさんを部屋へ通し、自己紹介が済んだ。お茶を出して話を聞く。席にはシヨウウさん、サーシャ、キリ君、アスナちゃん、ユイが着いていた。ユイにはミルクを出した。

「昨日、あいつ等を追い払った方はどなたですか？」

「あ、はい。私です」

アスナちゃんが少し不安顔で手を挙げる。

「ああ、苦情を言いに来たのではありませんのでご安心ください」

「ホッ。えっと、何かご用でしょうか？」

「貴女方の強さを見込んでお願いにきました。恥ずかしい話なのですが今、我がギルドは内部分裂するなか台頭してきた《タイラント》という男がいます。タイラント一

派は権力を強め効率の良い狩場を独占したり、調子に乗って徴税と称した恐喝紛いな行為すら始めたのです。

でも、ゲーム攻略をないがしろにするタイラントに批判する声が大きくなってタイラントは配下の中からもっともハイレベルなプレーヤー達を最前線に送り出したんです」

「つあ、コーバッツさん・・・」

「最悪の事態はエミリーさんのお蔭で回避できましたが、成果を上げられなかった結果コーバッツを追い出しました。その事でタイラントは強く糾弾され、もう少しでタイラントをギルドから追放できるところまで往ったのですが・・・」

追い詰められたタイラントはシンカーとキバオウを罾に搔けるといふ強硬策に出ました。

・・・シンカーとキバオウをダンジョン奥深くに置き去りにしたんです！」

「「「えっ！」「」」」

「転移結晶は？」

そう聞いたキリ君の質問にユリエールさんは頭を横に振った。



「まさか手ぶらで?!」

「彼等は良い人すぎたんです。タイラントの丸腰で話し合おうと言う言葉を信じて……昨日の事です」

「昨日……それで、シンカーさんとキバオウさんは?」

「かなりハイレベルなダンジョンの奥なので、身動きが取れないようです。……つ全ては副官である私の責任です!……ですがとても私のレベルでは突破出来ませんし、タイラントが睨みを利かせる中、軍の助力は当てにできません。

そんなところに恐ろしく強い2人組が街に現れたと言う話を聞きつけ、こうしてお願いに来たしだいです」

ユリエールさんは席を立ち、深々と頭を下げてこう言った。

「キリトさん、アスナさん、エミリーさん、シヨウさん!どうか私と一緒にシンカーたちを救出に行ってくださいませんか?」

「私達に出来ることなら力を貸して差し上げたい、と思います。でも、こちらで貴女のお話の裏付けをしないと……」

「無理なお願いだって事は私にも判っています。でも、彼が今どうしているのかと思うと・・・」

「もうおかしくなりそうで」

ユリエールさんは涙を流しながら、私達に訴えた。

「ユリエールさんは、嘘をつくような方ではないですよ。それは俺が保証します」

「そうだな。シヨウさんを信じます。疑って後悔するよりは、信じて後悔しようぜ」

「そうね、行きましょう。何とかなるわ♪」

「ふふ。相変わらず呑気な従姉弟ですね。微力ながらお手つだいさせていただきます」

「ありがとうございます！」

「大事な人を助けたいって気持ち、私にも良く分かりますから」

ユリエールさんは涙を拭いてホッとした顔になった。

「ユイ、ちよつとお留守番しててな」

「いや！ユイも行く！」

「キリ君、ユイを連れて行っても大丈夫よ」

「ああ、そうか・・・」

「あなた達をパパとママって慕ってるんですもの。離れたくないのよ」

「エミリーさん、ありがとう！」

「・・・どういたしまして。」

私はとても複雑な気持ちだった。ユイは自分の子供と言っても良い。それなのに他人行儀にされるのだ。まるで子供を捨てて出ていった母親が、他人に育てられた我が子に再会したような感じだろうか・・・。

—————

ユリエールさんに案内されたのは黒鉄宮。裏側に地下ダンジョンの入り口へ続く通路があった。

「まさか、はじまりの街の地下にこんなダンジョンがあるなんて」

「ベータテストの時にはこんなの無かったよな？」

「ああ、不覚だった」

「上層攻略の進み具合によって解放されるタイプなんでしょうね。タイラントはこのダンジョンを独占しようとして計画していました」

「専用の狩場があれば儲かるからねえ」

「それが、60層クラスの強力なモンスターが出るので殆ど狩りは出来なかったようです」

真つ直ぐな通路を進むと更に地下へ降りる階段があつた。

「ここが入口です」

「うあ」

声を上げたユイを心配そうにユリエールが見た。

「ユイ、怖くないよ！」

「ユリエールさん・・・ユイの事は心配しなくて大丈夫よ」

「ええ。この子、見た目よりしっかりしてますから」

そして、ダンジョンへの階段を下りていく。

流石に攻略組が4人もいるのだ。途中エンカウントした敵はあつという間に蹴散らしていく。主にキリ君が・・・

進んでいくと4つ目がある大きなカエル、スカベンジトードが20匹程出てきたが、あつという間にキリ君が片付けていった。

「なつ、何だかすみません。任せっぱなしで・・・」

「いつ、いえ（苦笑）。あれはもう病気ですから、やらせておけばいいですよ」

そんな会話をしているアスナちゃんとユリエールさんだが、敵を倒しまくっているキリ君を見ているユイは楽しそうにはしゃいでいた。その様子を私とシヨウさんは苦笑してみていた。

ユリエールさんはウィンドウを開いてマップを出し、シンカーさん達がいる所を確認した。

「シンカー達はこの場所から動いてません」

「そこが安全地帯なのね。そこを曲がって真っ直ぐ行ったところみたいね」

「はい」

「急ぎましょう」

マップを頼りに進んでいくと、何やら広い通路に出た。その時、頭上でツバサがピーツと高い声で一声鳴いた。

「ユリエールさん、この先にきつとモンスターが出ます。どの位の強さか分かりませんから、気を付けてください」

「なぜ判るのですか？」

「今、ツバサが鳴いたでしょ。ツバサが鳴くときは強力なモンスターが出る時だけなの」

「了解しました」

「皆も油断しないでね！」

「ああ」

進んで行くと、少し遠くにドアのサイズの明るい場所が見えた。すると、ユリエールさんが其処にシンカー達がいると言って走り出そうとした。

「シンカー!!キバオウ!」

「ユリエールツ!!」

向うで腕を振ってシンカーさんがアピールしていたが、

「こつちに来ちゃアカン!!その通路には!!」

キバオウさんが静止を掛けた。だがユリエールさんはシンカーさんに逢えた嬉しさから止まらずに走って行こうとしていた。

「危ない!」

「ダメだ!!」

「ユリエールさん!!」

皆も声を掛けるが走っている彼女には届かない。その時、通路の上から何かが襲ってきた。キリ君が俊敏値全開でユリエールさんに体当たりする様に庇い、剣を抜いて攻撃してきた獲物を防いだ。

ユリエールさんは転がるようにシンカーさん達の方へ向かった。私達も慌ててキリ君に駆け寄り、剣を構える。

「ユリエールさん！この子をお願いします。急いで転移結晶で！」

「シヨウさんも一緒に転移結晶で戻ってください！ユイの事お願いします！」

そう言ってアスナちゃんはユイをユリエールさんの方へ押しやり、キリ君の隣に並んだ。シヨウさんは私達を心配していたが、ユイの事を頼まれたので仕方がなく4人で戻ると言ってくれた。

「皆、気を付けろ！俺でもレベル識別出来ない！恐らく90層クラスだ!!」

「ザ・フェイタルサイズ……」

大きな鎌と死神のようなフードを被っている、顔は骸骨そのものの迷宮区のボスモン



スターだ。フェイタルサイズは巨大鎌でキリ君に攻撃をした。1撃を受けただけでキリ君は吹き飛ばされ、HPがイエローゾーンまで落ちていた。

「キリト君!!」

キリ君にアスナちゃんが駆け寄ろうとするが、アスナちゃんにターゲットが移り攻撃しようとしてきている。私は慌てて弓にし、スキルを放った。するとターゲットは私に移動したが、さてはて・・・どうしたものか・・・。

すると、ユリエールさん達と一緒に転移したはずのユイがスタスタと私達を庇うようにフェイタルサイズと対峙した。

「ユイ!!」

「ユイちゃん!!」

キリ君とアスナちゃんはユイがプログラムだという事を忘れ、まるで自分の子供の様に心配している。だがユイは私達の方へ振り返り、ぎこちない笑顔を見せてフェイタルサイズと対峙した。するとフェイタルサイズはユイ目掛けて巨大鎌を振り下ろした。

「あつー！」

アスナちゃんが思い出したように声を上げた。そうなのだ。ユイはAIであるが故、『紫色のシステムウィンドウ<<Immortal Object>>（破壊不可能物体）』が出現した。

ユイはゆっくりと宙へ浮き上がり、力を出すように体が光ると白いワンピース姿になり、火炎を生み出す。その火球を作るとその中大降りの火焰の剣を生み出し、ボスへ一振りし、火球に包み、消滅させた。

そして、またゆっくりと降りてくるとユイは泣きそうに困ったような笑顔を私達に向け、こう言った。

「パパ、ママ、エミリーさん。全部思い出したよ」

私達は安全地帯に移動し、ユイは黒い大きな石で出来た様な箱の上に座ると話し始めた。

## 第18話

「ユイちゃん、思い出したの？今までの事……」

「はい。アスナさん、キリトさん、お母さん……全て思い出しました」

ユイのその言葉を聞いてキリ君とアスナちゃんは驚きながらも複雑な顔をしている。私は、お母さんと呼ばれドキッとしてしまった。

まさか、私が母としてプログラムされていると思わなかったのだ。アキさんは随分酷いことをしてくれたものだ。

ユイはこのSAOのシステムの説明をして、自分の存在がどういったものなのか思い出したと語り、そこでこう述べた。

「プレイヤーに違和感を与えないように私には感情模倣機能が組み込まれています。偽

物なんです。この涙すらも・・・」

そう言い、ユイは涙を流して謝っていた。

「でも、記憶がなかったのは？ AIにそんなこと起こるの？」

「2年前正式サービスが始まった日、カーディナルは何故か私にプレイヤーとの干渉を一切禁止と言いました。私はやむなくプレイヤーのメンタル状態のモニタリングだけが続けたんです。」

状態は最悪と言ってもいいものでした。恐怖・絶望・怒りと言った負の感情に支配された人々。時として狂気に陥る人もいました。本来であれば直ぐにでもそのプレイヤーのもとに赴かなければならない。

でも、人に接触するのを許されない。私は徐々にエラーを蓄積させ崩壊していきまして・・・でもある日、他のプレイヤーとは大きく異なるメンタルパラメーターを持った3人のプレイヤーに行きつきました。

喜び・安らぎ・・・でもそれだけじゃない・・・。3人の傍に少しでも近づきたくて私はフィールドを彷徨いました」

「それで、22層の森に？」

「はい。キリトさん、アスナさん・・・お母さん!・・・私ずっと、3人に会いたかった。おかしいですよ?そんな事、思えるはずなのに・・・。私、ただのプログラムなのに」

「ユイ、貴女はただのプログラムなんかじゃないのよ。ユイを生み出したお父さんの思いが詰まっているの。そして、私の事も記憶(プログラム)されていたのね。きっと私の事も貴女は判っているのでしょ?」

「はい。このカーディナルで教育を受けていたツバサちゃんや他のモンスター達が羨ましかった。私だってお母さんに会いたかったのに!!」

「ごめんなさいね。お父さんとお母さんがちよつと喧嘩していてね・・・お母さん、途中で出て行っちゃったから」

「でも、こうして会えて嬉しいですよ」

「ユイ、これから貴女はどうしたい?」

「パパとママとお母さんとずっと4人で一緒に居たいです」

「そう。わかったわ」

「でも・・・」

「そうね。このままだと、ユイはカーディナルから異物として消去されてしまうわね」

「なんだって!」

「キリ君、大丈夫。この黒い大きな箱は、GMがシステムに緊急アクセスする為に設置されたコンソールなの」

私とそのコンソールに触れるとキーボードとモニターが現れた。

「SystemCommand! Access GameMasterID: EMI  
Y!!」

コマンドを叫ぶとモニターにアクセスコードが入力される。

「MoveCoreProgram!《MHCPool》CordName: YUI  
o PlayerID: kirito of LocalMemory!!」

そうすると、ユイの体が透けていき笑顔のままユイは姿を消した。

「これで、ユイのコアプログラムはキリ君のナーヴギアのローカルメモリに移動されたわ」

私の手元に涙型の水色のクリスタルが下りて来た。それをアスナちゃんに渡してあげる。

「お姉さん！ありがとうございます!!」

「いいのよ。可愛い子供と従弟夫婦の為ですもの」

アスナちゃんは泣き笑いをして私に抱き付いてきたが、キリ君は不安そうな顔をしていた。

「キリ君？どうしたの？」

「姉さん・・・大丈夫なのか？カーディナルにアクセスしちまって」

「ああ、恐らく大丈夫だと思うわ」

「なんでそんな事が言えるんだよ！」

「うん・・・まあ、そのうち話せる時が来ると思うわ。それまでは、秘密。この事は口外しないで頂戴ね」

「ああ、そんなの当たり前だよ!!姉さんの存在自体がイレギュラーなんだ。誰にも話せ

るわけがないだろう！」

「さっ、私達も戻りましょうか」

「ああ（はい）！」

私達は転移結晶ではじまりの街へ戻った。

---

私達が戻るとシヨウさん、ユリエールさん、シンカーさん、キバオウさんが待っていてくれた。

「お帰りなさい。ご無事で良かった」

「ホンマや！御3方はワイらの命の恩人や!!」

「あれ？ユイちゃんは？」

「ああ、あの子は元いた所に戻りました」



「これからこの教会でちよつとした食事会などをしようと思つてます。是非ご一緒してください。あなた方のお蔭で私達は無事に戻つてこられたのですから」

「あら、それは素敵ですね。キリ君とアスナちゃんも参加していつたら？ 私は少し用事を思い出したので失礼しますけど」

「えっ！お姉さんは参加されなんでしょうか？」

「ええ。確認したいことがあるから」

「姉さん、危なくはないんだろうな？」

「大丈夫よ。全く危険はないから安心してちょうだい」

「わかった」

私はツバサを連れてその場を離れた。勿論行先はヒースクリフの処である。その前に彼が何処にいるのか確認すると、彼は自宅にいた。なんとまあ、用意周到ですこと。きつとさつき起きたことも見ていたに違いない。

それなら話が早くて助かる。早速、ギルドメツセージで連絡をとると『待っている』とすぐに返事が届いた。

ヒースクリフの自宅がある層へ着くと、転移門の前に本人が迎えに来ていた。

「早かったな」

「わざわざ此処まで来なくてもいいのに……」

「君に早く会いたかったのだよ。大丈夫だ。この層は最近過疎が進んできている。K o bのホームがここにあったころはかなり賑わっていたのだが、今はこの通りさ。それに、君はギルドメンバーだ。言い訳はつくだろう？」

「まあ、そうですね」

特に会話らしいものもなく、ヒースクリフの自宅に到着した。書齋へ案内されると、そこはカーディナルへのアクセスルームになっていた。

「ここは、私が一人でプレーヤー達を観賞するために作った部屋だよ。君の動向が気になって、先ほどの事も此処で見っていた。まさか、ユイが抜け出すとは思わなかった

が・・・」

「ユイはカーディナルが干渉禁止を言い渡したと言っていました、あれは貴方が指示したのではないの？」

「ああ無論だ。・・・だが、まさかあの子がモニタリングをしていたとは思わなかった。AIとしてプログラムに忠実だったのだな」

「当然よ。なぜ、干渉禁止をしたのか理由をきちんと話さなければ、MHCPとしての役割を全うしようとするに決まってるじゃない」

「私はプレーヤー達のメンタル状況も調査していた。酷い状況になるのは判っていたからな。そんな酷い状況を可愛いユイに見せたくなかつたのだ」

「結果、最悪な状態になったって事ね。大事な娘を取られちゃったんだもの。それに私がかーディナルからユイを切り離れた時、私に手出しできないようにしたのも？」

「里親に出したと思う事にしたよ。キリト君ならユイを可愛がってくれるだろう。実際に君の娘なのだ。忘れ形見の様なものだしな。それと私は何もしていないよ。カーディナルが君の存在を否定しなかつたって事だろう。」

「・・・私は本当に酷い人と一緒になったものね」

「後悔しているかい？」

「いいえ、それは無い。あえて言うならば、自分の男を見る目の無さに呆れたって感じか

しらね」

「碌でもない男ですまない」

「謝られてもね・・・」

書齋を出て、客間へ戻ると私はストレージからティーセットを出し、紅茶と珈琲をいれ一息ついた。

「明日、KorbとMTD合同のボス攻略会議を開く。おそらく今回も2ギルド合同で偵察隊が組まれるだろう」

「犠牲者が出ないことを祈るしかないわね」

「今度の敵はクォーターポイント最後のボスだ。強敵だ」

「全く・・・ボスたちの強さを設定したのは貴方じゃないの？」

「作ったのは私だが、強さを決めてるのはカーディナルだ。私は手出ししてないよ。プレーヤー達、攻略組の強さを平均してカーディナルがボスの強さを決定しているのだ」

「へー。カーディナルは本当にお利口ね。このゲームがクリアされたら崩壊させてしまおうのでしょ？」

「そのつもりだ。サーバーからも消去されるようにしてあるよ」

「他の分野へも色々役にたちそうなのにな」

「まあ、いいではないか。このゲームは私の世界だ。私がどうしようと・・・」

「ふーん・・・貴方一人で全部作った訳ではないのに。色々な人が関わっていたのよ？その人たちの事は蔑ろにして・・・」

「自分が死ぬる口実が欲しかったのかもしれないな。君に逢うにはこうしなければ会えなかったのだから」

「判ったわよ。私も貴方の罪と一緒に背負いませよ。世紀の大悪人様（笑）」

「相変わらず君は厳しいな」

「甘やかすとまた、とんでもない事をやりそうですからね。こちらも厳しく接しないとね」

「耳が痛いな・・・（汗）」

本当に此処にいと色々思い出す。楽しかった3人での生活を・・・。

「残念だわ。折角懐かしい我が家にいるって感じなのに、まるで他人の家にいるみたい。貴方のそのアバターのせいね」

「・・・むう。君に逢える確証がなかったからな。確実に逢えると分かっていたのなら此処にいる時ぐらいアバターを戻せる設定にしたのだが・・・」

まあ、ギルド設立当初は資金が足りなかったもので此処をギルドホームにしていたからな。皆がいる前で本来の姿に戻ってしまつては正体がばれてしまう」

「まだ完全に許した訳ではないから、丁度いいのかもしれないわね（クスツ）」

「君がこんな人を弄るのが好きな性格だとは思ってもよらなかった」

「そうね。現実世界では誰でも猫を被ると思うわ。私もその一人だつたつて事ね。私の実家の事は分かっているでしょ？あの環境じゃ、やりたい事がハッキリしていたとしても容易じゃない。」

親の前でも猫を被つて良い子を演じてないと追い出されちゃうもの。聞き分けの良い子だったからこそ、あの大学にも行けたのよ。でなければ貴方に逢う事もなかったわね」

「その点は感謝しなければならぬな」

「さてと、確認も終わつたことですし。私は自分の宿へ戻りますわ。いつまでも思ひ出話していても仕方がないものね」

「サバサバしているとところは変わらないか。・・・また転移門まで送らせてくれ」

「ええー、遠慮しまーす♪」

「・・・此処にいる君は本当に結衣菜なのか判らなくなる時があるな・・・まあ、それが君の本性だったって事か」

「あら？私に対する気持ちじゃ覚めたかしら？」

「いいや、あの頃より更に楽しいな。最近では弄られてる自分も嫌いじゃないと解ったしな」

「うふふ。恋は盲目とよく言つたものね」

「大人しくお淑やかな君が懐かしく思う時もあるぞ？」

「あら、それは悪うございませうね。此処では強気に生きてやりたい事やらないと後悔する世界ですからね」

「それもそうだな」

「じゃ、戻りますわ。また近いうちに逢う事になりそうですけど」

「ああ、宿まで気を付けてくれ」

私は手を振りながら彼のホームを後にした。

宿へ戻ると丁度アスナちゃんからメッセージが届いた。食事会に参加したことで2

人とも気が紛れたらしい。キリ君はユイの事で滅入っていたのだろう。また明日遊びに行くとは返信しておいた。

今日はアスナちゃんと一緒にお菓子を作ることになった。キリ君は暇つぶしも兼ねて釣りをしに湖まで行っている。

「キリト君、今日こそ大物釣って来るって言ってましたけど・・・大丈夫かな？」  
「え？それは？」

「湖が近いからそこへ釣りに行くんですけど、最近手ぶらな事が多いですよ」  
「あら、じゃあニシダさんにでも穴場を教えてもらおうかしら♪」

「ニシダさん？」

「ええ、随分前に知り合ったのよ。釣りスキルの高いおじさまよ」

「へー」



そんな話をしながらクツキーだのケーキだのを作っていた。この間、色々な物の耐久値が高くなるレアアイテムを手に入れたのだ。

それは料理にも使え、調理中に使用するとあら不思議。出来上がった料理の耐久値が上がるため日持ちする様になるのだ。私はこれを利用して調味料を作り置きしている。楽しくお菓子も作り終え夕方、キリ君が帰宅した。

「ただいまあ」

「お帰りなさい！あら、お客様？」

「ああ、湖で知り合つてな。こちらはニシダさん。で、彼女が俺の妻のアスナ。隣にいるのが俺の姉のエミリーです」

「ニシダさん!!」

「おお！エミリーさんじゃないですか！久しぶりですなあ。いやあ、キリトさんはエミリーさんの弟さんでしたか!!」

「アスナちゃん、こちらがさつき話していた釣りスキルが高いニシダさんよ」

「なんだ、二人は知り合いだったのか」

「ニシダさんとはフレンドなのよ♪」

「さあ、こんなところで立ち話もなんですから、どうぞ入ってください」

ニシダさんをリビングに通し、アスナちゃんが特製のお茶を出してくれた。話を聞くとキリ君が全然釣れていないのを見て、つい声をかけたそう。話をしていくと釣った魚の食べ方の話になり、調味料の（特にお醤油の）話題になりキリ君が心当たりがあると云ったそう。

ニシダさんから頂いたお魚たちを調理し、ご馳走が並んだ。キリ君は遠慮しないでバクバク食べていた。

「いやあ、堪能しました。まさか、この世界に醤油があつたとは！」

「此方がお醤油です。自家製なんです。どうぞお持ちになつて♪ちよつと特別なので日持ちしますわ。使いきるまで持つはずです」

「よろしいんですかな？」

「遠慮なさらずに。こんなお魚をたくさん頂けたのですから♪」

「そうですか？じゃあ頂きます」

食事も済み、お茶を飲みながら会話も進む。

「釣りスキルお高いんですね。キリト君なんか、ろくに釣ってきた試しが無いんですよ」

「この辺の湖は難易度が高すぎるんだよ」

「いやあ、そうでもありませんよ。難易度が高いのはキリトさんが釣っておられたあの大きい湖だけです」

「っあは！」

「クスッ」

「なっ！なんでそんな設定に！」

「そっ！それです!!あの湖にはヌシがおるんですわ」

「「ヌシ!?」」

「ええ、私も何度かヒットさせたことがあるんですがね……。物凄い力で竿ごととられてしまいました」

「うんうん！」

アスナちゃんは興味津々で楽しそうに、キリ君は胡散臭そうな顔をしてニシダさんの話を聞いている。

「そこで、物は相談なんですけど……。キリトさん！明日、ヌシ釣りを手伝っていただきたいのです!!」

「へっ?」

「私の筋力パラメーターでは、ヌシを引き上げることが出来ません」

「!もしかして、釣竿のスイッチ!!」

「ええ、当たりを私が引いて完全に食いついたらキリトさんに釣竿を渡して釣り上げてもらいたい!」

「面白そうですね!」

「考えましたねえ。いいじゃない。キリ君やりなさいよ!」

「ええー」

「何その反応……いやあねえ……そんな話を聞いたらヌシがどんなヤツか見てみたいじゃない!」

「そうですねえ〜お姉さん♪」

「2人にはかなわないな……はあ」

「じゃあ、お願いしてもよろしいですか?」

「はい、承りました」

「良かった。これで、念願叶いますな！わっはっは!!」

ニシダさんは釣りをする時間などをキリ君に伝えて帰って行った。  
私も自分の宿屋へ帰り、ゆっくり休むことにした。

翌朝、湖に行つてみると大騒ぎになっていた。大弾幕に『がんばれニシダ!』『又シを釣れ!』とか色々書かれていた。ニシダさんの仲間内で連絡しあっていたのだろう。

「おいおい・・・はあ」

「皆又シの事知ってたんだねえ！」

そう呟いたアスナちゃんは正体がバレない様に薄いコートを着てシヨールを頭から被っていた。

「エミリーさんだ！お久しぶりですね。最近では攻略組へ行かれてしまったからお会いできなくて寂しかったですよ！」

「あら、ごめんなさい。久々に休暇を頂いたので、顔を出しましたわ♪」

ニシダさん経由でお友達になった人たちが私の近くへ来たので、キリ君たちから少し離れた。するとニシダさんが声を張り上げ開催宣言をした。

「ええ、それでは本日のメインイベントを決行します」

すると、観客から声援が送られた。

「キリトさん、お願いしますよ」

そう言ったニシダさんは左手には釣り餌を持っているが、モンスターでトカゲの大きい奴だった。それを見たアスナちゃんは引きつり、キリ君は「どれだけ大物なんだよ……」とぼやいた。

釣りスキルを立ち上げ餌を付けた竿を思いつきり振り、釣りを開始した。周りからは『おおー!』などの声が上がった。

当たりを引くまでニシダさんはずっと耐えている。釣りとは忍耐力がいるのだ。

そして当たりがあり、竿の先がピクリと動いた。それを見たキリ君はニシダさんに近づき声を掛けた。

「あつ、あの・・・きたんじゃ・・・」

「まだです」

再び竿の先が当たりを引いたことを知らせた。

「ニシダさん」

「なんの、まだまだ」

すると再び大きく竿の先が引つ張られた。それを確認したニシダさんは

「今だ!!」

そう叫び、再びスキルを上げ竿を強く引つ張った。そして、スキルが切れた瞬間キリ君に釣竿を渡した。渡されたキリ君は、少し照れながらもスイツチと言いながら釣竿を受け取った瞬間大きく引つ張られた為、

「スツ、スイツチイ~~~~!!」

な感じでズルズルと湖に落ちる手前まで引つ張られたが、なんとか踏みとどまり踏ん張つて又シとの竿ひき勝負をする。「コノヤロー!」などと言いながらキリ君は釣竿をびっぴりながら走ると、又シの影が浮かび上がってきた。

それを見たアスナちゃんが、見えたよと言って湖の淵へ皆と一緒に駆け寄った。すると、又シが顔を出しそれを見たキリ君以外は湖から走つて離れて行つた。その様子をキリ君は「なんだよ!おい!」と焦っている。

その瞬間、釣り糸が切れキリ君は「あああああ!」と叫びながら湖の淵へ駆け寄つた。それを見た私は遠く離れた所から、キリ君に声を掛けた。



「キリくん！危ないよ〜♪」

「何が！っ？なんで姉さん武器構えてる？」

キリ君が此方へ向いて聞いてきた瞬間、湖からザバーンとまるで間欠泉の様に水をまき上げヌシが飛び出してきた。キリ君の真上にヌシと言うよりモンスターが目を光らせ、ギャーと叫んだ途端キリ君は慌てて私達の方へ向かって俊敏値全開で走り出した。アスナちゃんの後ろへ隠れるようにキリ君は怒ってアスナちゃんに叫んでいた。

「ずっとずるいぞ！自分だけ逃げるなよ!!」

「あははは」

「きつ、キリトさん!!」

ニシダさんがそう叫んだところで、ヌシはこちらへ向かってきた。

「陸を走ってる・・・肺魚なのか？」

「キリトさん!!呑気な事をいつとる場合じゃないですよ!!早く逃げんと!!」

「ああ、そうですね・・・」

皆さんが慌てているが、私はそんな皆さんの姿が可笑しくてクスクス笑いながら、弓を構えソードスキルを立ち上げた。キュインと音をたてながら矢は又シの頭部に刺さった。又シは悲鳴を上げてその場に留まりもがいていた。

「あら、ごめんなさい。ちよつと火力が足りなかったわ。アスナちゃん！後よろしくね〜♪」

私がそう叫ぶと逃げていた観客の皆さんが『えっ？』と言う顔をしてアスナちゃんを見ているが、アスナちゃんは

「はーい！任されましたあ！」

と返事をした後、羽織っていたシヨールとコートを剥ぎ私服でレイピアを構えてスキルを立ち上げること無く又シに止めを刺した。

すると大歓声が上がリ、アスナちゃんに皆が駆け寄った。握手を求める人など様々な反応だが、まるでアイドルが突然現れた様な感じだった。

「お疲れ！」

キリ君がアスナちゃんにそう声を掛けたところで立ち止まった。私も視界にメッセが届いた知らせが入った。恐らく同じ内容のメッセだろう。

メッセを見るとヒースクリフとあり、開くとギルド本部への招集だった。